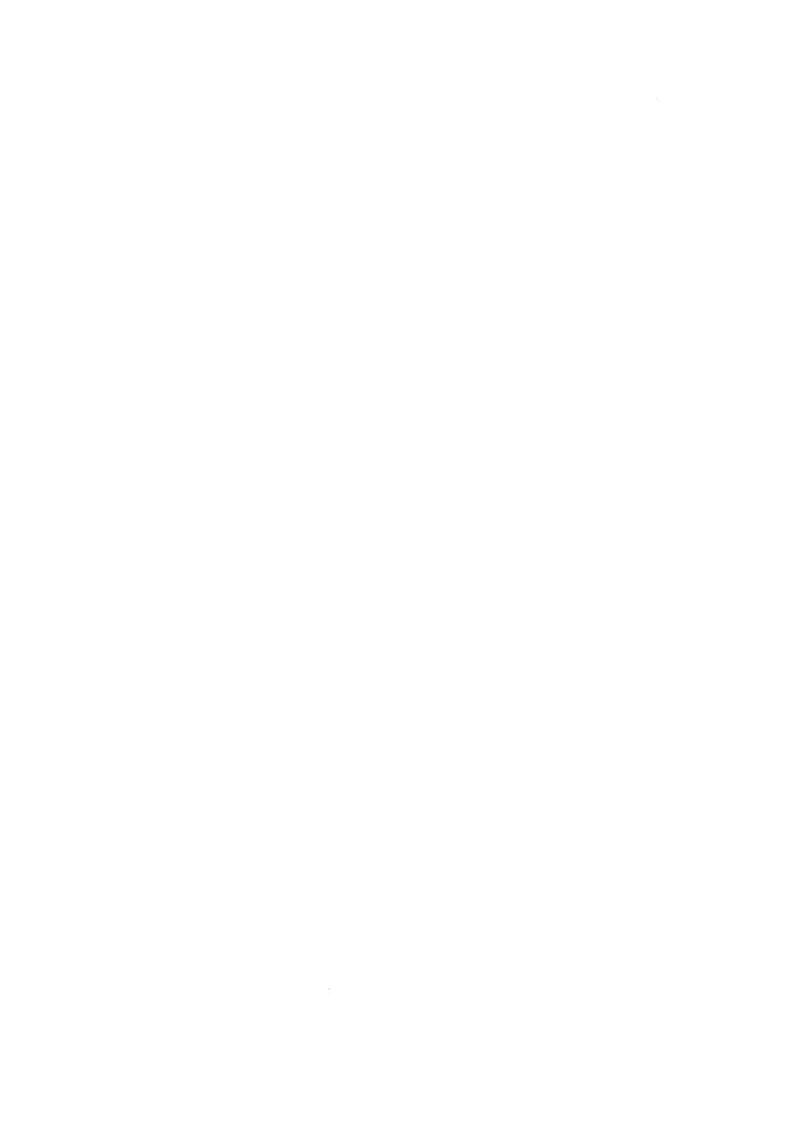
### 松浦市文化財調查報告書 第19集

# 松浦市内遺跡確認調查(4)

史跡松浦党梶谷城跡確認調查報告書

2003

長崎県松浦市教育委員会





## 松浦市文化財調查報告書 第19集

# 松浦市内遺跡確認調查(4)

史跡松浦党梶谷城跡確認調查報告書



2003

長崎県松浦市教育委員会



松浦市位置図

### 発刊にあたって

このたび、昭和46年9月14日に長崎県指定史跡になった松浦党梶谷城跡の確認調査の報告書を刊行することになりました。

この梶谷城跡は、文献によると松浦氏の居城跡で勝谷城・加治屋城とも記されています。しかし、その築城については平安時代末、源(松浦)久によるものといわれていますが、その年代については延久元年(1069)・嘉保2年(1095)・久安元年(1145)などの諸説があり定かではありません。

そこで、教育委員会では、平成元年5月に学識経験者等による史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会を設置し、保存・活用及び整備に関する意見をいただき、平成2年度と平成4年度に史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定報告書を作成しました。報告書では「史跡として文化財的視点からの保存及び教育的視点からの学習を根底に置きながらも、地域の活性化・個性ある地域づくりのシンボルとして配慮し、魅力ある保存整備を図る必要がある。」と記しています。

そんな状況下で、梶谷城跡の発掘調査は梶谷城に関する基礎資料を得るために平成3年度から平成6年度までの4年間の継続事業として実施しました。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々に対し心から感謝を申し上げますとともに、史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会・長崎県教育委員会をはじめ多くの人たちのご指導、ご協力を賜りました。ここに厚く感謝申し上げまして発刊のご挨拶といたします。

平成15年3月31日 長崎県松浦市教育委員会 教育長 黒 川 壽 信

- 1. 本書は、松浦市教育委員会が平成3年度から6年度にかけて松浦市の単独事業として実施した長崎県松浦市今福町東免字城山2286番地他に所在する史跡松浦党梶谷城跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査の事業主体は松浦市教育委員会で、調査期間は次のとおりである。

第1次調查 平成3年11月18日~平成3年12月27日

第2次調查 平成4年12月8日~平成5年1月31日

第3次調查 平成5年11月29日~平成6年2月4日

第4次調查 平成6年5月16日~平成6年7月14日

3. 調査関係者は以下のとおりである。

調查指導 史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会委員

西谷 正 九州大学名誉教授

中村 質 元九州大学教授

外山幹夫 元長崎大学教授

岡本 均 西日本短期大学教授

吉福清和 県文化財保護指導委員

金子武巧 元松浦市文化財調查委員

福永 昭 松浦市文化財調查委員

宫本勝行 松浦市文化財調查委員

久家幸一 元松浦市文化財調査委員

松浦市教育委員会 黒川壽信 教育長

和田光正 生涯学習課長(平成14年度~)

中田敦之 生涯学習推進係長・兼社会教育主事 (調査・報告書担当)

内野 義 現水産課主事(第1次調査遺構実測担当)

明石拡子 生涯学習課主事 (報告書·遺物実測担当)

調查協力 本田秀樹 長崎県教育委員会学芸文化課文化財保護主事(地形測量担当)

- 4. 本書の執筆は、分担で行った。各項の執筆者名は文末に記した。なお、第Ⅰ章-1の史跡梶谷城 跡遺構調査報告は昭和53年度の報告で長崎大学外山幹夫教授(現シーボルト大学教授)と県立長 崎西高等学校吉福清和教諭(現世知原町山口神社宮司)によるものを掲載した。また、第Ⅲ章の 「梶谷城」石積み遺構についての所見は橿原考古学研究所北垣聰一郎客員教授に現地を視察してい ただき玉稿を賜った。
- 5. 本書の編集は、中田による。

## 目 次

第 I 章 はじめに
1. 史跡梶谷城跡遺構調査報告
2. 調査に至る経緯8
3. 梶谷城跡の地理的環境11
4. 梶谷城跡の歴史的環境13
第Ⅱ章 調査
1. 調査経緯
2. 発掘調査18
(1)館跡地区18
① 遺 構21
② 遺物25
(2)郭跡地区35
① 遺 構40
② 遺 物47
第Ⅲ章 「梶谷城」石積み遺構についての所見55
第Ⅳ章 中世山城の分布について68
第V章 梶谷城跡の保存整備について ·······75
第Ⅵ章 まとめ81

## 挿 図 目 次

第1図	梶谷城要図7
第2図	梶谷城跡周辺地形図(1/1,000)9~10
第3図	松浦市地質図
第4図	梶谷城跡周辺図15
第5図	館跡地区地形測量図 (1/600)
第6図	館跡第7トレンチ配石実測図 (1/40)21
第7図	館跡石垣立面図 (1/60)22
第8図	第2次調査 II 層検出状況 (1/80)23
第9図	館跡トレンチ土層図 (1/80)24
第10図	館跡出土遺物①(2/3)25
第11図	館跡出土遺物②(2/3)26
第12図	館跡出土遺物③ (1/3)28
第13図	館跡出土遺物④(1/3)28
第14図	館跡出土遺物⑤(1/3)29
第15図	館跡出土遺物⑥(1/3)30
第16図	館跡出土遺物⑦(1/3)31
第17図	郭跡地区地形測量図 (1/600)37~38
第18図	副郭第1・2トレンチ土層図 (1/80)39
第19図	副郭第3トレンチ土層図 (1/60)39
第20図	副郭北側虎口実測図(1/40)40
第21図	副郭集石遺構実測図 (1/40)41
第22図	集石遺構内基礎実測図 (1/4)42
第23図	集石遺構出土遺物 (1/3)42
第24図	主郭第1~7トレンチ土層図 (1/80)
第25図	主郭第1~4トレンチ平面図 (1/90)
第26図	主郭第8トレンチ平面図 (1/60)45
	主郭第8トレンチ柱穴実測図 (1/30)45
第28図	主郭第8トレンチ土層図 (1/40)45
第29図	副郭出土遺物①(2/3) 47
第30図	副郭出土遺物②(1/3)
第31図	主郭出土遺物① (1/3)48
第32図	主郭出土遺物② (1/3)49
第33図	主郭出土遺物③(1/3)50
第34図	主郭出土遺物④ (1/3)51
第35図	梶谷城跡写真撮影図 (1/1,000)61~62
第36図	梶谷城跡周辺の城郭分布図73~74

# 図 版 目 次

図版 1 主郭北側石垣 (北より)63	図版36-1館跡石垣(西より)67
図版 2 主郭東櫓台 (南より)63	図版36-2館跡石垣(西より)67
図版 3 主郭東側石垣 (南より)63	図版37 館跡石垣(南東より)67
図版 4 主郭南側石垣(南より)63	図版38 館跡石垣(西より)67
図版 5 主郭南側石垣 (南より)63	図版39 梶谷城跡遠景(南東より)85
図版 6 主郭南側石垣(南西より)63	図版40 梶谷城跡遠景(上空より)85
図版 7 主郭南側石垣(南西より)63	図版41 梶谷城跡遠景(西より)85
図版 8 主郭南側石垣(南西より)63	図版42 梶谷城跡遠景(西より)86
図版 9 主郭西側石垣 (南より)64	図版43 館跡石垣 (東より)86
図版10 主郭西櫓台 (南より)64	図版44 館跡通路(南より)86
図版11 主郭西櫓台(北西より)64	図版45 館跡通路(北より)86
図版12 主郭西櫓台 (西より)64	図版46 館跡通路(北西より)86
図版13 主郭西櫓台(北より)64	図版47 館跡石垣(南東より)86
図版14 主郭西櫓台(北より)64	図版48 館跡石垣(西より)86
図版15 主郭大手門石垣(西より)64	図版49 館跡石垣(東より)86
図版16 主郭大手門石垣(北より)64	図版50 館跡石垣(西より)87
図版17 主郭大手門石垣(北より)65	図版51 館跡第2次調査状況87
図版18 主郭大手門石垣(南より)65	図版52 館跡第2次調査状況87
図版19 主郭北側石垣 (東より)65	図版53 館跡第7トレンチ配石検出状況87
図版20 主郭北側石垣(北より)65	図版54 館跡石垣(南より)87
図版21 主郭北側石垣(北西より)65	図版55 館跡石垣(東より)87
図版22 主郭北側石垣(北西より)65	図版56 館跡C-3区石垣(北西より)87
図版23 副郭西側虎口(南西より)65	図版57 館跡石垣(東より)87
図版24 副郭西側虎口(南西より)65	図版58 副郭南側石垣(南西より)88
図版25 副郭西側石垣(西より)66	図版59 副郭西側虎口(南西より)88
図版26 副郭西側石垣(南東より)66	図版60 副郭西側石垣(南西より)88
図版27 副郭西側石垣(西より)66	図版61 副郭西側石垣 (北より)88
図版28 副郭西側石垣(北より)66	図版62 副郭西側石垣 (南より)88
図版29 副郭北側石垣(西より)66	図版63 副郭第3トレンチ調査状況(東より) 88
図版30 副郭北側虎口(北東より)66	図版64 副郭第3トレンチ調査状況(北より) 88
図版31 副郭東側石垣(南東より)66	図版65 副郭第3トレンチ調査状況(南より) 88
図版32 副郭竪堀状況 (東より)66	図版66 副郭西側石垣切断状況(北より) …89
図版33 館跡大手口石垣(南西より)67	図版67 副郭狼煙穴? (北より)89
図版34 館跡石垣(南東より)67	図版68 副郭西側石垣 (西より)89
図版35-1館跡石垣(南西より)67	図版69 副郭西側石垣状況(西より)89
図版35-2館跡石垣(南より)67	図版70 副郭北側石垣(北東より)89

図版71	副郭北側石垣 (西より)89	図版 99 主郭北側石垣 (西より)93
図版72	副郭北側石垣 (北より)89	図版100 主郭北側石垣 (北より)93
図版73	副郭北側虎口(北東より)89	図版101 主郭北側石垣(北西より)93
図版74	副郭北側虎口 (西より)90	図版102 主郭天守台(北より)93
図版75	副郭北側石垣(南より)90	図版103 主郭第1トレンチ検出状況(南より)93
図版76	副郭東側石垣(南東より)」0	図版104 主郭第2トレンチ検出状況(南より)93
図版77	副郭東側石垣(南東より)90	図版105 主郭第3トレンチ検出状況(東より)93
図版78	副郭竪堀(西より)90	図版106 主郭第4トレンチ検出状況(東より)94
図版79	副郭竪堀 (西より)90	図版107 主郭第4トレンチ検出状況(西より)94
図版80	副郭竪堀(東より)90	図版108 主郭第6トレンチ検出状況(南より)94
図版81	副郭竪堀(東より)90	図版109 主郭第8トレンチ検出状況(北より)94
図版82	副郭集石遺構(南西より)91	図版110 主郭第3トレンチ遺物出土状況94
図版83	主郭北側石垣 (北より)91	図版111 主郭第4トレンチ柱穴内遺物出土状況 94
図版84	主郭東櫓台(北より)91	図版112 主郭大手門柱穴内遺物出土状況94
図版85	主郭東櫓台 (東より)91	図版113 調査風景94
図版86	主郭東櫓台(南東より)91	図版114 館跡出土遺物①95
図版87	主郭南側石垣 (北より)91	図版115 館跡出土遺物②95
図版88	主郭南側石垣(東より)91	図版116 館跡出土遺物③96
図版89	主郭南側石垣(南西より)91	図版117 館跡出土遺物④97
図版90	主郭南側石垣(南より)92	図版118 館跡出土遺物⑤98
図版91	主郭西櫓台(南より)92	図版119 館跡出土遺物⑥99
図版92	主郭西櫓台(南より)92	図版120 副郭出土遺物①100
図版93	主郭西櫓台(北西より)92	図版121 副郭出土遺物②101
図版94	主郭西櫓台(北より)92	図版122 主郭出土遺物①102
図版95	主郭大手門 (東より)92	図版123 主郭出土遺物②103
図版96	主郭大手門石垣(南東より)92	図版124 主郭出土遺物③104
図版97	主郭大手門石垣(西より)92	図版125 主郭出土遺物④105
図版98	主郭西櫓台及び大手門(南より) …93	

# 表 目 次

表 1	梶谷城跡周辺遺跡等一覧表15	表5	郭跡地区出土遺物計測表・観察表53
表2	館跡地区出土遺物計測表32	表6	郭跡地区出土遺物観察表54
表3	館跡地区出土遺物観察表33	表7	梶谷城跡周辺の城郭一覧表72
表4	館跡地区出土遺物観察表34		

### 第1章 は じ め に

#### 1. 史跡梶谷城跡遺構調査報告

松浦市今福町の城山に構築された梶谷城は、古代末から中世における松浦氏の居城として、極めて 重要な位置と性格を示すものである。この事情にかんがみ、梶谷城跡はその山頂部の本丸跡を中心と して、その主要部分は早く県の史跡に指定されている。

この梶谷城の史跡を有する松浦市当局は、この城山のもつ歴史的重要性を考慮され、併せてこの城山をめぐる優れた景観を、今後の市行政の中で最も適切に保存・利用したいという観点から、城跡の調査と、今後におけるありかたについての意見を求められた。

本報告は、上記の求めに応じ、去る昭和54年1月25日~26日の2日間実施した城跡の調査と、これを基礎として、その諮問に答えようとしたものである。

#### (1) 地理的環境及び歴史的背景

長崎県北部に展開する北松浦半島の広大な溶岩台地が、その北端で伊万里湾に没するあたりには、白井岳(360m)、石倉山(313m)など、大小いくつかの残丘が見られる。梶谷城は、その残丘の一つ、松浦市今福町の城山(196.7m)に構築された山城である。

この城山の東側は、急斜面を以て伊万里湾に没するが、比較的傾斜の緩やかな西側の山麓には、今福川、人柱川を中心として、今福川の集落と耕地が展開する。

この城山を中心とする四囲の景観は変化に富み、その眺望はまことにすばらしい。

このように北松浦半島の北端に位置し、西肥前を睥睨する梶谷城の歴史的背景もまた豊かである。

松浦家の家譜である『松浦家世伝』その他によれば、延久元年(1069)源久という者が、摂津国渡辺荘から肥前国松浦郡志佐郷今福(現、松浦市今福町)に下向土着して宇野御厨検校及び検非違使となり、梶谷城に拠ったが、これが松浦氏を称してその開祖となったとする。このことを裏付けるかのように、宛陵寺(今福町)に源久の墓と称する墓碑がみられる。ところが源久の下向年代については、他に嘉保2年(1095)、あるいは久安3年(1145)説もあって一致しない。さらに『平家物語』には、陸奥の安倍宗任が九州に配流され、その後裔が松浦氏となったとしている。

最近の研究によれば、寛仁3年(1019)北九州を襲った刀伊が帰途松浦地方にも侵入したが、この時松浦地方で防戦した者のリーダーに、前肥前介源知という人物がいたことが『小右記』にみえる。源姓で一字名であるところから、これこそ松浦氏の祖ではないかとの憶測が持たれている。肥前の国司(介)上りの人物が今福方面に土着して武士化したとみることは、当時における豪族的領主の成立のパターンとして極めて可能性に富むことといえよう。

いづれにせよ今福の地が、初期の松浦氏の本居であり、その後、一族が肥前西部一帯は勿論、一部は遠く壱岐にまで発展する中にあって、この地を先祖由緒の地として重視したらしいことは、その後の松浦氏の家督である松浦勝・盛・親・定等の墓がここに点在することからも十分窺われる。

梶谷城が今福に本居を置いた初期の松浦氏の居城であったことはほぼ確かである。しかしその築城者は勿論、築城年代については、共にこれを示す当時の史料を欠いており、明確にすることはできない。先の源知の武士的活動が、『松浦家世伝』等の記す源久の延久元年(1069)より50年以前のことであり、若し源知が松浦氏の開祖であるとすれば、梶谷城の築城年代もまた延久元年より以前とみねばならぬこととなる。しかしそれをにわかに断定することは避けねばならない。

平安末期の松浦氏が松浦党と称され、一族が平家に服従していたことは『平家物語』・『源平盛衰記』等によって明らかである。当時の北九州における諸豪族が、各々城を築き、これに拠っていたありかたからすれば、松浦氏もまた遅くとも平安末までのうちには築城していたとみられ、梶谷城もまたこの間に築かれたものであろう。

その後、源久の子とされる直は、久安5年(1149)同じく松浦郡山代(現、伊万里市山代町)に 山寺城を築き、ここに梶谷城から移ったと伝えられる。直は実在の人物であって、『青方文書』によ れば、宇野御厨執行及び弁済使として13年間この荘官職の地位にあった。しかも彼は仁平元年 (1151) 宇野御厨預所下文を得て小値賀島を領有していた。12世紀中期の人物であることからすれ ば、山寺城築城説は時代的には問題ないとしても、小値賀島あたりで活躍した者が、何故この地に築 城せねばならなかったのか、その必然性について多少問題を残すといわねばならない。

平安末平家に服従していた松浦氏は、鎌倉時代に入ると幕府の地頭・御家人となる。鎌倉時代は領主間の合戦も終息し、ほぼ安定した時代であったから、梶谷城もこの間は軍事的拠点としての機能はさしてはたすこともなかったと思われる。しかし元寇に際しては松浦郡もその一部が戦場となったことからすれば、梶谷城もある程度防衛基地としての役割をはたしたとも推定される。

南北朝以降になると、この地方も例外なく合戦の舞台となり、松浦氏は一族、及び他氏との間に激しい抗争を展開することとなる。松浦氏はこの間一族間で松浦一揆等を結び結束を固めた。この間惣領家は漸次南部の松浦郡相神浦(佐世保市)に移住し、延徳2年(1490)大智庵城(同市大野)に拠った。しかし城主松浦政は明応7年(1498)、一族の平戸松浦氏に討たれ、やがて飯盛城(同市相浦・天文4年 [1535] 築城)に移った。しかし平戸の松浦隆信は再度、惣領相神浦松浦親を永禄6年(1563)飯盛城に攻めてついにこれを滅ぼし、一族間における最優位の地位を確定し、戦国大名化を達成した。この間における梶谷城は、どのような位置と性格を示したかについて、確実な史料を欠くが、山寺城に惣領家が居城を移したのが事実であるとすれば、その時期は同氏の出城として機能したと思われる。またその後、相神浦に本居を移した後も、飯盛城主松浦親の墓が今日今福にあること等からすれば、ときに一族他氏等による占拠もあったと推定されるものの、大かの時期、同氏の出城としての位置を保ち続けたものと思われる。そして永禄6年(1563)平戸松浦氏が今福の地もその領国下に編入してからは、当然梶谷城もその支城の一つとされたと思われる。そして近世に入り、元和元年(1615)一国一城令が出され、これによって廃城されたとみられる。

要するに梶谷城については、確実な文献上の明証は欠くが、松浦氏の初期の居城として、おそくとも平安末までのうちに築城されたものであったということが推定される。その後惣領家が本居を他に

移してのちも、その支城としての性格を持ちつつ近世初頭までの4世紀以上の間、断続的ではあるが 城としての機能を保ち続けた長い歴史的背景を有する重要な中世城郭といえよう。

#### (2) 遺構の残存状況

#### ① 残存の概況

梶谷城は、城山(196.7m)の山頂部を南北に長く楕円状に削平して主郭となし、その外周は傾斜地を利用した段築と石塁によって構成されるという極めて立体的なプロッティングを示している。

この主郭部の東側は、急傾斜となって伊万里湾に没し、北側・南側も同様、極めて峻嶮な地形を示すが、ただ一つ西側のみが比較的緩傾斜となっている。この西側は、標高130mのところに一段落があり、いったん扁平な台地となり、この下はなだらかな傾斜をみせながら、点在する溜池を中心とした水田、畑地、宅地が今福の集落地帯へと続いている。この城山の西側の山麓の扁平台地に館跡とみられる「千人桝」と称される個所が認められるが、これはこの城主の日常の生活の場である根小屋(麓小屋)にあたるものと推定され、軍事的拠点としての城と、平時における生活の場としての館とで構成された当時の在地領主のありかたをよく示している。

#### ② 主郭部の遺構

城郭の中心をなす本丸は、地形にそって南北に長く楕円状(80m×30m)に山頂を削平し、この南端に一段高い物見台を配している。

本丸の外周には2段の段築があり、さらにその外周に石塁が本丸を循環する形で周囲を、一部欠落するが、延長 400mにわたってめぐらされ、防禦線を形成している。

城は西側に面し、本丸西部に大手門が設けられている。大手門は石垣を桝型に配し、門の南部に櫓台、そして北部に番台跡がみられ、これを入ると小さな曲輪が配されている。また大手門の外に半壊の石垣があるが、これは外部から大手門を遮蔽する的土土居ではなかったかと推定される。この大手門から山麓の大手口にかけては雁行しながら続くが、この間に他より著しく多くの玄武岩の石塊が散乱しているが、これはある時期、城を防禦した際使用した矢石群ではないかとも憶測される。大手口には列石等の遺存があるが、その推定地から南折して館跡へと接続している。

一方本丸の北側は、大手門から延びた城壁がめぐらされている。この城壁よりさらに北側の、本丸より一段低くなった個所に曲輪が認められる。恐らく二の丸ないし出丸であったと推定される。なおこの曲輪の北隅に水の手が配置されている。

以上のように、城の主郭部は本丸と二の丸の二つの組み合わせによる基本構造で、本丸の一部に物見台を設け、中世城郭としてはやや複雑な構造をもつ大手門が設けられているのが特徴である。先述のように、長年月にわたって利用された城であるだけに、これらの施設はある時期一度に構築されたというより、徐々に修築が加えられたものとみられる。本丸・二の丸等の基本的構成は初期になされたものと思われるが、大手門をめぐる複雑な構造はやや後代になされたものであろう。特に大手門がこれほど巧みに造られたものは中世城郭としては県下に類例をみない。また本丸の一角に物見台を設

けたものとしては、県下には他に直谷城(長崎県北松浦郡吉井町福井・志佐氏の居城)等にわずかに 類例を見出すことができるのみである。

現在、大手門・石塁・物見台等の跡は比較的良く残存している。しかし曲輪内部の平面部は、近年の公園化に伴う造成工事によって残存状況が極めて悪い状態となっている。とくに二の丸に造成された駐車場は、本丸北壁の基部を切断して造られており、城壁の崩壊を促すのみでなく復原を困難なものとしている。

#### ③ 館跡の遺構

本丸の西側斜面を約50m下ると一層緩傾斜となり、微高地となる。ここは現在フモト溜池を中心に 桧造林地及び果樹園が展開する。

館跡は、この台地の山際に沿って南北に幅40m、長さ200mにわたって展開する。その北端は山頂の本丸大手門に通ずる大手口にあたり、ここに列石が残っている。この大手口から南に向って石塁を伴う通路がほぼ直線状に走り、南部はわずかに低くなっている。この通路の東側に館跡が認められる。ここにはコ字型の石壁、石塁、段築等が残っている。とくに館跡南部に残る2個のコ字型の館の石壁の残存状況は良好で、その一辺の長さは14mで、最高部は2mにも及んでいる。かなりの規模の構造物があったことが推定される。この付近が「千人桝」と称されることと併せ、恐らく中世後期の建造にかかるものと思われる。

中世城郭に付属する館跡として、これだけ大規模なものは県下には他に例をみない。松浦氏ならでは構築し得なかったものといえよう。城の城主は、この館で日常生活を営み、合戦に際してはいったんここに兵を集め、それから山頂に登って城を守り、或いはここから他に出陣していたものであろう。当時における地方の豪族のありかたを良く窺わせるものである。

ただ、先述のコ字型の二つの石壁を伴う館以外の他の館群の跡は、桧造林地の中に十数区画わずかにその片鱗を残しているに過ぎない。

なお次に、この館跡から大手口とは別に本丸に向かう別の城山南側には、斜面を切取り造成した小規模の建物跡地がある。ここには相互に離れて2個の井戸跡が認められる。察するにこの建物は、この水の手の番小屋の類であったものであろう。

#### (3) 保存及び環境整備

#### ① 遺構の完全精査

現在梶谷城跡は、本丸・二の丸跡を中心とするその主郭部分が県の史跡に指定されている。史跡地の保存と環境整備の前提として、遺構の調査と、その性格の把握が不可欠であることはいうまでもない。

梶谷城については、従来指定地内外について全般的かつ包括的な調査は行なわれていない。このことが過去の公園化工事において、いくつかの不始末を生む結果となっている。たとえば本丸跡の整備 工事、二の丸跡の駐車場建設、或いは登頂車道の敷設等がそれで、これらの工事は、梶谷城本来の固 有の様相を変えたばかりでなく、今後の調査を阻害する結果を招いている。工事等による人為的損傷をこれ以上進めぬよう配慮がなされねばならない。

今回の調査は、本丸及び二の丸外周の石塁の状況、及び館跡付近の状況等に主眼を置いたもので、城山全体の約4分の1程度に限られたものに過ぎない。それによっても新たに山頂東北の二の丸の外周に石塁、及び二の丸北端に水の手、さらに本丸の西南部の山腹に建物跡、及び二つの井戸跡等を発見する成果を収めることができた。今後さらに調査を加えることによって、石塁・空堀・土塁等々他の関連遺構の発見が期待できると思われる。

城山全体について、早急に、一層詳細で、包括的な遺構の調査確認がなされねばならない。

#### ② 遺構現況図の作成

上記の調査と同時に、梶谷城跡に関する遺構の現況図を作成する必要があろう。この点に関し、従 来梶谷城に関する精密な実測図は作成されていない。この事情にかんがみ、遺構調査確認の上に立っ て、城山山頂の主郭部、及び西麓の館跡を中心とする遺構現況図を早急に作成すべきである。

遺構現況図の作成は、その現状を把握すると共に、今後史跡の積極的保存対策を講ずる上からも重要な基礎資料となる筈である。

史跡の新しい保存の方向として、国又は県の補助を得て、「史跡地等保存管理計画」の策定事業が 各地において急ピッチで進められているが、本史跡についても近い将来、所有者、管理者、及び地域 住民の合意の下に、望ましい保存策が講ぜられるべきであろう。

以上の目的のため、最小限本丸・二の丸跡、及び館跡を中心とする東西300m、南北400mの12haについて実測図が作成されるべきで、その際、縮尺1,000分の1、ないし300分の1程度のものであることが望ましい。また新たに測量し作図する方法の他、一つの便法として、既製の松浦市平面図(2,500分の1、アジア航測株式会社製、昭45~46作図)を基礎として、業者の了解の下にこれを修正拡大する方法も考えられよう。

#### ③ 遺跡の保存

現在、最も緊急に積極的保存策を必要とする個所は、本丸北壁、大手門周辺石壁、本丸外周石塁である。特に本丸北壁、及び本丸外周石塁の崩壊は著しい。

この部分の崩壊は、石積みの芯となる裏込め石材の流出によって、石組全体に弛緩を来したことによるものである。この他、本丸北壁については、その基部の切取り、或いは野面石材の取崩しが崩壊の原因となっている。自然の崩壊に加え、人為的損傷が重なり、石壁は年を追って低くなり、壁面の姿は刻々と変化している。

中世城郭の場合、壮麗な天守閣等の建造物を中心とする近世城郭と異なり、城郭のプロットを示す 段築・土塁、或いは石造構築物が最も重要な遺構で、これらの損傷は、すなわちその城郭の価値を減 殺するものである。

これら損傷の著しい危険な遺構部分に対しては、まず囲柵の設置によって見学者の立入りを排除することが先決であり、同時に恒久的に石組を固定する方法を講じなければならない。

#### 松浦市内遺跡確認調査(4)

この点に関し、島原市の史跡「旧島原藩薬園跡」にあっては、本史跡同様の緩んだ石塁の固定方法 として、石塁上部からセメントミルクを注入して固定する方法をとって成功しているが、本史跡についてもこの方法を検討する余地がある。一方石組み実測のうえ、積直しによる復原も考えられるが、過去の工事例を見ると、必ずしも全てが成功しているとはいえない。

いづれにせよ、この二つの工事例を参考にして、早急に何らかの保存策が講じられるべきである。

#### ④ 史跡の顕彰

史跡がその地域住民、及び広く国民の共有財産であるとするならば、当局としては、その調査及び 保存対策と共に、また一般への公開と顕彰をすることもその重要な責務であろう。

従来史跡に限らず文化財全般において、一般への啓発が不十分であったため、環境破壊、盗掘等の 被害に遭ったものは少なくない。

今日ではもはや文化財を被覆隔離する時は去り、むしろ逆にこれを公開顕彰することによって、一 般の者自らが文化財の保護管理者たるべく体制を作らねばならぬ時にいたっている。

松浦市にあっても、史跡公開の立場から、年次計画の下に梶谷城史跡を公園として整備を進められているが、初期にあっては、率直にいって必ずしも史跡保存の基本にかなうものではなかった。登頂車道の敷設、二の丸跡における駐車場及び手洗い舎の設置、本丸跡の削平工事等がそれであり、特に登頂車道は本丸外周の石塁を10mにわたて切断破壊するという事態を招いている。ただしその後行なわれた本丸跡の見学路敷設については、担当者の配慮によって、復原可能な範囲でなされ、好ましい状況となっている。しかしいづれにせよ、事前において十分な遺跡遺構の調査はなされていない。今後、梶谷城跡の保存事業と顕彰事業は、双方調整のうえ、両立させる適切な方途を見出し、推進させねばならない。しかしその遺構調査が十分でない現段階にあっては、不用意な工事は回避すべきである。当面遺構の調査と、現況図の作成事業が最優先されるべきであろう。

#### (4) かすび

今回の調査によって、松浦氏の拠った中世城郭である梶谷城の概略は明らかにできた。それによれば梶谷城はおそくとも平安末期に構築され、断続的ではあるが、近世初頭まで相当長期間利用された山城である。従ってこの間、徐々に修築が加えられており、従って遺構も各年代にわたって構築時期は相違している。

今日残っているものは、山頂に設けられた本丸・二の丸とその付属施設、及び西側山麓の館の二つの部分に大別される。このうち前者は上記本丸・二の丸による基本構造をなし、本丸南部に物見台を設け、その西部にやや複雑な大手門を備えているのが特徴である。そしてこの二つの曲輪は外周を石塁が囲むという形をとっている。一方館は県下他に例を見出せぬ程の大きな規模をもって残っている点が注目される。

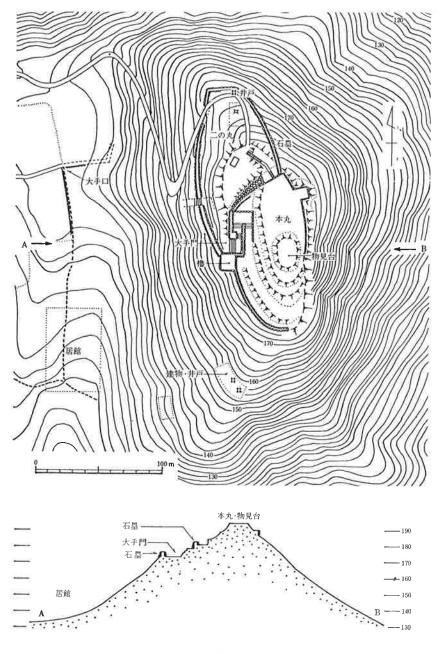
今回の調査は短時日に限られたため、調査範囲は山頂の主郭部とその周辺、及び西麓の館跡とその周辺に絞らざるを得なかった。この部分の遺構については新発見のものを含め、概略把握できたもの

の、他に多くの未調査の部分を残している。今後これらの部分についても調査し、この結果に基づい て遺構現況図を早急に作成する必要がある。

さらにまた史跡指定地は、現在、山頂の主郭部に限られている。今後調査の上に立って、館跡、大 手口、水の手等を含め、指定地を追加拡大し、またそれと共に将来の課題として指定地の買収公有化 を目指すことも必要であろう。

以上、調査の結果とこれに基づくいくつかの提案を記したが、いづれも経費と時間を要するものである。管理者、土地所有者、地域住民、学術機関等が一体となり、梶谷城跡のより望ましい保存と活用の方策を決定し、推進してゆかねばならない。

最後に今回の調査にあたり、本調査を計画され、種々支援と協力を惜しまれず、さらに今後本史跡 の保護顕彰に取組まれる松浦市当局に対し、深甚の謝意と敬意を表する次第である。



第1図 梶谷城要図

#### 2. 調査に至る経緯

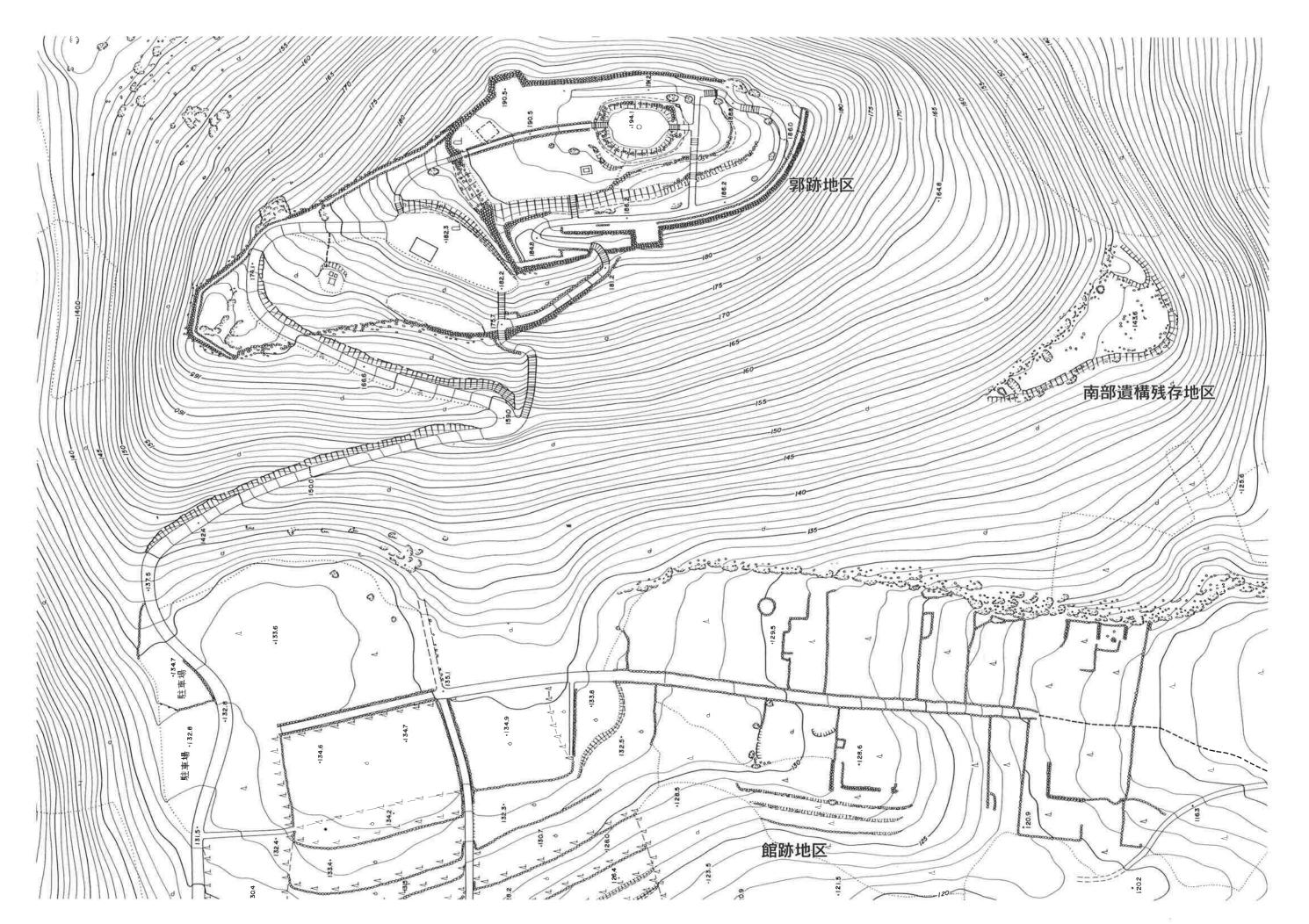
松浦市教育委員会は、昭和46年5月12日付け46松教第624号にて長崎県教育委員会へ本市の今福 町東免に所在する梶谷城跡を長崎県の文化財に指定する旨の申請書を提出している。これを受けて長 崎県教育委員会は同年9月14日に長崎県文化財史跡として指定している。その名称は「松浦党梶谷城 跡」である。その後、昭和57年4月23日付け57松教第483号にて指定書の一部変更届を提出してい る。さらに平成3年10月24日付け3松教第1,373号にて土地所在等異動届を長崎県教育委員会に提 出し、平成4年2月21日付け長崎県公報で指定地の追加がなされている。また、平成4年9月16日 付け4松教第1,289号にて所有者等変更届を提出している。

現時点での指定地域は今福町東免字城山2278番、2280番イ、2280番ロ、2281番、2282番、2283番、2284番、2285番2、2286番、2287番、2288番1、2288番2、2301番2、2302番2、2303番、2304番2の16筆で指定面積は19,814.67㎡である。

昭和46年の指定後の現状変更については、松浦市より昭和50年度に藤棚・植樹・階段・遊歩道工事、及び顕彰碑を建立している。昭和51年度には日本放送協会と民間放送の共同によるテレビ中継局が設置されている。また、松浦市による階段・遊歩道工事、休憩所の建設。昭和52年度にも階段・遊歩道工事が実施されている。昭和54年度には水銀灯の設置及び館跡北側の駐車場の整備が行われている。昭和55年度には歩道・階段防護栅工事を行っている。

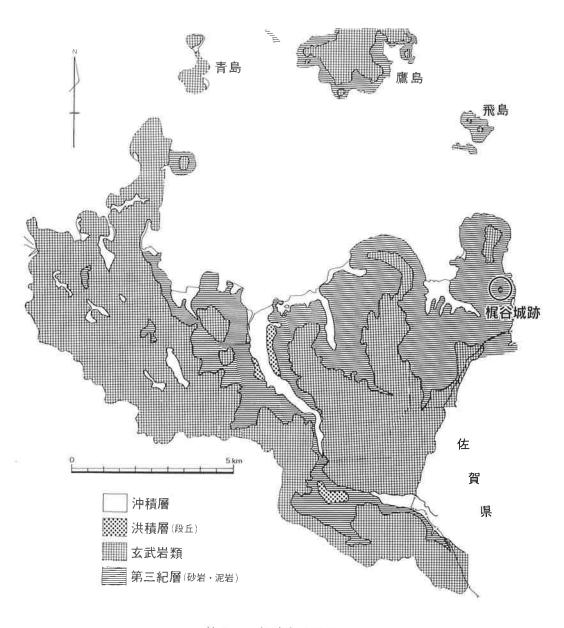
教育委員会では、前述の外山・吉福の「史跡梶谷城跡遺構調査報告」を受けて、平成元年5月に県指定史跡「松浦党梶谷城跡」の保存整備及び活用に関して諮問する機関として学識経験者等による史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会(以下「保存整備委員会」という。)を設置した。まず、今後の保存整備委員会等での資料として活用するため、既存の航空写真を使用して郭跡地区と館跡地区を含む東西500m、南北400mの20haの範囲を縮尺1,000分の1で平面図を作成している。なお、館跡地区については一部現地測量を取り入れて平面図を完成させている。

保存整備委員会は、平成元年度に2回、平成2年度に5回開催している。その間に保存整備を行っている熊本県三加和町の田中城跡、長崎県南有馬町の原城跡、佐賀県鎮西町の名護屋城跡等を視察している。平成2年度に史跡松浦党梶谷城跡の保存整備の目標と方法・保存整備のための条件調査・保存整備計画の方針・保存整備構想を検討し「史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定報告書」を作成している。平成4年度には保存整備委員会を3回開催して保存整備計画・事業化についての検討をし、「史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定報告書(第2集)」としてまとめている。平成5年度には保存整備委員会を1回開催している。保存整備委員会では、平成2年度に梶谷城跡に関する基礎資料を集める必要があるとの判断から教育委員会へ確認調査を行う必要性を答申されている。教育委員会ではこの答申を受けて今後の「松浦党梶谷城跡」の調査について検討し、梶谷城跡の指定地と西側麓の館跡と調査の範囲が広範囲に及んでいるため、平成3年度から平成6年度までの4か年計画で確認調査を実施することにした。まず平成3年度と4年度は館跡地区の調査を対象とし、平成5年度と6年度は郭跡地区を対象として実施することとした。



#### 3. 梶谷城跡の地理的環境(第3図)

松浦市は、九州西北部の長崎県本土の北端、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島と小さな島々とで構成されている。松浦市の北には伊万里湾を望み「文永の役」・「弘安の役」の元寇の島で有名な北松浦郡鷹島町が位置している。西には弥生時代の多くの木製品が出土した西の登呂遺跡といわれる「里田原遺跡」が北松浦郡田平町にある。南の北松浦郡吉井町では縄文時代草創期の隆起線文土器が出土した「福井洞窟」がある。松浦市の東は佐賀県伊万里市と接しており、縄文時代の生活道具の材料となる黒曜石の原産地である腰岳が位置している。このように松浦市と接する近隣の市町では日本の歴史上においても重要な地域であり、特に旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多いのも特徴である。



第3図 松浦市地質図

松浦市内の地質は、第三紀層を基盤とし、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈してい る。第三紀層は、佐世保及び北松炭田を支えた炭層をもつ堆積岩で、佐世保層群と野島層群とに分け られ、地盤変動や侵食作用を受けており、断層が多くみられる。地形としては緩やかな山麓や丘陵を 形成している。玄武岩は、北松浦半島を中心として西北九州に広く分布している松浦玄武岩で、典型 的な溶岩台地や平頂性の孤立丘をなしている。かつては伊万里市南方を中心として噴出した一大楯状 火山であった。玄武岩台地周辺の切り立った断崖の直下にはゆるやかな山麓地形が発達している。こ れは、砂岩・泥岩の互層の第三紀の堆積岩からなり、かつての北松炭田はこの夾炭層を利用していた ものである。上位の玄武岩と作用して「北松型地すべり」が多発する地域としてよく知られている。 梶谷城跡周辺も腰差地区(65.86ha)として地すべり防止区域に指定されている。この玄武岩と第三 紀の堆積岩との間には、八ノ久保砂礫層がはさまれているため、豊富な湧水が多い点も特徴として挙 げられる。この山麓面は第三紀層の堆積が終わったころ地盤変動や侵食作用を受けて、平坦化され、 さらに沈水して浅海の条件下で八ノ久保砂礫層を堆積している。その後、伊万里・有田方面に大きな **降起量をもって上昇し、傾動地塊となり、さらにその上に玄武岩が噴出している。この玄武岩の占め** る面積が松浦市でも大きく、志佐川以東の玄武岩台地は、県境の国見岳を中心とした山塊で、国見岳 から三つの支脈が派生し、最も東には、国見岳から北北東へ人形石山・石倉山へとつづく平頂性の山 地列がある。さらにその北には梶谷城跡のある城山と金井崎半島中央部とに、分断されてビュート· メサとなったものがある。中央の支脈は、今福川と調川川とにはさまれたもので、国見岳から北へ台 地が続き、調川平尾へと至っている。三つ目は、石盛山・豆五郎山そして不老山へと続いている。志 佐川の左岸に沿っては、大阪山・高法知岳等の玄武岩台地が細長く続いている。これらの台地は標高 が高く、周囲の崖も急である。これに対して悪太郎川以西の台地では、低位の溶岩台地が広く、白岳 と大岳の二重構造の台地がビュート状に高まりをなしているだけである。この低位の台地は、竜尾 川・加椎川や坂瀬川の浅い谷に刻まれ、丘陵状となっている。津崎鼻や波津崎の海食崖には、玄武岩 の柱状節理が発達している。第三紀層の堆積岩は、今福町寺上免・木場免、調川町平尾免・白井免・ 中免等には平坦面が広い。この平坦面上には、玄武岩が崩落して崖錐状の斜面地となっているものも ある。玄武岩台地との傾斜変換点近くには溜池が多く、山麓面以下には棚田が発達し、玄武岩台地上 の畑地と対称的である。

梶谷城跡は、松浦市の東部、松浦市役所より約7.4kmの佐賀県伊万里市との境に近い今福町東免字城山の山頂に所在している。山頂より望めば、北側には伊万里湾に浮かぶ鷹島・福島を望み、東側ではカブトガニの生息地である伊万里湾の奥まで望むことができる。梶谷城跡がある今福の市街地は、東に城山、西に白井岳、南に国見岳などの三方を玄武岩台地の山々に囲まれた凹地に立地しており、南高北低の地勢を呈している。東側には佐賀県との境をなしている国見岳を中心に人形石山・石倉山を源流とし、第三紀層を削って北流して伊万里湾へと注ぐ流路延長1.8kmの2級河川の今福川がある。河口には三角洲が発達しており、現在この地に市街地が形成されている。

#### 4. 梶谷城跡の歴史的環境 (第4図・表1)

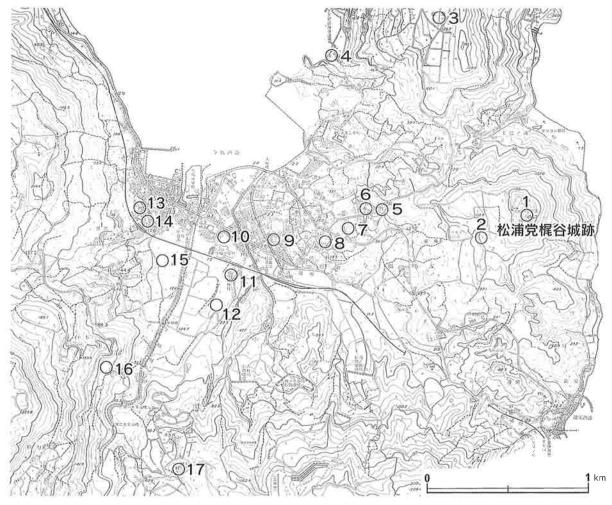
今福町における埋蔵文化財の調査は、まず昭和54年の金井崎半島の先端の台地上に位置する満場遺 跡に始まる。調査は団体営草地開発事業(13ha)に伴う満場遺跡の分布調査で、調査を行った長崎 県教育委員会では簡単な10ヵ所の試掘調査でB地点の一部の表土下に厚さ約40cmの遺物包含層を確 認している。その後、県畜産課との協議によりB地点の一部が設計変更されているようであるが詳細 については不明である。昭和40年1月の県立松浦高等学校郷土社会部発行の『松浦考古1号』には、 松浦市の石器時代遺跡紹介の項目で今福町満場遺跡が記載されている。本文には採集品としてナイフ 形石器・台形石器(トラピーズで報告)等が図示されており、「無土器時代最終末期から縄文時代に 継続したと考えられる重要な遺跡である」と結んでいる。昭和56年にはこの満場遺跡に隣接する北平 遺跡(三等三角点付近)でNTT無線中継所建設に伴う確認調査が久原巻二氏(現県教育委員会生涯 学習課)・川道寛氏(現県教育委員会学芸文化課)により行われている。調査は17ヵ所設定され68㎡ の調査区はほとんどが深耕を受けており、包含層の検出は確認できていないようである。遺物は耕作 土及び撹乱層から黒曜石製石鏃・剥片・砕片・石核が出土している。平成3年度~6年度には松浦党 梶谷城跡の確認調査を市教育委員会で行っている。梶谷城跡は確実な文献上の確証がなく江戸時代に 著わされた松浦氏の家譜である『松浦家世伝』によると、延久元年(1069)源久なる人物が摂津国 渡辺荘より肥前国松浦郡志佐郷今福に下向して土着し、宇野御厨検校および検非違使となったのが松 浦氏の最初で、その頃梶谷城を築いたとあり、平安時代末期には築かれたことになっているが信憑性 に乏しい。平成7年度は鉱害復旧事業に伴う中ノ瀬遺跡の確認調査と国営農地再編整備事業に伴う今 福遺跡の試掘調査を国庫補助・県費補助を受けて実施している。中ノ瀬遺跡は今福遺跡の南東今福川 をはさんで対岸に位置しており、第1次調査では弥生中期の甕形土器や11世紀後半から14世紀中頃 の輸入陶磁器の青磁・白磁・青白磁、土師器が出土している。遺構では土壙2基と8ヵ所の調査区で 柱穴が検出されている。平成8年度には国営農地再編整備事業に伴う今福遺跡の本調査を実施してい る。この今福遺跡の調査では、柱穴群が4ヵ所で、集石土壙1基、礫群1基、列石1基、土壙1基を 検出している。いずれも時期を決定する資料に乏しいが概ね中世以降であろうと思われる。出土遺物 では、ナイフ形石器から輸入陶磁器まで幅広い年代の遺物が出土している。縄文晩期の深鉢で口縁部 にリボン状の突起を伴う黒川式土器がある。松浦市では初現の網目状を呈した組織痕土器がある。弥 生時代では前期の石庖丁が6点出土しており、当地における稲作の起源が弥生時代までさかのぼるこ とが確認された。古墳時代では4世紀後半から5世紀代にかけての土師器の高坏・坏・手捏ね・甕・ 壺・製塩土器がある。須恵器では、6世紀後半から7世紀初めの坏・甕・平瓶・壺・高坏・聰の資料 がある。量的には少ないが5世紀前半から6世紀初めの資料もある。古代から中世における国内産の 石器では石鍋がある。石鍋は外面口縁部に方形の耳がつく資料で11世紀に包含される資料である。土 器は、土師器・瓦器・黒色土器A類・黒色土器B類があり10世紀中頃から12世紀前半の資料である。 輸入陶磁器では越州窯系青磁 I 類・II 類があり8世紀末から10世紀中頃の資料がある。白磁では11 世紀後半から12世紀前半の北宋後半代の白磁碗Ⅱ類からⅧ類があり、特にⅣ類は多数出土している。

青磁では龍泉窯系が多く碗 I - 2類・I - 4類がある。同安窯系では碗 I - 1類、皿 I 類がある。その他では明代青花染付碗、李朝粉青沙器碗が若干出土している。銅銭は1086年初鋳の「元祐通寶」が2点ある。この今福遺跡は出土した遺物の多さに反して、遺構があまりにも貧弱である。遺物からは海外との交易で入手した証として輸入陶磁器があるが、その年代は11世紀後半から12世紀前半にピークがあるようである。国内産の遺物は10世紀中頃から12世紀前半の時期にピークがあるようである。その後は急速に衰えていったようである。この時期は渡辺荘から下向して松浦氏の祖となった源久の時期とダブルようであり、今福遺跡で交易を行っていた在地の土豪集団が源久の勢力下に吸収され、松浦党の一員となった可能性があるのではないだろうか。今福遺跡は梶谷城との関連でも興味深い資料を提供している遺跡でもある。

次に考古学的調査から文献による今福との関連についてふれてみる。現存する文献には今福神社に ある『早田文書』と『宛陵寺文書』を上げることができる。『早田文書』は今福神社の大宮司職を 代々継承されている早田家に伝わる文書である。この今福神社は明治4年に名称を年の宮から変更し ている。従って宗家松浦氏との関係は深く松浦氏の中世史を研究する上で欠かせない文献である。し かし残念ながら明治3年に早田恒氏の書写したものをさらにその後に書写を繰り返しているようで、 判読できないところや読解の困難な箇所がある。現在この文書は九州大学文学部九州文化史研究所に 保管されている。宛陵寺は代々宗家松浦氏の菩提所で、源久の隠宅居邸として天漸院と称していたが 久の卒去後に宛陵寺と称するようになったようである。『宛陵寺文書』の松浦系図によれば源久は嫡 子である御厨執行兼弁済使源四郎大夫直に下松浦の所領を譲っている。嫡流に相伝されたとみられる 御厨執行職は、直-清-遶-直-定-時(正)-(清)-直(定)-勝-延-進-盛-定-政-親へ と伝えられている。文書では時の後は時の子の直が当主になっている。しかし、別の系図によって は一定一時(正)と直(定)との間に清を入れている物もある。早田文書・宛陵寺文書には神社・寺 に寄進した人物の名がある。清は歳ノ宮へ貞和6年(1350)に2通、観応3年(1352)に3通の寄 進状をだしている。康永4年(1345)には源清下文案が「いまふくの大くし(大宮司)」に対して清 が神事祈禱のことを命じている。直(定)は正平24年(1370)に直の名で、明徳2年(1391)、明 徳4年(1393)、明徳5年(1394)のものは定の名で発給されている。宛陵寺文書には延の寄進状 が6通ある。明徳元年(1390) 1 通、応永10年(1403) 2 通、応永12年(1405) 2 通、応永13 年(1406) 1 通である。延の子の進の寄進状が4 通宛陵寺文書にある。応永31年(1424) 2 通と 応永32年(1425)1通がある。1通は年号なし。また、早田文書には進の発給文書が4通ある。応 永24年(1417)、応永27年(1420)、永享3年(1431)と1通は年号が付いていない。これらの文 書には「今福浦」の地名があり、南北朝から室町期には通常使用されていた名称であろう。また、 「丹後守」を初めて名乗るのは遶の子の直からで後は代々使用しているようである。南北朝から室町 時代に盛んに行われ松浦党一揆契諾状では、『青方文書』・『山代文書』によると永徳4年(1384) に「たんこ左衛門尉遶」、至徳4年(1387)「丹後守直」、嘉慶2年(1388)「丹後守五」、明徳3年 (1392) に「丹後守定」が登場している。直の子の遶は13世紀初頭の人物であり、永徳4年の「遶」

### 表1 梶谷城跡周辺遺跡等一覧表

番号	名称	所 在 地	備考
1	松浦党梶谷城跡	今福町東免2281ほか	昭和46年長崎県指定文化財
2	城山山麓遺跡	今福町東免農園	縄文時代の遺跡
3	満場遺跡	今福町北免上満場ほか	旧石器時代の遺跡
4	ぎぎが浜	今福町北免前田ほか	源久の上陸地といわれている
5	若宮神社	今福町東免原口	松浦丹後守勝公をまつる
6	松浦丹後守勝の墓	今福町東免若宮神社下	1399年死亡
7	松浦丹後守盛の墓	今福町東免東上	1467年死亡
8	山川遺跡	今福町東免山川	縄文時代の遺跡
	文禄の役松浦家供養塔	今福町東免390	昭和46年長崎県指定文化財
9	(松浦定の供養塔)		1593年平安道にて戦死
3	(松浦親の供養塔)		1577年死亡
	(松浦定の五輪塔)		高さ約1.5m
10	今福小学校遺跡	今福町浦免宮崎	弥生・中世の遺跡
11	今福神社 (年の宮)	今福町東免68	今福丹後守家の宗社
12	中ノ瀬遺跡	今福町浦免中ノ瀬	室町時代の遺跡
13	善福寺鰐口	今福町仏坂免910	昭和46年長崎県指定文化財
14	宛陵寺古文書	今福叮仏坂免958	昭和47年松浦市指定文化財
15	今福遺跡	今福町仏坂免五百田ほか	縄文~中世の遺跡
16	旧宛陵寺跡	今福町仏坂免白木	今福松浦家の遙拝所
17	今宮神社	今福町寺上免	源久公をまつる



第4図 梶谷城跡周辺図

#### 松浦市内遺跡確認調查(4)

とは年代があっていない。また、「丹後守五」も謎の人物である。時(正) - (清) - 直(定) - 勝に至る系図は文献史料から再検討する必要があろう。進の子の盛については、『海東諸国紀』に受図書人として年1度の歳遣定約を結んでいる。この年が丁丑年で日本の長禄元年(1457)にあたっている。盛は『松浦家世伝』で嘉吉3年(1441)に宗家松浦氏の菩提寺の新豊寺に巨鐘を寄進していることが記されている。15世紀中頃に盛が今福から相浦へ本拠地を移したのではないかと考えられている。

今福は江戸時代に入って初めは平戸藩領であったが、松浦信貞の時、寛永12年(1635)3代将軍家光に召し出されて旗本となり、のち寛文4年(1664)平戸藩領のうち当村1500石が分地されている。しかし、寛政2年(1790)からはこの地行所支配は平戸藩に委任されたため、押役所が設置されている。平戸藩から派遣された役人は押役・代官・庄屋・筆取であった。元禄9年(1696)には今福領と平戸領との境の件で今福の百姓 238名が騒動を起こしている。天明6年(1786)・天明8年(1788)・寛政2年(1790)には今福の領民が逃散する事件もおきている。

今福村における炭鉱の歴史は古く江戸時代の中頃からで、寛延2年(1749)今福宮本利兵衛の子徳兵衛石炭問屋を願い出、今福赤岩炭坑を山口陸左衛門が開くとある。明治に入っても引き続き石炭が採取され、記録にあるものでも明治3年に3件、明治4年に5件、明治6年に4件の炭鉱の名がある。大正8年には第1次炭鉱景気となり、昭和14年には第2次炭鉱景気が訪れている。しかし、昭和37年に最盛期を迎えた炭鉱もエネルギー革命により、昭和42年の飛島鉱を最後に松浦市内におけるすべての炭鉱が閉山している。 (中田敦之)

#### 【引用・参考文献】

松浦市史編纂委員会 1975 『松浦市史』

山口正人著 1988 「早田文書」 『松浦党研究第10号』 松浦党研究連合会

藤野 保著 1988 「平戸藩」 『藩史大事典 第7巻 九州編』 雄山閣

池田和博著 1997 「宗家松浦氏の歴史」 『武辺城跡発掘調査報告書』 佐世保市教育委員会

中田敦之編 1998 『松浦・今福遺跡』 松浦市文化財調査報告書第14集 松浦市教育委員会

田中健夫訳注 1991 申叔舟著 『海東諸国紀』 岩波書店

角川日本地名辞典編纂委員会 1987 『角川日本地名辞典 42 長崎県』 角川書店 1987

### 第Ⅱ章 調 査

#### 1. 調査経緯

松浦市教育委員会では、昭和46年9月14日に長崎県指定文化財となった松浦党梶谷城跡の保存整備を図るため、平成元年度に松浦党梶谷城跡の保存整備及び活用に関して学識経験者等に諮問する機関として史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会(以下「保存整備委員会」という。)を設置した。保存整備委員会では、梶谷城跡を形成している遺構等の個別の名称については、今後統一した名称を使用することなった。そこで平成2年度と平成4年度(追加報告書)に刊行した「史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定報告書」でも郭跡地区(主郭・天守台・大手門・東櫓台・西櫓台・竪堀・副郭・大手口)と館跡地区、南部遺構残存地区の3地区の名称で作成しているため、この報告書でも同じように使用することとした。

教育委員会では、保存整備委員会での委員の意見として梶谷城跡の基礎資料を収集してもらいたい旨の意見をいただいていた。それをもとに3地区における発掘調査の事業化に向けて検討した。その結果、平成3年から平成6年度までの4ヵ年計画で地下に眠る梶谷城に関する基礎資料を得ることを目的として確認調査を実施することとなった。

3年度(第1次調査)と4年度(第2次調査)は特に館跡の所在が考えられている郭跡地区の山頂部分より約60mほど低くなった西側麓の館跡地区の調査を行った。5年度(第3次調査)は郭跡地区の副郭(二ノ丸)地区の確認調査と主郭を囲繞している石垣の全体像を把握するため、樹木と竹林の伐採も含めて行った。6年度(第4次調査)は主郭(本丸)地区の確認調査と郭跡地区全体の地形測量を行った。この確認調査で城跡と館跡を含む全域での調査を対象とした。ただし、残念ながら南部遺構残存地区については確認調査を行っていない。

館跡地区の第1次調査は、平成3年11月18日から平成3年12月27日まで40日間実施し、145㎡を調査している。調査は、まず館跡全体を南側よりC-1区、C-2区、C-3区の名称を付し、第1次調査はC-3区とC-2区の館跡地区でも一番標高の高いところから南側に向かって傾斜している館跡地区の半分を調査対象とした。調査範囲は植林されたスギに加え、台風の被害によって放置されたスギ等がそのままの状態で月日が経過しているため樹木が繁殖し遺構の確認作業は非常に困難を極めた。各トレンチともまず雑木林の伐採と風倒木の片付け及び樹木の伐採から行いつつ同時に館跡を区画している石垣の検出にも重点をおいて行った。トレンチはそれぞれ2m×5mを7n所を設定した。ただし第7トレンチは遺構の検出のため一部拡張をしている。第8トレンチは第5トレンチの横に5m×7.5mを設定した。

第2次調査は、3年度に引き続き館跡地区の確認調査として平成4年12月8日から平成5年1月31日までの55日間実施し、 $200\,\mathrm{m}^2$ を調査した。調査範囲は3年度に調査を行ったC-2区の南側半分と、館跡でも最も標高の低いC-1区を行った。各調査対象地区は前回同様まず雑木林と雑草の伐採・片付けから行い、同時に石垣の検出にも重点をおいた。確認調査を行った地区はC-1区とC-1

2区の境界部分にあたる東免字城山2244番地の一区画を第9トレンチとして4分割し遺物の検出と 遺構の有無の調査を行った。

第3次調査は、郭跡地区の調査で平成5年11月29日から平成6年2月4日の68日間実施した。調査面積は70㎡で、主に副郭地区の確認調査と郭跡地区を囲繞する石垣の現況調査と石垣の写真撮影を行った。調査地区は竹林と雑木林に被われ鬱蒼としており、これらの伐採及び片付けから行った。確認調査は副郭の東側(30㎡)・北側(20㎡)・西側(20㎡)にそれぞれ1ヵ所の調査区を設定して行った。この調査では今まで確認がされていなかった竪堀・虎口・集石遺構が新たに発見された。また、副郭の先端部分で腰曲輪と石垣を発見することができた。

平成6年3月31日から4月2日にかけては城郭研究家の中でも石垣についての第一人者である橿原 考古学研究所の北垣聰一郎客員教授に現地視察をお願いし、指導をいただいている。

第4次調査は、前年度に引き続き郭跡地区の調査で平成6年5月16日から平成6年7月14日までの30日間実施した。調査区は主郭平場に4本のトレンチ、天守台跡に2本、天守台跡南側に1本、大手門跡に1本の合計8ヵ所を設定した。調査した面積は149.3㎡である。特に主郭地区の建物跡の有無と平場の造成と石垣の普請状況及び大手門跡での建物遺構の有無の確認調査に重点を置いて行った。なお、調査期間中には郭跡地区全体の地形測量を1/300の縮尺で実施している。

#### 2. 発掘調査

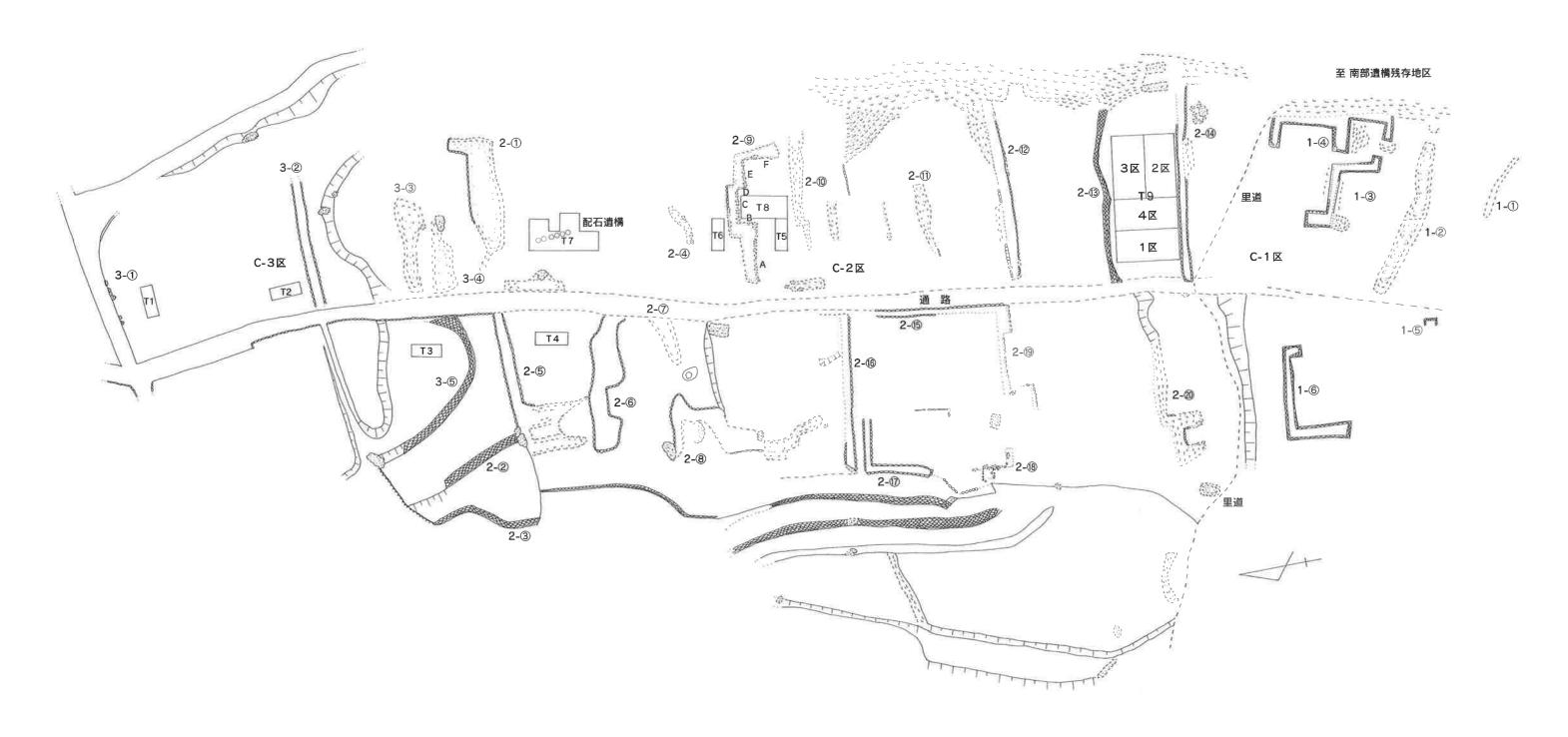
#### (1) 館跡地区 (第5図)

館跡地区は北側から南側に緩やかに傾斜しており北側で約135m、南側で約110mで高低差は25m ほどあり、館跡地区の中央を幅約3mの通路状石積み遺構が南北に走っている。その両側には通路にほば直角に交わる形で石垣で区画築地された箇所が確認された。当時構築されたと思われる石垣が現在も表面にならんでいるのがみられるが、その保存状態は非常に悪く、崩壊している所あるいは砕石用の石として抜き取られたと思われる所もかなりあり、全貌が確認できない箇所もある。

平成3年度の調査では、C-3区で5ヵ所に石垣が検出され、うち1ヵ所は現代(C3-⑤)の構築であった。C-2区でも10ヵ所に石垣が検出され、うち2ヵ所についても現代(C2-②・③)の構築であった。石垣については1ヵ所のみではあるが立面図を作成した。

平成4年度の調査は、C-2区の南側半分と、C-1区の確認調査を行った。今回も新な石垣の発見ができ、調査も館跡の中でも石垣と石垣で区画されている箇所の全面調査をすることができた。この地区では柱穴が発見されたが遺構に伴うものなのかどのような規模の建物があったのか明らかにすることはできなかった。この調査でも遺構としては石垣があり、当時構築された大石積みの石垣が現在でも旧状を保ってならんでいるのがみられたが、その保存状態は非常に悪く、崩壊している所あるいは根石の状況が確認できていない箇所もある。

C-1区の石垣についてはC-2・3区の石積みの方法と違っており建物の石壁ではないかと思われる。江戸後期遺構に流行する方法が採用されているため城郭に伴う遺構ではないと思われる。



#### ①遺 構 (第6図~第8図)

#### 配石遺構 (第6図)

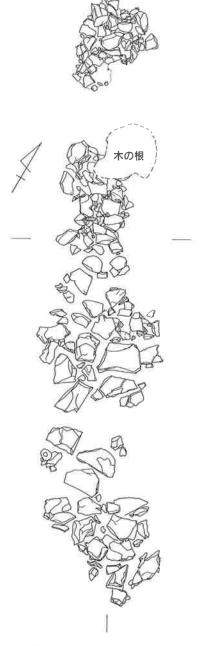
第7トレンチで配石遺構を確認した。遺構は表土層の下の灰青色砂層に約10cm大から約40cm大の自然石を並べて敷いたような状況であり、長さ約6m・幅約1mを確認した。配石遺構と思われる。 礫の下には厚さ3cm程度の薄い黄褐色の粘土層がありその下は深さ14cmと浅く掘り込んでいた。遺構内からの遺物等は出土しておらず建物遺構に関連する溝なのか時期及び性格等については不明であり、現状のままで埋め戻しを行い保存している。

#### 石垣遺構 (第7図)

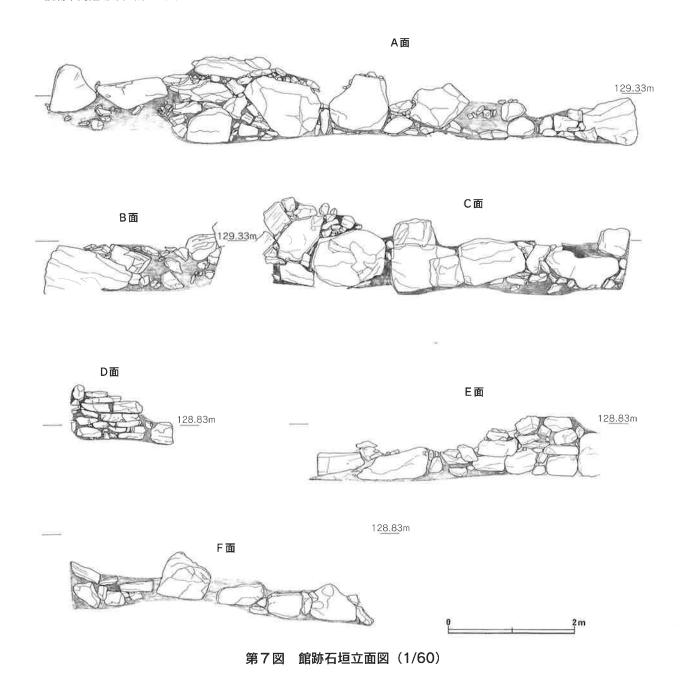
館跡の敷地を区画をする石垣は当時の面影を残しており、調査区の最も中央のC2-⑨・C2-⑩の石垣には通路としての入口部分と思われる石垣を伴わない箇所があり、また、崩壊を防ぐ目的として故意に石垣をまげている箇所がある。その内の1ヵ所であるC2-⑨の石垣の立面図を作成した。

現存の高さは約 140cmの石垣で、特徴は幅70cmから 120cm大の大石を立てて根石としてその上に幅30cm大の石の 小口部分を積み上げている。大石と大石の間は小振りの石で埋めている。ただしD面では自然石の小口部分を利用して7段積 みしており、後世の積み直しと思われる。この石垣は奥行きの幅が約2mあり区画との境界に隣接する石垣(石塁)としての機能が考えられる。このような石垣の築き方は後述する主郭地区の石垣の築石方法と類似することから同時期に構築されたものと思われる。

区画と区画との石垣間の幅はC-3区で約30m~25m、C-2区で約25m~10m、C-1区で約10m前後と標高の高いところが比較的広い区画を占有しているようである。一区画の東西の幅は約25m~30mとほぼ同じであるため標高が高く山頂の城に近いC-3区が優位を占めている。このことは館跡でも屋敷割りの区画として石垣があるのではなかろうかと思われる。また、中央の通路状石積み遺構の西側のC-2区では通路と思われる箇所がある。⑰は開口部分を西側に設けL字状に石垣を曲げている。今後更なる精査が必要な箇所である。梶谷城跡の館跡はこの様に大規模で石垣を持って区画構成している例はあまり知られていない。館跡の性格と権力下での携わった石工集団の調査が重要な問題として残った。



第6図 館跡第7トレンチ配石実測図 (1/40)

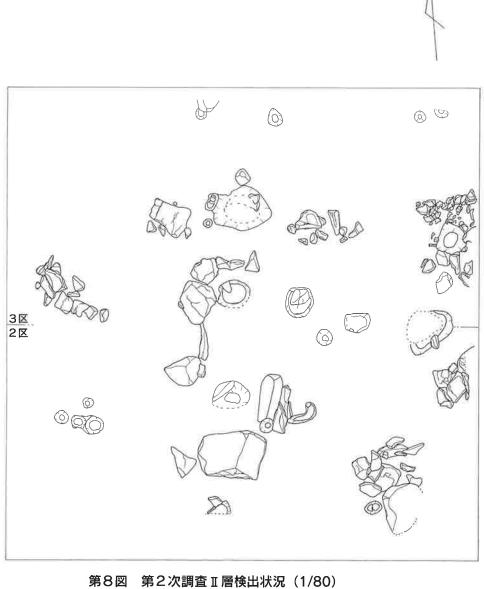


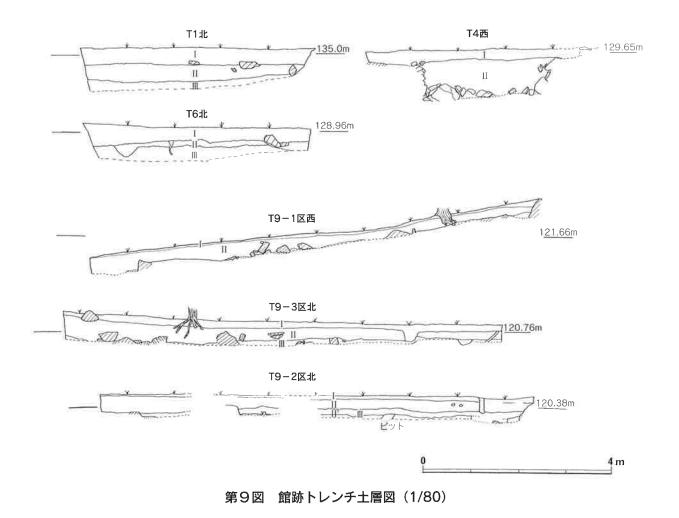
#### 柱穴 (第8図)

第1次調査では調査区を2m×5mに設定していたためかどのトレンチも面的に遺構をとらえることができなかった。そのため掘立柱建物等の柱穴の発見には至らなかった。

第2次調査の調査区はスギが植林されている地点ということであり、ほぼ全面に自然石の大小様々な礫が点在していることが確認できた。大きな礫は建物遺構の礎石として利用可能であるため確認は難しかったが、II層中において柱穴を検出することができた。しかし、柱穴の大きさが直径30cmより小振りであること、深さも20cm以内であり柱穴間に規則性がないため館跡に関する柱穴なのか確定することはできなかった。この点柱穴よりも礎石を利用したことも十分考えられる。植林地である

ため確認までには至っていないが、今後の調査にゆずりたいと思う。





#### 七層 (第9図)

第1次調査では、トレンチ内の土層の堆積状況を確認したが、各トレンチとも表土の下は黄褐色粘質土層で大小の玄武岩の自然石が混在した土層であった。これは城山の西斜面の自然崩壊した礫が堆積した層と思われ、第1トレンチから第4トレンチまで認められた。第5・第6トレンチでは表土の下に黄褐色玄武岩風化礫層の地山が認められ、混礫層は含まれていなかった。これから考えると自然崩壊した礫をある時期に整理した可能性があり、その時の礫を石垣として利用したことも十分考えられるのではなかろうか。

第2次調査の調査区では、第9トレンチの土層の堆積状況は5cm~15cmの腐蝕土である表土(I層)があり、II層は茶褐色粘質土で約20cmから35cmの厚みがあり東側がより厚く堆積している。トレンチ全体は北側から南側に傾斜しておりその高低差は約1.3mほど有している。II層は黄褐色玄武岩風化礫層の地山で昨年度の調査で検出した混礫層は今回の調査では確認できなかった。本来の石垣と同時期の遺構はII層にあったものと思われる。このII層中には輸入陶磁器と国内産陶器等及び縄文期の遺物が多数含まれていることから縄文の包含層を削平して区画を造り石垣の構築が行われたのではないかと考えている。 (中田敦之)

#### ②遺 物 (第10図~第16図)

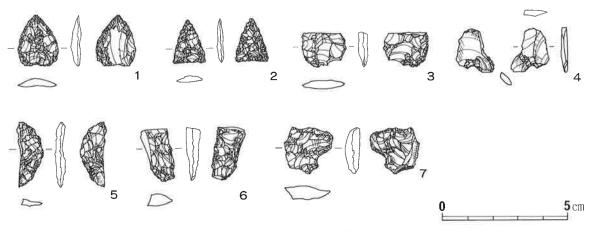
館跡の第1次調査では、296点の遺物が出土しているが大半は表面採集及び表土層からの出土である。そのうち189点が縄文期の石器であり、その中から7点を図示した。図示していないが中世の遺物では中国産輸入陶磁器である13世紀前半から14世紀前半の龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗が出土している。また、16世紀後半から17世紀前半の中国産輸入陶磁器である青花染付碗・青花染付小杯、朝鮮産李朝三島手、朝鮮産白磁碗、国内産では土師器、備前、瀬戸美濃・唐津系の碗・皿等がある。

第2次調査では、591点の遺物が出土している。そのうち307点を平板測量で取り上げている。石器で図示できたのは12点でいずれもII層よりの出土で縄文期の所産である。その他の出土遺物では図示していないが牟田産黒色黒曜石製石核・剥片・砕片、灰青色黒曜石製剥片、安山岩製剥片等が出土している。また、土器では第1次調査と同じような16世紀後半から17世紀前半の遺物が出土している。

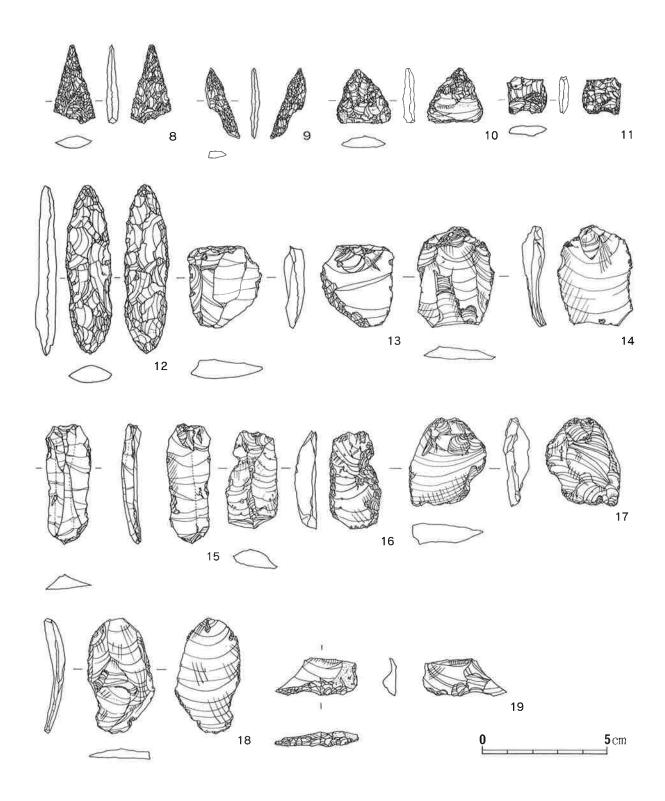
1・2・4~7の石材はすべて黒色黒曜石製である。3は灰白色黒曜石製である。1~3は打製石鏃である。1は平基無茎鏃に近いタイプで基部が張り出している。調整剥離は粗雑であるが完形品である。先端角度は69度と鈍角である。第4トレンチII層出土。2も平基無茎鏃で完形品である。側縁が一直線的で基部もほとんど一直線状で、ほぼ正三角形状を呈するタイプである。先端角度は40度である。第4トレンチII層出土。3は基部の形態が不明で、先端部を欠損している。第8トレンチ表土出土。4は剥片鏃である。片方の脚部と先端部を欠損している。第5トレンチ表土出土。5はスクレイパーか円基鏃の可能性がある。表採資料である。6は鍬形鏃の脚部片と思われる。先端部から基部と片方の脚部が欠損している。脚部には鋸歯状の加工が施されている。第4トレンチII層出土。7は加工痕のある剥片である。第7トレンチ表土出土。

8~19は第2次調査の第9トレンチII層から出土した石器である。

8~11は黒色黒曜石製の石鏃である。8は緻密に調整剥離されており、器形は二等辺三角形を呈している。先端部と両脚部が欠損している。先端角度は30度である。9は基部中央の抉入加工が深く作り出された凹基無茎鏃である。刃部に鋸刃状加工が施されている。片方の脚部が欠損しているが正三角形を呈していたと思われる。先端角度は44度である。10は調整剥離がやや粗雑で、一部自然面が残っている。未製品の可能性がある。11は凹基無茎鏃で、調整剥離は粗雑である。基部の抉りは浅い。



第10図 館跡出土遺物①(2/3)



第11図 館跡出土遺物②(2/3)

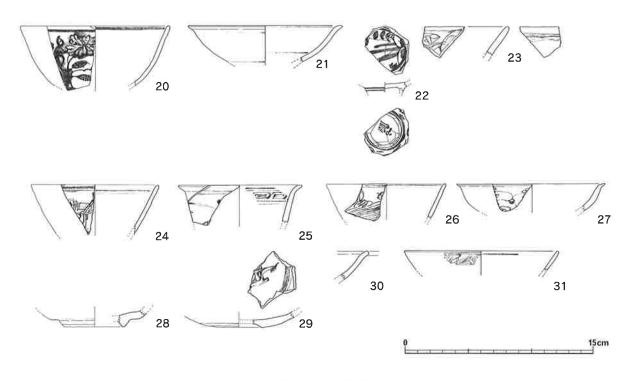
12は安山岩製の完形の石槍である。表裏より緻密に加工が施されており、やや細身の形状を呈している。断面は凸レンズ状に仕上げている。最大幅を胴部中央部にとり、基部付近がやや肉厚になっている。13はサイドスクレイパーである。黒色黒曜石製で寸づまりの縦長剥片を使用している。14も黒色黒曜石製で使用痕ある縦長剥片である。15は黒色黒曜石製の縦長剥片である。16は黒色黒曜石製で全面パティナに覆われている縦長剥片である。17も黒色黒曜石製で不定形剥片で、一部自然面を有する。牟田産黒曜石である。18も黒色黒曜石製で不定形剥片である。全面パティナに覆われている。一部使用痕が認められる。19はエンドスクレイパーと思われる。黒色黒曜石製で横長剥片を使用している。加工は粗雑に行われており、一部に自然面を有している。

20~39は第1次調査で出土した土器で、すべて表採資料である。

40~90は第2次調査で出土した土器・陶磁器である。

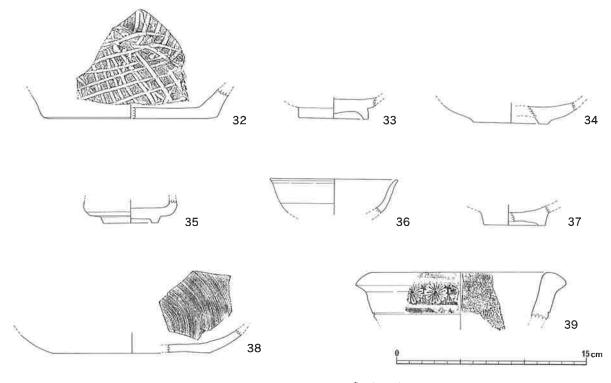
20~22、24~31は景徳鎮窯の青花で明代の染付である。20・24~28・31は碗である。20は菊花文碗である。21は小坏で全体に貫入が走っている。22は小碗で、高台に「福」の文字が施されている。外面に荒磯魚文、見込みには草花文が描かれている。高台の一部が欠損している。23は呉須手の大皿で福建省・広東省の窯の製品であろう。24は釉が淡灰白色で、外面に官人図が描かれている。25は外面に草花文が内面口縁部に雷文帯が描かれている。26は外面に荒磯文が描かれている。27は外面に草花文が描かれている。29は碁笥底の皿で内面見込みに「壽」字の文様が変容されている。30は白磁の皿である。釉は不透明、胎土は灰白色で全体に貫入が走っている。32は唐津系陶器の甕底部片である。内面は淡褐色である。胎土に石英を含んでいる。33は唐津系陶器の碗である。34は李朝陶器の碗であるうか。胎土に石英と雲母を含んでいる。35は陶器の香炉である。釉薬は灰釉で外面の施釉は胴部までで底部は露胎である。脚は三足である。36は陶器の碗である。釉は淡緑褐色で、口縁部に付着物が残っている。37は陶器の碗である。釉は緑褐色をした飴釉で、胎土は淡灰色で少し黄味を帯びている。高台畳付部は露胎で砂目あり。38は備前系陶器の甕である。内面は濃橙褐色で、外面は濃茶褐色である。胎土には長石・石英を含んでいる。39は瓦質の火舎である。菊花のスタンプ文が施されている。

40は龍泉窯系の青磁碗である。釉は緑灰色である。内面口縁部に雷文帯を有する。41~43は景徳鎮窯の青花で明代の染付碗である。44は李朝粉青沙器の碗で内面は暦文、外面は刷毛目が施されている。釉は淡灰色である。45~66は唐津系陶器である。49は皿である。釉は灰色で、見込みには胎土目が4ヵ所残っている。50は碗で、釉は淡緑褐色である。58は鉄絵皿で、胴部が屈曲して口縁部にいたり、口縁部は外反している。60~62は壺で同一個体の可能性がある。64・65は外面口縁部直下に鉄絵が施されている。同一個体の可能性がある。66は壺であろうか。70は唐津系陶器の向付碗である。口縁部に鉄絵で草文を有している。71~77は陶器である。72は皿で、高台から緩やかに湾曲した胴部が延び口縁部で外反するもので、内外面は淡茶灰色で、釉は白灰色である。73は備前系の甕であろう。内面は赤褐色、外面は茶色で釉は黄白色である。胎土に石英を含んでいる。74は内外面とも暗茶色で、釉は黄白色である。73と同一個体と思われる。75は釉が淡黄白色で、胎土に雲母・砂粒を含んでいる。77は内外面が暗赤褐色で、胎土に石英・長石・雲母を含んでいる。78・



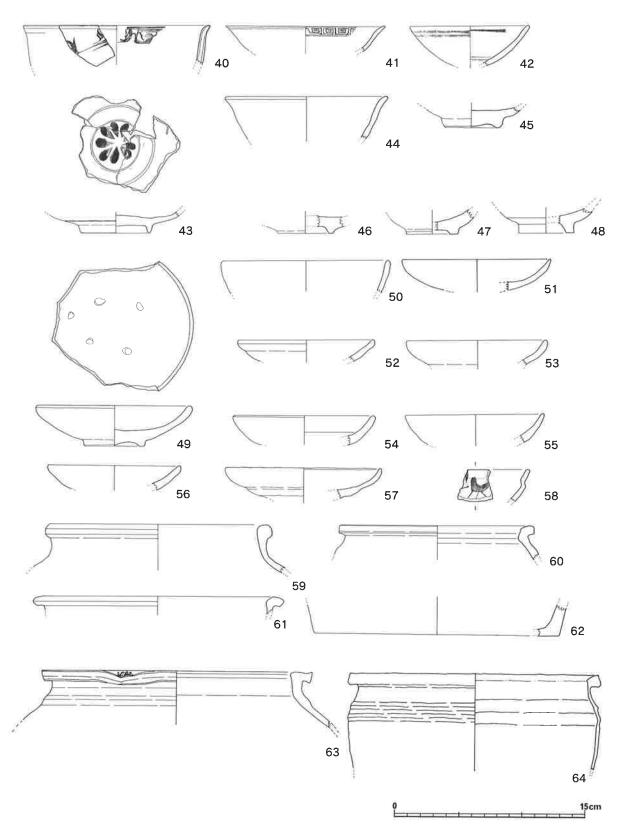
第12図 館跡出土遺物③(1/3)

79は火舎である。78は外面に2本の沈線があり、口縁部に木の葉文のスタンプ文様をもつものである。内面には細かい横位の刷毛目がある。79も外面に菱形のスタンプ文様をもち、内面には横位の刷毛目が施されている。内外面とも淡灰褐色で、胎土に石英・長石・雲母を含んでいる。80~82は

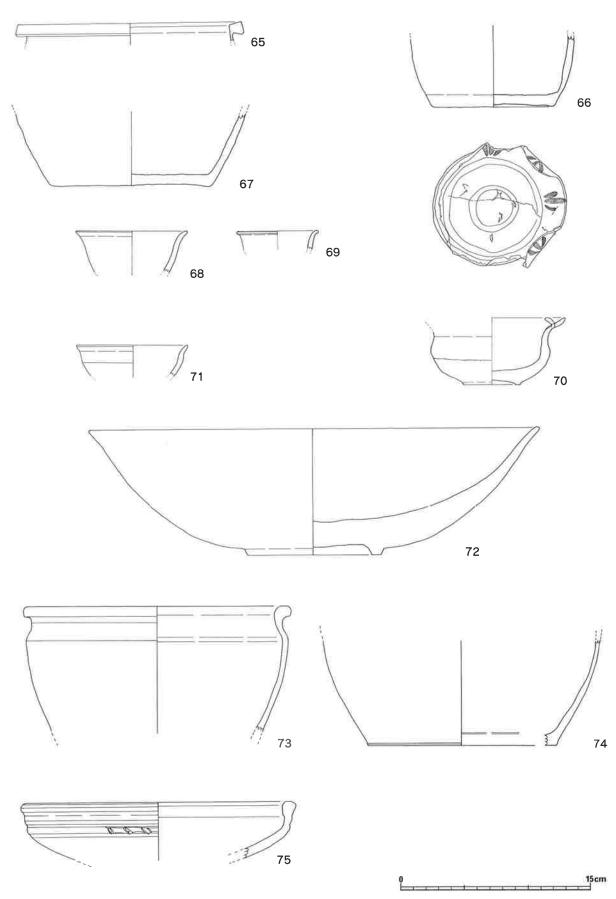


第13図 館跡出土遺物④ (1/3)

瓦質土器で甕の胴部であろう。80・82は内面に細かい横位の刷毛目がある。83は17世紀代の白磁 壺である。釉は淡灰緑色を呈する。84~89は土師器の小皿である。84は内外面とも肌色で、胎土に

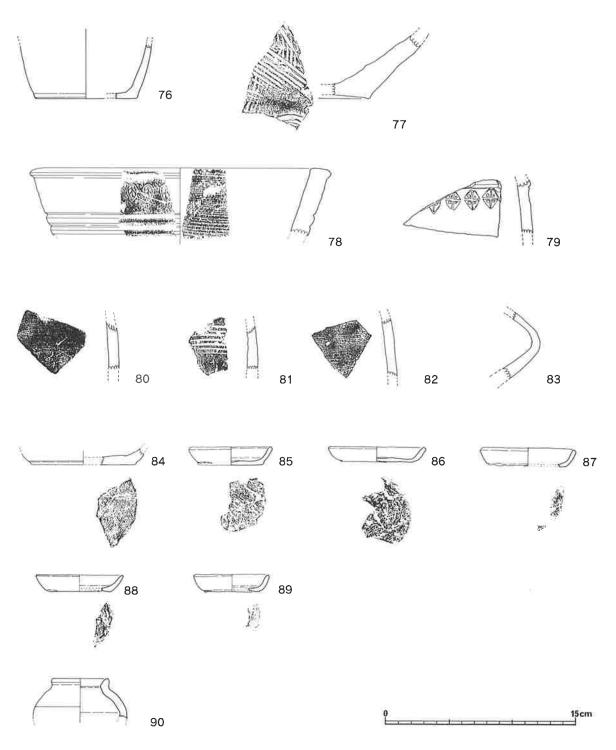


第14図 館跡出土遺物⑤ (1/3)



第15図 館跡出土遺物⑥ (1/3)

雲母を含んでいる。85は内外面に横方向のヘラ痕がみられ、底部は糸切りである。内外面とも橙黄色で、胎土に雲母を含んでいる。86~89は横方向にヘラ調整がなされ、底部は糸切りである。86は内外面とも橙黄色で、胎土に角閃石・雲母を含んでいる。87は内外面とも橙黄色で、胎土に雲母を含んでいる。88も内外面が橙黄色で、胎土に長石を含んでいる。89は内外面とも橙黄色である。90は肥前系白磁小壺で、17世紀前半の資料である。 (明石拡子・中田敦之)



第16図 館跡出土遺物⑦ (1/3)

## 表2 館跡地区出土遺物計測表

	1대 57	GIG 470	石質		/#: +v			
番号	地 区	器種		長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
1	KAG-T4-II	石鏃	黒曜石	2.00	1.60	0.40	1.00	
2	KAG-T4-II	石鏃	黒曜石	1.70	1.25	0.25	0.40	
3	KAG-T8-H	石鏃	灰白色黒曜石	1.35	1.80	0.35	1.00	
4	KAG-T5-H	剥片鏃	黒曜石	1.70	1.55	0.30	0.60	
5	KAG-0	スクレイパー	黒曜石	2.55	1.05	0.40	0.60	
6	KAG-T4-II	石鏃?	黑曜石	2.10	1.35	0.55	1.20	
7	KAG-T7-H	加工痕のある剥片	黒曜石	1.80	1.95	0.60	1.60	
8	KAG2-209	石鏃	黒曜石	3.10	1.60	0.50	1.60	
9	KAG2-136	石鏃	黒曜石	2.80	1.40	0.35	0.60	
10	KAG2-150	石鏃	黒曜石	2.15	2.15	0.45	1.80	
11	KAG2-220	石鏃	黒曜石	1.45	1,55	0.40	1.00	
12	KAG2-241	石槍	安山岩	6.70	1.80	0.85	9.40	
13	KAG2-24	サイドスクレイパー	黒曜石	3.75	2.95	0.80	6.90	
14	KAG2-141	使用痕のある剥片	黒曜石	4.00	3.00	0.90	7.90	
15	KAG2-89	縦長剥片	黒曜石	4.75	1.75	0.75	5.40	
16	KAG2-115	縦長剥片	黒曜石	3.90	2.05	0.85	6.15	
17	KAG2-245	不定形剥片	黒曜石	3.50	2.75	1.00	9.10	
18	KAG2-121	不定形剥片	黒曜石	4.60	2.60	0.80	5.70	
19	KAG2-8	エンドスクレイパー	黑曜石	1.50	2.70	0.60	1.80	

# 表3 館跡地区出土遺物観察表

番号	地区	種別	器種	径・器高 (cm)	生産地	備考
20	KAG-T8-H	青花	碗	復元口径11.9	景徳鎮窯	
21	KAG-T8-H	青花	小杯	復元口径12.2	景徳鎮窯	
22	KAG-T6-H	青花	小碗		景徳鎮窯	高台に福
23	KAG-T8-H	青花	大皿		景徳鎮窯	
24	KAG-T8-H	青花	碗	復元口径10.1	景徳鎮窯	釉淡灰白色
25	KAG-T8-H	青花	碗	復元口径9.8	景徳鎮窯	
26	KAG-T8-H	青花	碗	復元口径9.6	景徳鎮窯	
27	KAG-H	青花	碗	復元口径11.8	景徳鎮窯	釉淡灰白色
28	KAG-T7-東11	青花	碗	復元底径4.7	景徳鎮窯	釉淡白灰色
29	KAG-H	青花	Ш	復元底径3.8	景徳鎮窯	釉淡灰色 碁笥底
30	KAG-T7-H	白磁	Ш		景徳鎮窯	釉不透明 胎土灰白色
31	KAG-T8-H	青花	碗	復元口径12.2	景徳鎮窯	
32	KAG-T8-南石O	陶器	甕	復元底径13.8	唐津系	内面淡褐色 外釉緑褐色、茶褐色 石英
33	KAG-T8-H	陶器	碗	底径5.4	唐津系	内面淡橙白色 外面淡橙白色(肌色) 雲母、粒
34	KAG-T8-H	陶器	碗	復元底径5.8	李朝?	石英 雲母
35	KAG-T5-H	陶器	香炉	復元底径4.4	唐津系	内面淡黄褐色 外面淡黄褐色、釉緑褐色 雲母
36	KAG-T7-H	陶器	碗	復元口径10.2	唐津系	内釉淡緑褐色 外面淡褐色、釉淡緑褐色
37	KAG-T7-東O	陶器	碗	復元底径5.9	唐津系	内外釉緑褐色
38	KAG-T7-東11	陶器	甕	復元底径12.4	備前	内面濃橙褐色 外面濃茶褐色 長石・石英を含む
39	KAG2-12号-E0	瓦質	火舎	復元口径16.7		
40	KAG2-7	青磁	碗	復元口径14.9	龍泉窯系	釉緑灰色
41	KAG2-216	青花	碗	復元口径12.7	景徳鎮窯	
42	KAG2-267	青花	碗	復元口径9.5	景徳鎮窯	
43	KAG2-8号	青花	碗	復元底径5.6	景徳鎮窯	
44	KAG2-I	陶器	碗	復元口径12.9	李朝	<b>籼淡灰色</b>
45	KAG2-223	陶器	碗	底径4.2	唐津系	釉淡灰色
46	KAG2-195	陶器	碗	復元底径4.4	唐津系	釉(暗)緑灰色
47	KAG2-63	陶器	碗	復元底径4.0	唐津系	釉灰色
48	KAG2-181	陶器	碗?	復元底径4.4	唐津系	内釉緑褐色 外釉緑褐色、淡褐色 石英、長石を含む
49	KAG2-12号C0	陶器	IIII.	復元口径11.2	唐津系	釉淡灰色 胎土目あり
50	KAG2-3+25+73	陶器	碗	復元口径13.4	唐津系	
51	KAG2-12号E0	陶器	<u>III.</u>	復元口径9.8	唐津系	<b>籼淡緑褐色</b>
52	KAG2-12号C0	陶器	Ш	復元底径4.8	唐津系	釉灰色
53	KAG2-12号C0	陶器	Ш	復元口径10.9	唐津系	釉淡灰色 胎土目あり
54	KAG2-12号E0	陶器	.IIII.	復元口径11.3	唐津系	釉淡灰茶色
55	KAG2-165	陶器	Ш	復元口径12.7	唐津系	釉白(黄)色

# 表4 館跡地区出土遺物観察表

144	阳砂小匠区田		20 10 275 275			
番号	地区	種別	器 種	径・器高 (cm)	生産地	備考
56	KAG2-12号E0	陶器	Ш	復元口径10.6	唐津系	釉淡灰褐色
57	KAG2-12号E0	陶器	<u>III</u> .	復元口径12.4	唐津系	
58	KAG2-204	陶器	Ш		唐津系	釉灰褐色
59	KAG2-250	陶器	壺	復元口径17.9	唐津系	釉緑褐色
60	KAG2-6	陶器	壺	復元口径15.5	唐津系	<b>釉緑褐色</b>
61	KAG2-100+240	陶器	壺	復元口径19.8	唐津系	釉緑褐色
62	KAG2-191	陶器	壺	復元底径19.3	唐津系	釉緑褐色
63	KAG2-12号C0	陶器	雍	復元口径21.4	唐津系	内外面暗褐色 釉緑褐色 石英を含む
64	KAG2-12号E0	陶器	甕	復元口径19.6	唐津系	
65	KAG2-12号E0	陶器	甕	復元口径17.8	唐津系	
66	KAG2-12号E0	陶器	壺?	復元口径9.6	唐津系	
67	KAG2-12号E0	陶器	壺?	復元底径12.8		
68	KAG2-H	陶器	小坏?	復元口径8.8		
69	KAG2-12号E0	陶器	坏			釉淡灰茶色
70	KAG2-12号E0	陶器	碗	底径4.4	唐津系	
71	KAG2-12号E0	陶器	坏?	復元口径8.8	唐津系	
72	KAG2-12号E0	陶器	Ш	底径10.4	唐津系	内外面淡茶灰色 釉白灰色
73	KAG2-12号E0	陶器	甕	復元口径21.1	備前?	内面赤褐色 外面茶色 釉黄白色 石英を含む
74	KAG2-12号E0	陶器	甕	復元底径15.6	備前?	内外面暗茶色 釉黄白色 石英 上記と同じもの
75	KAG2-12号E0	陶器	鉢	復元口径21.8	備前?	釉淡黄白色 雲母、砂粒を含む
76	KAG2-12号E0	陶器	壺	復元底径8.2	唐津系	
77	KAG2-0	陶器	擂鉢		備前?	内外面暗赤褐色 石英、長石、雲母
78	KAG-T8-H	瓦器	火舎	復元口径23.8		
79	KAG2-12号E0	瓦質	火舎			内外面淡灰褐色 石英、長石、雲母
80	KAG2-12号E0	瓦質	甕?			内外面淡灰褐色 石英、雲母、砂粒を含む
81	KAG2-12号E0	瓦質	甕?			内面暗灰色 外面灰褐色 石英
82	KAG2-12号E0	瓦質	甕?			内面淡灰色 外面淡灰褐色 石英、長石、雲母
83	KAG2-12号E0	磁器	壺			内外面釉淡灰緑色
84	KAG2-80	土師器	小皿	復元底径8.4	在地系	内外面肌色 雲母
85	KAG2-H	土師器	小皿	口縁径6.6 底径5.2 高さ1.45	在地系	内面横方向にヘラ痕、ナデ上げ 外面横 方向にヘラ痕 色調橙黄色 胎土雲母
86	KAG2-H	土師器	小皿	口縁径7.6 底径5.6 高さ11.5	在地系	色調橙黄色 胎土角閃石、雲母 調整横 方向にへラ痕 底部糸切り
87	KAG2-H	土師器	小皿	口縁径7.6 底径6.0 高さ14.0	在地系	色調橙黄色 胎土雲母 調整横方向に ヘラ痕 底部糸切り
88	KAG2-H	土師器	小皿	口縁径7.0 底径5.4 高さ1.3	在地系	内外面横方向にヘラ痕 色調橙黄色 胎土長石 底部糸切り
89	KAG2-H	土師器	小皿	口縁径5.9 底径4.2 高さ1.35	在地系	色調橙黄色 調整へラ調整 底部糸切り
90	KAG2-0	白磁	壺	復元口径4.6	肥前	

#### (2) 郭跡地区 (第17図)

第3次調査は、館跡より東に望む城山山頂の郭跡地区を行った。郭跡地区は副郭地区を囲繞する石垣と主郭地区を囲繞する石垣とに囲まれた範囲で約8,000㎡を有している。調査はまず雑木竹林を伐開することから開始し、従来の地表観察では確認できなかった副郭と主郭を囲繞する石垣の全貌が出現した。副郭地区ではその石垣が主郭地区の西櫓台跡から北側に向かって半円形状に尾根を囲繞する石垣であることを確認した。その石垣の総延長は約250㎡あった。その石垣の一部が登山道によって切断されており、また、地区内は南側から北側に傾斜しているが、地区内には駐車場・トイレ・松浦テレビジョン中継放送所があり旧地形の一部が損なわれている現状である。

この調査では新たに副郭の東側で主郭北東端との境に竪堀1基、竪堀に隣接して集石遺構1基、集石遺構から北側に約75mの地点で平入虎口1ヵ所、副郭の最先端では石垣の外側に囲繞するもう一つの石垣が築かれている。幅 4.4mの腰曲輪を配置していることを確認した。この地点には自然石の露頭があり、節理にそって割れた石を石垣の石材として利用しているようである。登山道とテレビジョン中継放送所の間に狼煙穴(?)1基を検出した。

副郭地区を囲続する石垣は、当時構築された石垣が現在も表面にならんでいるのがみられるが、その保存状態は非常に悪く、崩落崩壊している箇所が至る所で見られた。石垣の中でも特に北側から西側に至る箇所は危険性を伴っている。副郭北側の先端部分から主郭北側の石垣までの長さは約 108m、現存する石垣の高さは約 0.9m~ 2.3mである。先端部から主郭西櫓台跡根石までの長さは約 145mである。現存する石垣の高さは約 0.9m~2mである。この部分には西側の麓の館跡地区の大手口と副郭を結ぶ虎口が存在している。平入虎口で幅は約 2.5m程ある。当時からあったと思われる石段も現存している。一つの石段に2石から3石を用いているが抜き取られて欠損している箇所もある。

竪堀は主郭北側の石垣部分から東側に副郭を囲繞する石垣の外側まで続いている。なお、竪堀の基点となる竪堀上を埋めている石垣は後世の積み直しであろうと思われる。竪堀は幅約6m・長さ約30mあり、現存する深さは約1m程で東側の麓まで急斜面を延びているが末端部の状況は不明である。竪堀より東側の傾斜地については民有地であるため精査を行っていない。

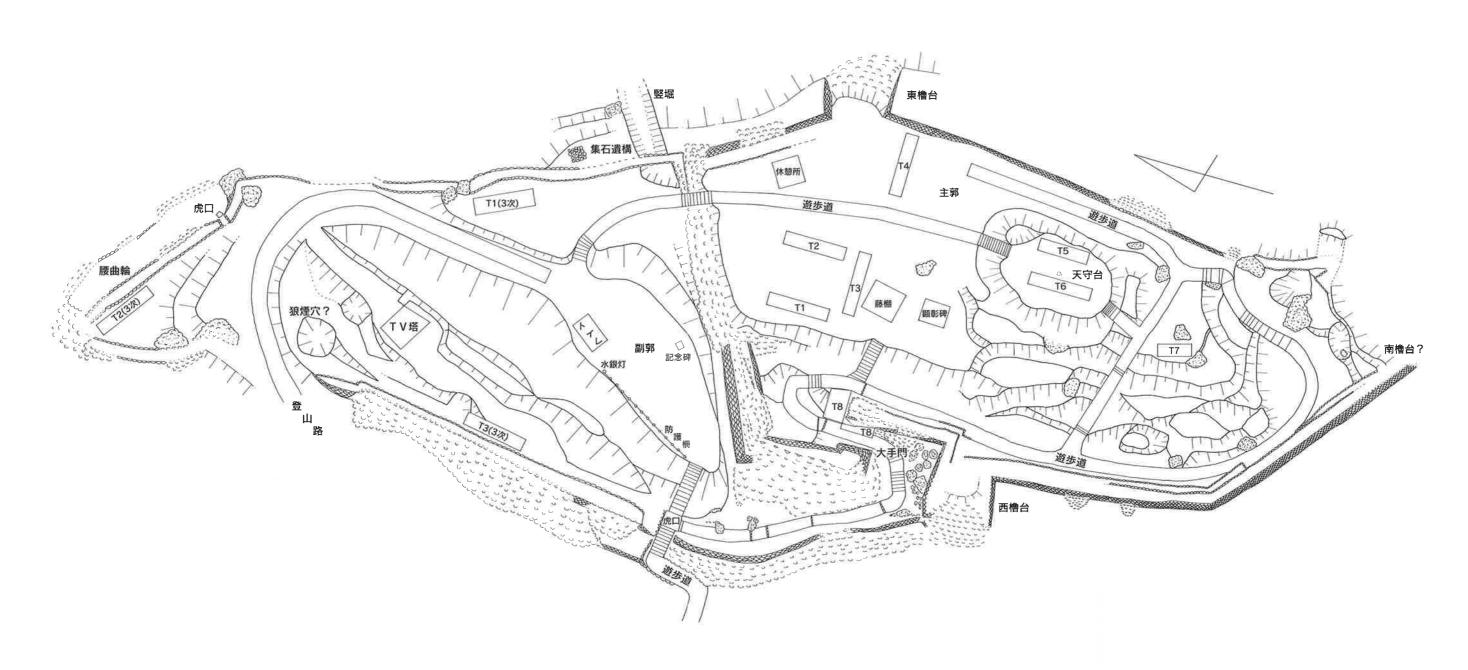
テレビジョン中継放送所の敷地より西側の地点に円形状で直径約6 m、深さ約3 mの凹地がある。当時の遺構の一部で狼煙穴の可能性を有している。しかし、地山の玄武岩風化礫層を掘り込んではいるが、壁面には熱を受けたような状況もなく焼土及び炭化物等も検出されなかった。あるいは通常水を溜める施設であるのか、壁面を見るかぎりでは溜めたような状況は確認されなかった。山城に関連するものか今後の精査が望まれる。狼煙穴を持つ城跡として佐世保市新替町に所在する井手平城跡がある。遺構は主郭の北側に位置する東出郭にあり、直径は約7 mで、深さ60cmの凹地で素掘りである。焼土及び木炭等は検出されていないようである。井手平城跡については後述するがこの遺構に関する類例の増加を待ちたい。

なお、昭和53年度に報告(第 I 章 -1 )されている副郭地区の北隅で発見された井戸跡は今回の調査では確認できなかったが、石垣の外側に井戸跡ではないかと思われるものを発見し、精査したが井

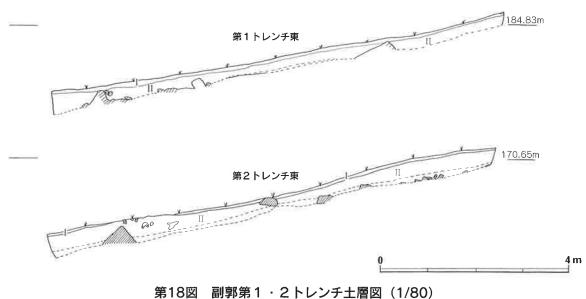
戸であるという結論までには至らなかった。

第4次調査は、梶谷城跡の中心部分である郭跡地区の主郭平場・天守台跡・大手門跡と呼称している箇所にトレンチを設定して行った。主郭平場に設定したトレンチの3ヵ所で掘建柱建物遺構の柱穴を検出したが、トレンチを2ヵ所設定した天守台跡では直ぐ地山に達し柱穴は検出できなかった。また、平場から天守台へ上る路あるいは大手門から上る路も発見することはできなかった。大手門跡ではかつてここに城門が存在していたことを想定させる柱穴の確認ができた。

主郭地区を囲繞する石垣は楕円形状を呈し、東側に東櫓台跡、西側に西櫓台跡と大手門跡を配置し てこれらを石垣で囲繞している。石垣は野面石あるいは粗割石を用いており、副郭を囲繞する石垣の 築き方とは明らかに違っている。主郭の石垣には算木積みを採っている箇所もある。東櫓台は上面の 石がほとんど残っておらず崩落しているが隅角部は粗割りした石材の控えがかなり短くてその稜線は ほぼ直線的に通っている。しかし、左右の引きが弱く算木積みの様相をほとんど窺えないという積み 方をなしている。この点特徴的な石積み技法として時期を示すものではなかろうか。この東櫓台から 南側に至る石垣の長さは約72mである。この部分の石垣の高さは2.3m~3.1mを測る。しかし、上 面部分は後世の積み直しであろう。南側での石垣の状況は崩落部分が長さ約20mにおよんでおり、地 表に出ている岩盤の礫も至る所で地辷りの影響を受けてずれていることが確認できる状況である。そ のため搦手の位置は現在不明である。この付近の石垣には東櫓台と同じような隅角部角石があること から南櫓台があったが崩落してしまったので隅角部角石のみ残ったのではなかろうかと考えている。 南側から南西側の隅角部角石までの長さは約40mでこの範囲では岩盤を利用してその上に石積みをし ている箇所が見受けられる。隅角部もその一つであり、シノギ積みで築いているその角度は 138度を 有している。石垣の高さは 3.3mである。この隅角部から西櫓台に至るまでの長さは約35mで、高さ は 2.9mを測る。大手門では、間口約3.8m、奥行約5.6mで比較的小さな門であったと思われる。門 がかかっていた思われる位置に対して西櫓台が強烈な横矢をかけており、東側にも長さ16mの大きな 横矢が張り出している。4折れする構造は防御性をも増強させているようである。西櫓台は隅角部の 根石間が約10.6mあり、西側の斜面に向かって崩壊が目立つ。北西隅角部は7石の角石があり角部を 有する野面石でノリをつくっている。石垣の高さは 3.3mである。主郭地区で最も高い位置を占める 天守台跡は東西幅約11m、南北幅約18mに削平して平場を設けている。



第17図 郭跡地区地形測量図(1/600)



### 副郭地区土層 (第18図·第19図)

第1トレンチ・第2トレンチとも石垣内側の傾斜地に設定した。東側の第1トレンチで 1.7mの高 低差があり、II層は厚さ20cmの灰褐色粘質土で、Ⅲ層は玄武岩の地山である。南隅にピット1基を検 出している。北側の第2トレンチでは 1.9mの高低差がある。表土より石鏃と青花碗が出土。

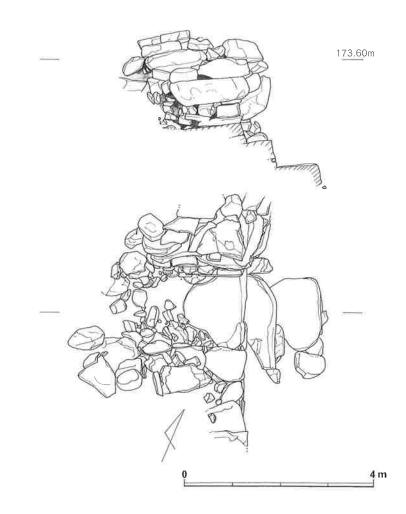


第19図 副郭第3トレンチ土層図 (1/60)

第3トレンチは西側を囲繞する石垣のそばに設定した。石垣上面は崩落しており、根石も水平を意 識してはいない。 層の茶褐色粘質土中に石垣が築かれており一番多くの遺物が出土している。

# ①遺 構 (第20図・第21図) 虎口 (第20図)

副郭北側で平入虎口を検出し た。階段の幅は約75cmを有し、 現状で三段の石段がある。一段 目から二段目までの高さが29cm で、二段目から三段目までの高 さが22cmを測る。石段は同じ ように水平面を確保するため2 個の石を石段の下に挟んで調整 を取っている。正面三段目の石 段は奥行き60cmを測る。左右 とも隅角部角石は控えがなく算 木積みはみられない。正面右側 の二番角石の支えに横長の小石 を二段積みにしている。現存す る高さは約1mで、五段積みで 勾配は直立に近い。腰曲輪と副 郭を結ぶ通路として利用されて いたものと思われる。



第20図 副郭北側虎口実測図(1/40)

#### 集石遺構 (第21図)

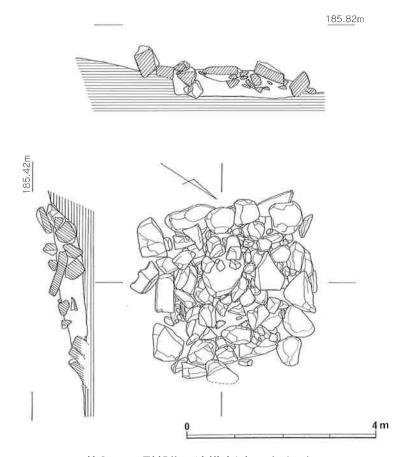
副郭を囲続する石垣と主郭北側石垣が接する地点から約17m地点、竪堀の北側に集石遺構が位置している。遺構は1.65mの方形を呈し、四囲にやや大きめの自然石を配置して基礎石とし内側には拳大の自然石を無作為に間隔がないくらいに詰め込んでいる。自然石の数は 109個とさほど多くなかった。遺構の南東側に宝篋印塔の基礎部分が1点あった。この基礎部分は本来は遺構内の中心の自然石の上に単に宝篋印塔が据えられていた可能性が強く、これが転げ落ちてしまって現在地に移動したものと思われる。その他の宝篋印塔の相輪・笠・塔身部分は遺構の周辺を含めて発見できていない。自然石を取り除くと直ぐに地山に達し下部構造の墓壙は確認できなかったため埋葬墓ではなかった。地山の南北方向への傾斜はほとんどなく、南西から北東方向に10cmほど低くなっているのみであるが特別にこの部分を整形したものとは考えられない。

### 集石遺構の遺物 (第22図・第23図)

宝篋印塔基礎の石材は安山岩製で台形状を呈している。基礎下端は弧状に四脚形を造り出した猫足

を持ち、基礎上端に一段の階段を造りだしている。法量は、背高15.7cm・横幅下端25.5cm・横幅上端15.7cm、一段横幅24.2cm・階差2.8cmを測る。底面は荒加工のままを呈している。陰刻された銘文は4面とも確認できなかった。製作年代は塔身・笠・相輪が欠けているが1,500年代の範疇に入ると思われる。

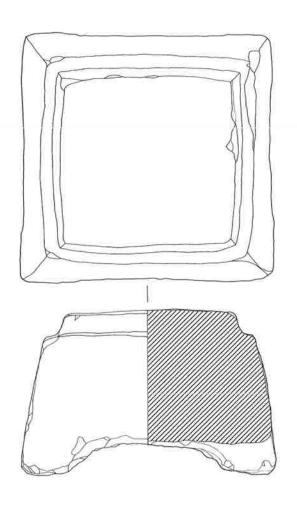
山城の山頂部にこのような 宝篋印塔が位置していること が不思議であり類例として梶 谷城跡より南方約6.2kmの地 点佐賀県伊万里市東山代町に 源久の嫡男源直が築いたとい われている標高約450mの山 稜付近に山ン寺城がある。こ



第21図 副郭集石遺構実測図 (1/40)

の山ン寺城域に源久の遙拝墓と源直夫妻の墓、源清の墓などがある。城主等に関連する墓塔は城跡の 城下周辺の寺や寺跡にあるのが通例であることからこの集石遺構は墓塔というよりも遙拝所 (水上げ 所) としての位置付けができるのではないだろうか。 (中田敦之)

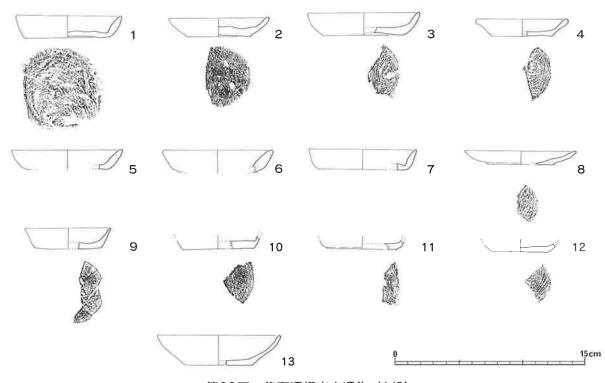
出土遺物としては土師器の小皿が遺構内より30点と周辺より24点の54点(接合後の点数)が出土している。その内で実測が可能だった13点を図示した。底部の切離しはすべて糸切りである。法量より皿類に分類できる。口径9.8cmで、器高1.7cmを測る。口径が大きく器高が高いタイプを I 類、口径が8 cm~9 cmで平均値が8.6cmあり、器高が1.1cmと小型化するタイプを II 類。皿類が口径も小さく7.4cmで、器高も1 cmと低いタイプに分けられる。2~4・8~12の底部は糸切りである。2 は内面底部中央に指頭で押圧した痕が残っている。内外面とも肌色で、胎土に雲母・角閃石を含む。3 は外面底部に指頭痕が見られる。外面は横ナデされている。内外面とも淡橙白色で、雲母・砂粒を含む。4 も外面底部に指頭痕が見られる。口縁端部は丸みを帯びている。内外面とも淡橙白色で、雲母・砂粒を含む。5 は底部は回転糸切りによる。外面横ナデされている。内外面とも淡橙白色で、雲母を含む。でいる。6 は内外面が淡橙褐色である。7 は内外面が淡橙(白)色で、雲母・石英を含んでいる。8 は内外面とも淡橙褐色で、胎土に雲母を含む。9 は内外面とも淡橙色である。10は内外面は暗褐色で、雲母を含む。底部は回転糸切りによる。11は内外面が橙色で、胎土に雲母・石英を含む。12 は内面



ナデ調整されており、内外面は橙色である。13は内外面が橙色である。14は内外面とも淡橙色である。2類が14で、1類が $1\sim3\cdot6\sim9$ 、210にあたる。

(明石拡子・中田敦之)

第22図 集石遺構内基礎実測図 (1/4)

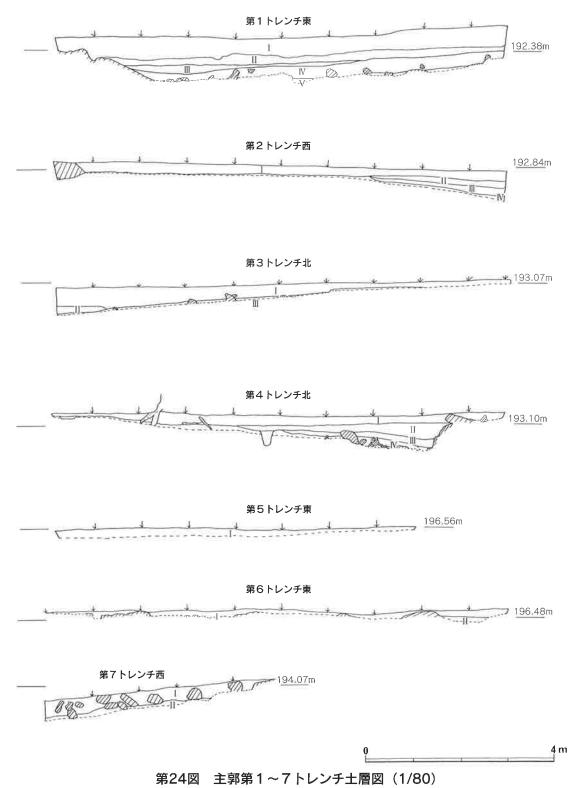


第23図 集石遺構出土遺物(1/3)

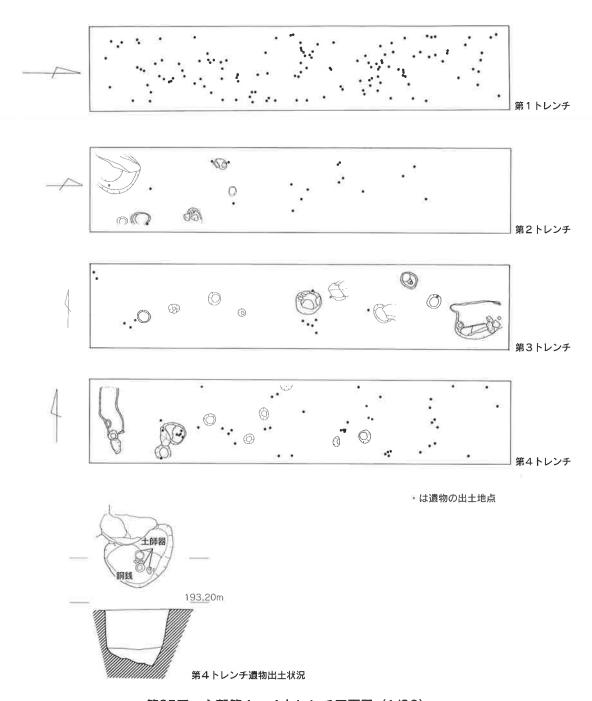
主郭地区トレンチ (第24図~第28図)

第1トレンチ (第24図・第25図)

第1トレンチは、造成の状況を把握するため平場の北西に設定した。I層は撹乱層で約40cmの堆積、 II層からⅣ層が包含層で、II層は黄褐色混礫層、Ⅲ層は褐黄色粘質土、Ⅳ層は軟らかくてしまってい ない灰黒色粘質土、Ⅴ層は地山で北側には大きな自然石がある。土層は南側から北側へ緩やかに傾斜



− 43 −



第25図 主郭第1~4トレンチ平面図(1/90)

している。遺物が出土した地点の標高は191.5m~192.6mで、 285点の遺物が出土している。

### 第2トレンチ (第24図・第25図)

第2トレンチは、第1トレンチの東側に設定した。20cmの表土層を剥ぐと第1トレンチ同様に南側より北側に緩やかに地山が傾斜しており北側部分では地山の上に固くしまっているII層の灰褐色混礫層と、しまりがない皿層の灰黒褐色粘質土がある。この地点より山頂部を削平した土を平場の面積を確保するために造成していったものと思われる。地表より20cm程掘り下げると大小7個の柱穴を検出

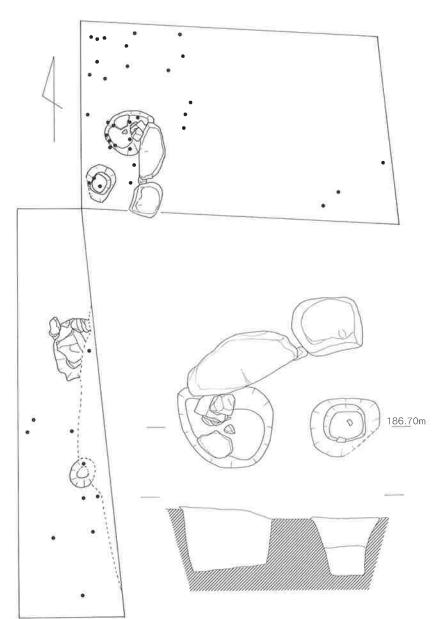
した。南端に直径約1mの柱穴があり、一辺が1m程の自然石を配している。柱穴は北側の整地面には柱穴が検出できなかった。柱穴の大きさは直径20cm~40cm大で、深さは10cm~26cmである。遺物は36点出土している。その内2点が整地層からの出土である。

第3トレンチ(第24図・ 25図)

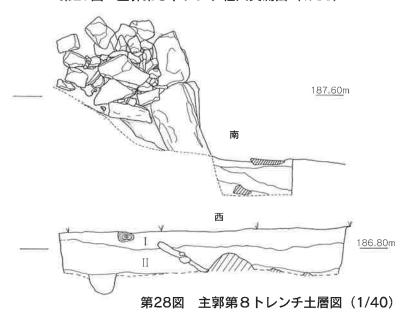
第3トレンチは、藤棚 の北側、第1・第2トレ ンチの南側に設定した。 東側から西側にかけて緩 やかに傾斜しており、東 側では表土層の厚みが 10cmで、すぐ地山に達 した。西側では40cmの 表土層がある。II層が灰 黒褐色粘質土で第1トレ ンチの 層にあたり西端 で検出した。表土層を剥 ぐと9個の柱穴を検出し た。柱穴の大きさは直径 20cm~60cm大で、深さは 10cm~27cmである。遺物 が44点出土している。

第4トレンチ(第24図・ 25図)

第4トレンチは、東櫓



第26図 主郭第8トレンチ平面図 (1/60) 第27図 主郭第8トレンチ柱穴実測図 (1/30)



#### 松浦市内遺跡確認調査(4)

台跡側で石垣の内側の状況を把握するために設定した。西側では表土が5cmで直ぐ地山に達した。東側では20cmである。地山も西側から東側へ傾斜しており、一番東側で地表より80cmの深さである。 Ⅲ層が灰黒褐色粘質土で最下部には拳大の礫を敷き詰めている。第1トレンチのⅢ層と同一である。 Ⅲ層は赤褐色粘質土で軟らかくしまっていない。表土を剥ぐと柱穴10個と北側へと続いている幅40の溝(排水溝か)と思われる遺構を検出した。いずれも地山に掘り込まれている。トレンチ内の柱穴の内最も大きい卵形を呈した長径59cm、深度42cmの柱穴底面から銅銭1点と土師器小皿4点が出土している。銅銭とかわらけが一括埋納されているため地鎮めの遺構と考えている。銅銭は磨滅が著しく解読不能であるが文字らしきものは確認することができる。現存の大きさは銭径2.16cm、外縁厚さ0.135cm、孔長0.73cmである。同じくこのトレンチからは2点の銅銭が出土しているが腐蝕が著しく判読は不可能である。これらの遺物もあわせて66点が出土している。

#### 第5・第6トレンチ (第24図)

主郭の一段高い所には東西約11m、南北約18mの方型の天守台跡がある。この天守台跡の地点に 2ヵ所のトレンチを設定した。しかし、直ぐ地山に達し遺構等は発見できなかった。この点周囲に礎 石とおぼしき自然石が散在しているが配列上の一定の規則性は確認できなかった。

#### 第7トレンチ (第24図)

天守台跡の南側に第7トレンチを設定した。この地点での造成状況を把握するためである。地表より40cm程掘り下げると直ぐ地山に達し、遺構・遺物等の検出はできなかった。

### 第8トレンチ (第26図~28図)

第8トレンチは、大手門跡で、門があったと想定され、なんらかの建物遺構の存在が考えられる地点に設定した。この大手門の入口の平面構造は進行方向から見ると左折れの「内桝形」形式の虎口となっており、「L」字状に曲がって進む進路形態が「4折れ」する構造は防御性をも増強させているようである。このような高度な造りは在地勢力ではなく明らかに中央権力の影響を受けていると思われる。礎石による建物遺構の検出はできなかったが、門の存在をうかがわせる4個の素掘りの柱穴が検出された。1点であるが断面四角形を呈し、長さが9㎝の鉄釘が出土している。4個のピットの中でも、青花の染付碗が出土したピット3の柱穴はプランが隅丸方形状を呈している。柱穴の心々間で測ったら、ピット1とピット2の柱間が2m、ピット2とピット3が2.6m、ピット3とピット4が0.95mと多少の差があった。各ピットの大きさはピット1が直径40㎝、深さ31㎝、ピット2が直径100㎝、深さ57㎝、ピット3が長径55㎝、短径46㎝、深さ46㎝、ピット4は長径82㎝、短径68㎝、深さ52㎝であった。この大手門の規模・構造は一般の城郭の虎口より小さいが、大手門という伝承のあること、城郭全体におけるその位置、城下からの見え方などを考えると城郭の門としての軍事的機能は備えられていたと思われる。 (中田敦之)

### ②遺 物 (第29図~第34図)

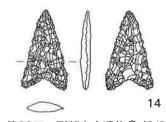
第3次調査では、80点の遺物が出土している。第1トレンチで5点、第2トレンチで2点、第3トレンチで19点、その他は集石遺構内出土とその周辺からの出土である。第3トレンチでは16世紀後半から17世紀初頭の輸入陶磁器である青花の染付碗と国内産の唐津系陶器碗・土師器小皿・瓦質捏鉢などがあった。

1~24は第3次調査で出土した遺物である。

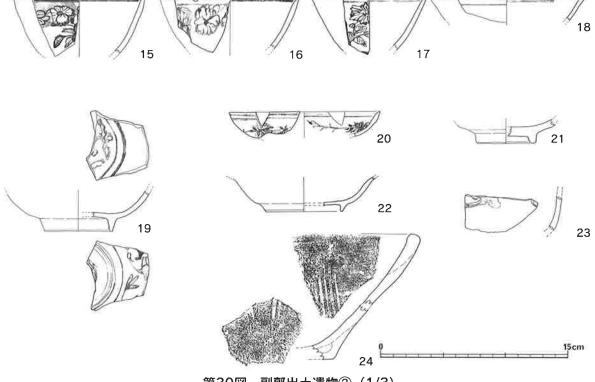
1は黒色黒曜石製石鏃で凹基無茎鏃である。刃部には鋸歯状加工が施され緻密な剥離調整が行われている。脚部は短く、器形は二等辺三角形を呈している。第2トレンチ表土出土である。

15~21は景徳鎮窯の青花で明代の染付碗である。15~17、19・20は草花文が描かれている。22は中国製の白磁の皿である。釉は白色で、胎土は白灰色である。23は明末の青花の染付碗で、内外面は灰白色である。24は土師質の擂鉢である。内面には横方向の刷毛目調整後に5本単位の櫛状工具で擂目が施されている。最もかなり使用していると見られ、底部周辺は磨滅している。15・17・21・22・24は第3トレンチII層出土。16・18・20は第1トレンチ表土出土。23は第2トレンチ表土出土である。

第4次調査では、約502点の遺物が出土している。調査区の中でも第1トレンチからは285点と多数出土しており、その遺物の標高は191.5m~192.6mの間であった。第2トレンチからは36点出土している。第3トレンチからは44点出土している。第4トレンチからは66点出土している。第8トレンチからは71点であった。その他に表面採集した遺物が含まれる。

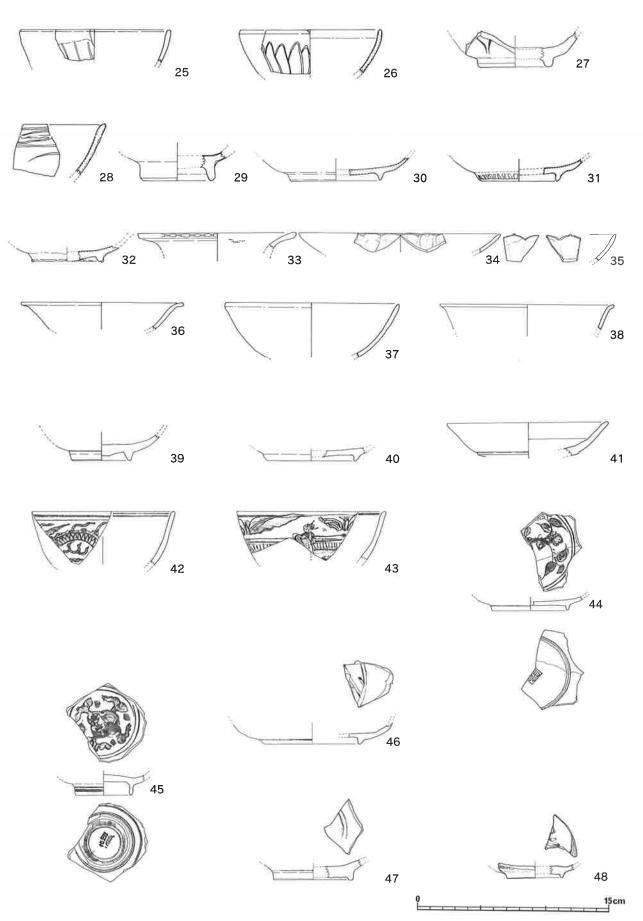


第29図 副郭出土遺物①(2/3)



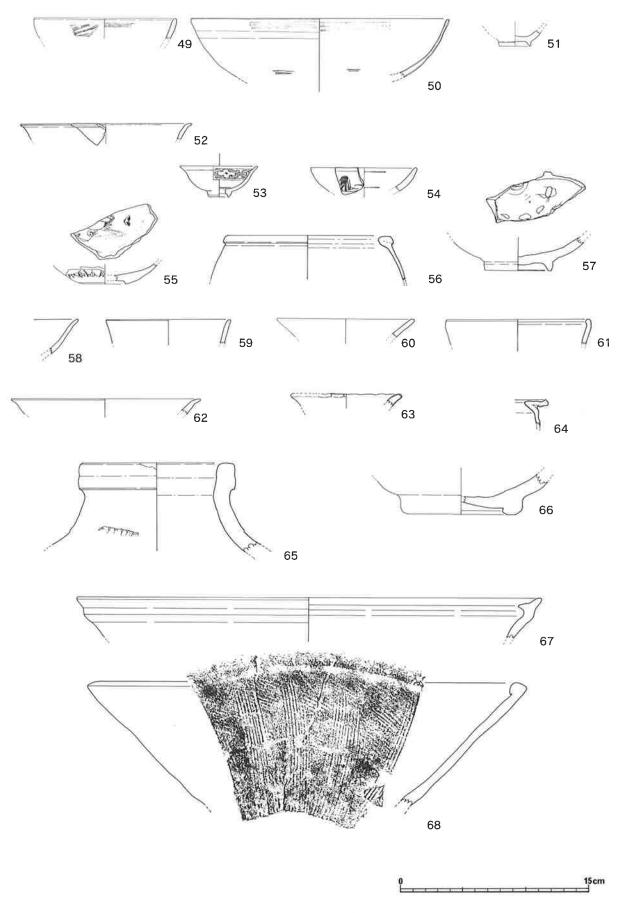
第30図 副郭出土遺物② (1/3)

### 松浦市内遺跡確認調査(4)

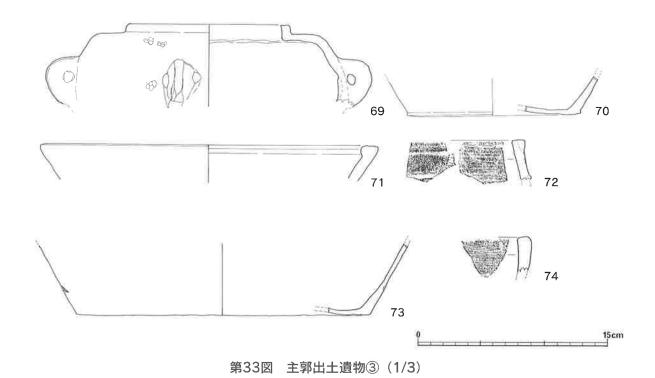


第31図 主郭出土遺物① (1/3)

### 松浦市内遺跡確認調査(4)



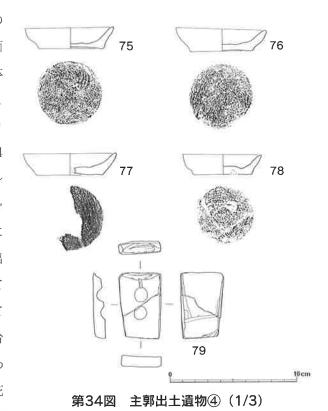
第32図 主郭出土遺物②(1/3)



25~79は第4次調査で出土した遺物である。

25~35は龍泉窯系の青磁碗である。25・26はヘラ先による細線の線描蓮弁文である。25は剣頭 が蓮弁としての単位を意識しないで施されている。釉は淡緑灰色で、胎土は濃灰色である。第1トレ ンチ出土。26は細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されている資料である。釉は青緑色、 胎土は濃灰色で、主郭での表採資料。14世紀から15世紀前半代の資料である。27は蓮弁が片切彫で 施されている。断面四角の高台を持ち釉は緑色で高台畳付と一部高台内まで施釉されている。第8ト レンチ出土。28は口縁部外面に片切彫で雷文帯が施されている。釉は緑灰色で、胎土は灰色である。 貫入あり。主郭での表採資料。29は碗で高い高台部を有している。釉は青緑色で、一部高台内まで流 れている。胎土は灰黄色である。第1トレンチ表採資料。30・31は青磁の皿である。30は器壁が比 較的薄く成形されており、高台は逆三角形状を呈している。胎土は白灰色で黒色の粒子を含んでいる。 全面に施釉後高台畳付の釉を削り取っている。主郭での表採資料。31は高台脇に刻み目が施されてい る。釉は淡青色で、青白磁風の釉色である。高台畳付の釉は削り取られている。胎土は白色で、黒色 の粒子を含んでいる。西櫓台跡での表採資料。32は高台畳付まで一部施釉されている。釉は灰色で、 胎土は灰色である。高台畳付部分は赤色で砂目が残っている。第1トレンチ出土。33は青磁の皿であ ろう。口縁端部を外反させた稜花皿と思われる。主郭での表採資料。34・35は青磁で器種は皿であ ろうか。第4トレンチ出土。内外面に溝状の彫り込みを入れ菊花形皿としたものである。34は細かい 気泡を含んだ薄い緑色のガラス質釉がかかり一見青白磁のような釉色である。16世紀代の資料である う。36~39は中国産で、16世紀代の白磁碗である。36の体部は湾曲気身に立ち上り、口縁端部は水 平に作り出している。釉は発色不良のため不透明で、胎土は白色である。主郭での表採資料。37は釉 が白色で、胎土も白色である。天守台西での表採資料。38は第1トレンチ表土出土。39は高台畳付

の釉が削り取られている。40・41は中国産の 白磁の皿である。40は釉が白(黄)色で、全面 施釉後に高台畳付の釉を削り取っている。全体 に貫入が見られる。天守台西での表採資料。41 の釉は白灰色で、体部上位まで施釉されており 貫入が見られる。第4トレンチ出土。42~54 は景徳鎮窯の青花染付で碗と皿がある。42~ 47・49~53は碗である。42は外面に雲龍文を 染付している。第4トレンチ出土。43は外面に 官人図を描いている。第8トレンチピット3出 土。44は内面見込みの圏線内に草花文を描いて おり、低い高台内には「福」の文字が描かれて いる。高台畳付はヘラで削られている。天守台 西での表採資料。45は見込みが盛り上がるいわ ゆる饅頭心の碗で、内面見込みにくずれた草花 文を描いている。高台内には「福」の文字が描



かれている。16世紀後半代に位置付けられる資料である。第8トレンチ表土出土。46~48は内面見 込みに草花文が描かれ、高台畳付の釉は削り取られている。第4トレンチ出土。47は火を受けたのか 釉が発砲している。第4トレンチ石垣出土。48は染付の小皿である。50は体部が内湾気味に開き、 内外面に圏線を巡らした碗である。第8トレンチ出土。51は一見青白磁風の釉色である。第8トレン チ出土。52は口縁部の内外面に一重圏線を巡らした碗である。第1トレンチ出土。53は小振りの皿 である。口縁部には四方襷文を圏線で囲って全周させ、見込みに一重圏線が染付されている。全面に 施釉後高台畳付の釉を削り取っている。第8トレンチ出土。54は染付の皿である。釉は淡灰白色で、 天守台西での表採資料。55は底部を碁笥底に作っている皿である。畳付は露胎で、外面に波濤文を、 見込みに草花文を描いている。16世紀前半から中頃の資料であろう。第3トレンチ表土出土。56は 李朝の雑釉陶器であろう。胎土は青味がかった灰色で、石英・砂を含んでいる。16世紀頃の壺である。 57も李朝の雑釉陶器で、内外面は淡灰褐色で、胎土に石英・長石を含んでいる。見込みに砂目跡が残 っている。第8トレンチ表土出土。58は唐津系陶器の碗である。口縁部に鉄絵が施されている。第1 トレンチ出土。60は白磁であろうか。第3トレンチ表土出土。61は唐津系の碗であろうか。釉は緑 褐色である。63は青磁の皿である。釉は青緑色で、胎土は灰白色である。輪花文が施されている。西 櫓台での表採資料。64は陶器の甕である。釉は緑色で、胎土は暗赤褐色である。第3トレンチ表土出 土。65は備前の陶器壺であろう。口縁部が垂直に立ち上がり、端部を押さえつけたような器形を呈し ている。内面は暗赤褐色、外面は暗褐色で胎土に石英・長石を含んでいる。外面には縦方向にヘラ痕 がみられる。第3トレンチ表土出土。66は内面が淡灰茶色で、外面は黒色の釉が施されている。高台

は火を受けているのか釉が発砲している。主郭での表採資料。67は備前の鉢であろう。口縁端部は内 側に突出させている。68は土師質擂鉢である。口唇部を内側に折り曲げて成形している。内面はヘラ 調整後に櫛目を入れている。櫛目は8本で一単位とし、上から見て右回りに施している。かなり使い 込んでいるのか櫛目が磨滅している。第2トレンチ出土。69は瓦質耳付の羽釜である。全体に球形に 近い胴部に短く立ち上がる口縁部を有している。4個で一単位の梅文様のスタンプによる文様が施さ れている。天守台西での表採資料。70は陶器壺で、内外面は淡黄褐色である。第4トレンチ出土。同 一個体と思われる資料が第1トレンチより出土している。71は周防型捏鉢で、内外面が淡灰赤色であ る。胎土には雲母・石英を含んでいる。第4トレンチ出土。72は陶器の鉢で、円形の印判がスタンプ されている。内面は横位の調整が行われている。内外面とも淡灰赤色で、胎土は白灰色で長石を含ん でいる。大手門での表採資料。73は陶器の甕である。薄く自然釉がみられるが粗雑な造りである。第 1トレンチ出土。74は瓦質の捏鉢である。内面に横位の刷毛目調整が施されている。外面は青みがか った黒色で、胎土は白灰色で砂を微量含んでいる。やや粗雑である。主郭での表採資料。75~78は 土師器の小皿である。 4個とも第4トレンチの地鎮め遺構と思われるピット内からの出土である。回 転糸切りで、第Ⅲ類に分類される。79は鉄砲の弾丸の鋳型と思われる。縦幅5.25cm、最大横幅 3.4cm、最小横幅 2.8cmを呈している。表面には直径 1.2cm、深さ0.45cmと 1.0cm、深さ0.25cmの穴 を2ヵ所有している。大きい穴のほうには上面の湯口と思われる所より幅0.25cmの溝が彫り込まれて いる。裏面には摩ったような条痕が縦方向にみられる。側面は面取りが行われている。この鋳型はあ と半分の鋳型があって機能していたのではないかと思われる。出土地点は第8トレンチの大手門跡周 辺であり鞴羽口や被熱した粘土塊、坩堝等の鋳造に関連する遺構が検出されていないため搬入品であ ろうと思われる。

図示していないがその他の遺物としては、周防型土鍋の脚部分・土師器杯片・外面を研いている瓦質捏鉢片等がある。

以上、館跡地区・主郭地区の遺物について説明したが、ここで若干の考察を試みる。出土遺物の傾向としては館跡地区・郭跡地区とも陶器類でも唐津系の遺物が多いことが特徴といえよう。豊臣秀吉による名護屋城築城前後の岸嶽系陶器を最古のグループとする16世紀後半から17世紀前半に編年されている陶器類である。胎土目・鉄絵を施した絵唐津の製品などは大橋 I 期(1580~1610)に特徴的な要素である。磁器については、中国製の青磁・白磁・青花染付の輸入品で占められている。青磁は館跡地区で1点の鎬蓮弁文碗がある。13世紀前半から14世紀前半の資料である。また、線描蓮弁文や稜花皿があり、15世紀後半から16世紀前半の資料である。染付では小野編年染付皿C群(碁笥底)・碗E群(饅頭心)があり、16世紀中頃から16世紀後半に与えられる資料である。遺物の年代観は、館跡・郭跡地区とも15世紀後半から17世紀前半で押さえられるようである。

(明石拡子・中田敦之)

【引用・参考文献】

大橋康二 2000 「Ⅰ九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会

# 表5 郭跡地区出土遺物計測表·観察表

番号	4th 57	器種	<b>元</b> 庭	法量				備	考			
宙与	地	区	器	但	1_1	質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	加考	5
14	KAG3-T2	2	石	鏃	黒	翟石	3.15	1.85	0.40	1.60		
79	KAG4-T8	3-44	鋳	型	硬質研	沙岩?	5.25	3.40	1.00	31.38		

番号	地区	種別	器 種	径・器高 (cm)	生産地	備考
1	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	口径8.35 底径6.4	在地系	内外面肌色 雲母、角閃石
2	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元口径8.0 復元底径5.0	在地系	内外面淡橙白色 雲母、砂粒
3	KAG3-1号内	土師器	小皿	復元口径9.0 復元底径6.4	在地系	内外面淡橙色 雲母、砂粒
4	KAG3-1号周辺	上師器	小皿	復元口径7.4 復元底径4.8	在地系	内外面淡橙白色 雲母
5	KAG3-1号内	土師器	小皿	復元口径8.8	在地系	内外面淡橙色
6	KAG3-1号内	土師器	小皿?	復元口径8.8	在地系	内外面淡橙(白)色 雲母、石英
7	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元口径8.6 復元底径6.9	在地系	内外面淡橙褐色 雲母
8	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元口径8.9 復元底径5.4	在地系	内外面淡橙色
9	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元口径6.8 復元底径5.3	在地系	内外面暗褐色 雲母
10	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元底径5.7	在地系	内外面橙色 雲母、石英
11	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元底径5.6	在地系	内外面橙色
12	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元底径4.4	在地系	内外面橙色
13	KAG3-1号周辺	土師器	小皿	復元口径9.8 復元底径5.1	在地系	内外面淡橙色
15	KAG3-3-19	青花	碗	復元口径10.4	景徳鎮窯	
16	KAG3-3-T1	青花	碗	復元口径11.0	景徳鎮窯	釉淡灰青色
17	KAG3-3-11	青花	碗	復元口径8.9	景徳鎮窯	
18	KAG3-T1	青花	碗	復元口径12.2	景徳鎮窯	
19	KAG3-W0	青花	碗	復元底径5.4	景徳鎮窯	
20	KAG3-T1+E0	青花	碗?	復元口径12.0	景徳鎮窯	
21	KAG3-3-7	青花	碗	復元底径4.7	景徳鎮窯	釉淡灰色
22	KAG3-36	白磁	Ш.		中国産	釉白 胎土白灰色 畳付部分砂
23	KAG3-T2	青花?	碗		中国産	内外面灰白色
24	KAG3-T3+T3-16	土師質	擂鉢			内面横方向にハケ目調整後、櫛目
25	KAG4-T1-103	青磁	碗		龍泉窯系	釉淡緑灰色 胎土濃い灰色 外面にヘラ沈線
26	KAG4-主郭H	青磁	碗	復元口縁径11.0	龍泉窯系	釉色調青緑色 胎土濃い灰色 細蓮弁 貫入あり(釉のムラ?)
27	KAG4-T8-36	青磁	碗	復元底径5.5	龍泉窯系	釉緑色 蓮弁文
28	KAG4-主郭H	青磁	碗		龍泉窯系	釉色調縁灰色 胎土灰色 (黒色粒子) 外面に片彫で文様あり へラ調整
29	KAG4-T1-H	青磁	碗	高台径5.9	龍泉窯系	釉色調青緑色 胎土灰黄色で黒粒子混 へラ調整後に釉を塗布
30	KAG4-主郭H	青磁	Ш	復元高台径6.8	龍泉窯系	胎土白灰色、黒粒子混 貫入あり (釉ムラ?) 高台部分にやや厚く釉が塗布 高台端和かきとり
31	KAG4-西ヤグラ	青磁	Ш		龍泉窯系	和色調淡青色、高台内は白青色 胎土 白色(黒粒子) 高台部分にキザミ目
32	KAG4-T1-64	青磁	皿?杯?		龍泉窯系	釉灰色、厚手 胎土灰色 (黒粒子) 高台畳付部分赤色
33	KAG4-主郭H	青磁		復元口径12.6	龍泉窯系	
34	KAG4-T4-8	青磁	Ⅲ?	復元口径16.0	龍泉窯系	輪花文
35	KAG4-T4-9	青磁	Ш?		龍泉窯系	輪花文
36	KAG4-主郭H	白磁			中国産	釉発色不良 (不透明) 胎土白
37	KAG4-天守台西	白磁	碗		中国産	釉・胎土白 口縁部に比較的釉が厚め
38	KAG4-T1-H	白磁		復元口径13.7	中国産	
39	KAG4-T8-19	白磁	碗	復元口径9.8	中国産	

# 表6 郭跡地区出土遺物観察表

番号	地区	種別	器種	径・器高 (cm)	生産地	備考
40	KAG4-天守台西	白磁	Ш?	復元底径6.8	中国産	釉白灰色
41	KAG4-T4-28	白磁	1111.	復元口径12.7	中国産	釉白 (黄) 色
42	KAG4-T4-23	青花	碗	復元口径11.4	景徳鎮窯	竜文
43	KAG4-T8-33+34	青花	碗	復元口径11.8	景徳鎮窯	山水人物図
44	KAG4-天守台西	青花	碗	復元底径5.8	景徳鎮窯	高台内に福
45	KAG4-T8-H	青花	碗	復元底径4.4	景徳鎮窯	高台内に福
46	KAG4-T4-14	青花	碗	復元底径7.5	景徳鎮窯	内外面淡青白色、青色
47	KAG4-T4-石垣	青花	碗	復元底径6.3	景徳鎮窯	釉淡白灰(青)色
48	KAG4-T1-排	青花	小皿	復元底径4.4	景徳鎮窯	釉淡青灰(白)色
49	KAG4-T1-41	青花	碗	復元口径11.4	景徳鎮窯	内面淡灰青白色、青色 外面淡灰青白色
50	KAG4-T8-7	青花	碗	復元口径20.6	中国産	内外面釉淡灰色
51	KAG4-TP8-4	青花	小碗	底径2.4	中国産	内外面釉淡灰青色
52	KAG4-T1-81	青花	碗	復元口径13.5	中国産	釉白色
53	KAG4-T8-14	青花	小碗	復元口径6.2 復元底径1.6	中国産	胎土石英、砂、青みがかった灰色 硬質、 ややケンチツ
54	KAG4-天守台西	青花	1111.	復元口径8.4		釉淡灰白色
55	KAG4-T3-H	青花	Ш	復元口径11.0		釉淡灰青色 碁笥底
56	KAG4-T1-H	陶器	小壺		李朝	胎土石英、砂、青みがかった灰色 硬質、 ややケンチツ
57	KAG4-T8-13	陶器	碗?	復元底径5.1	李朝	内外面淡灰褐色 石英、長石を含む
58	KAG4-T1-24	陶器	碗		唐津系	内面淡灰色 外面淡灰色、灰緑色
59	KAG4-T2-7	陶器	小碗	復元口径10.8	唐津系	
60	KAG4-T3-H	白磁?	小碗	復元口径9.8		釉白色
61	KAG4-I+KAG2-4	陶器	碗?	復元口径11.3	唐津系	<b>籼緑褐色</b>
62	KAG4-天守台西	陶器	碗?	復元口径15.0	唐津系	釉薄灰(白) 色
63	KAG4-西ヤグラ0	青磁			唐津系	釉青緑色 胎土灰白色 輪花文
64	KAG4-T3-H	陶器	甕		唐津系	縁釉・胎土暗赤褐色
65	KAG4-T3-H	陶器	壺		備前?	色調内面暗赤褐色、外面暗褐色 胎土石英、 長石、赤色、硬質 調整ハケ目調整、外面 に縦方向にヘラ痕
66	KAG4-主郭H	陶器	壺?	復元底径8.6		内面淡灰茶色 外面黒褐色
67	KAG4-I	陶器	鉢	復元口径36.8	備前?	
68	KAG4-T2-11~14	土師質	擂鉢	復元口径34.8		内面赤橙色 外面橙色、橙褐色 石英、雲母
69	KAG4-天守台西	瓦質	羽釜			耳付 粗雑 梅文様 (スタンプ)
70	KAG4-38+47	陶器	壺	復元底径13.8		内外面淡黄褐色
71	KAG4-T4-19	瓦質	捏鉢	復元口径26.8		内外面淡灰茶色 雲母、石英を含む
72	KAG4-大手門	陶器	鉢			色調淡灰赤色 胎土石英、長石 ケンチツ みたいな硬質 円形の押印(印判)
73	KAG4-T1-107	陶器	甕			薄く自然釉 粗雑
74	KAG4-主郭H	瓦質	捏鉢			色調青味がかった黒 胎土白灰色、砂微量 内側にハケ目調整 やや軟質 やや粗雑
75	KAG4-T4-40	土師器	小皿	口径6.95 底径5.0	在地系	内外面肌色 雲母
76	KAG4-T4-4 1	土師器	小皿	口径7.1 底径4.6	在地系	内外面肌色 雲母
77	KAG4-T4-42	土師器	小皿	口径7.3 底径5.2	在地系	内外面肌色 雲母
78	KAG4-T4-44	土師器	小皿	口径6.2 底径4.4	在地系	内外面肌色 雲母、石英

# 第Ⅲ章 「梶谷城」石積み遺構についての所見

現存する梶谷城の平面プラン(縄張り)は、主郭、副郭の二つからなる。主郭はその中央に位置する天守台を頂部に、それを取り巻くように削平面を設けている。また主郭の三方には、東櫓台、西櫓台、そして南櫓台といった櫓台遺構を有している。このうち西櫓台を利用した大手舛形虎口の堂々たる構えは、本遺構の中心が主郭であることを物語っている。

もっとも、主郭での天守台、さらにはその外郭線ラインには孕みと崩壊の一部が観察でき、また南櫓台からその南端部にかけては、とくに崩壊が著しい。そうしたこともあってか予想される搦手虎口の位置は、現在のところ不明である。また石垣のありようは、旧地形にそうかたちで直線的な(一文字)石垣よりはシノギ角(鈍角)を用いる。

次に副郭であるが、この平面プランは主郭と異なり、その一部に岩盤を残す自然の傾斜地を活用して郭内を構成する。したがって、副郭には削平地はないに等しい。また後述するように、その周囲を 囲繞する石積みは、副郭をとりまくものとは異なり節理にそって割った板石を用いているのが注意される。

このように、梶谷城の主郭・副郭は、その平面プラン(縄張り)や石積み技法のうえからも、大きな差異が認められるのである。以下、そうしたことがらについて具体的に述べてみたい。

〈主郭〉(以下の番号は添付図の番号と付号する)

- ①-隅角部の角石は一番角石は左引きの荒割石(最下段の石で石面を右手にとるものの意)、二番角石は石面を縦型に割った左引きの荒割石を用いている。石の「すわり」をよくするためハサミ石(詰石の小割)を挿入する。三番角石は右引きではあるがその控え(長さ)は短かい。角石を脇から支える角脇石(加工石の場合をいう)は、まだ未発達で築石で代用している。角石による縦石の採用は、天正年間から文禄年間に一般化し、慶長年間まで使用される。隅角部の三番角石、ならびにその周辺部はすでに孕みや落石等による一部崩壊があって、旧状を保っていない。将来的な修築も考えられるところである。
- ②- 東櫓台石積みの崩壊も著しいものがある。現存する②の隅角部はわずかに角石の一部が観察できる。注意されるのは、いずれもその控えが短かいことであろう。隅角部の算木積みの発達は元和・寛永期にかけておこる。この出角部は肥前名護屋城三ノ丸、豊後佐伯城、筑前中津城、肥後熊本城に類似遺構が残存する(高瀬哲郎「九州に於ける近世城郭の石垣について(その一)」『熊本大学考古学研究室20周年記念論集』)。おそらく、当該当部も九州地方の文禄・慶長期ごろの例に使用された技法の流れをくむものであろう。
- ③ 一石垣高約2mと低く、孕みと崩壊が顕著である。基礎の根石(大石)を除き手前の石積みも積直 しの可能性が強い。石垣の前方部、帯曲輪状部分については通路であった可能性も考慮すべきであろ う。
- ④-隅角部(南櫓台)角石は、基底より2石分を除き他はすでに崩れ谷間部へ落石している。櫓台内

部は山石を小割りしたグリ石層が検出される。2石の角石のうち、一番角石は縦石状を呈しており、 二番角石は控えが短かい。注意すべきは角石の稜線を整えるための(=傾斜角(法)を構成)「ハサ ミ石」(一種の詰め石)を使用することであろう。ハサミ石は天正年間にはすでに多用され、文禄・ 慶長期の野面石、荒割石、荒加工石の角石にも継続して使用される。南櫓台隅角部が崩壊するなかで、 築石部(いわゆる石垣部分)は残存度がよい。全体として角石のある右側へ傾きが認められ、したが って若干の孕みは認められるものの、主石を囲む石材の各下端はほぼ水平を保ち穴太積み技法が採用 されていることがわかる。

- ⑤-基礎部に主石(おもいし)となる大型築石を配している。主石の周縁部には石材の下端を横にね かせる技法をとる。したがって、主石を築石が巻く状況にはならない。おそらく穴太積みであろう。
- ⑥-この隅角部を「シノギ積み」という。シノギ積みとは直角をあらわす出角に対し、鈍角積みをいう。本遺構は岩盤上にのる一番、二番角石はいずれもその控えは短かく、前掲の②の例に近い。もっとも三番角石以高は、角石というよりは小石積みの雑石に近く、稜線部左右付近はすでに旧状を失っている。後世の修復であろう。
- ⑦-石積みは岩盤上に一段控えをとって築かれている。この通路状遺構はわずかに高低が認められるところから、通路と断じることもむずかしい。今後全体の状況から検討を要しよう。石積みは基底より石尻が上がる結果、わずかに前方へ孕み出ている。石材の一部抜け落ちはそうした理由によるのだろう。比較的大形石の築石を中心に配される石材は「巻き石」とはならず、安定している。穴太積みに近い。
- ⑧ 一崩壊部の左右石積みも形状的にみて、大・小の築石をバランスよく配石した穴太積みであろう。 なかでも手前の大石に接して配される石材は、その一つひとつが大石の縁の丸みに合わせてつけるの ではなく、それぞれ石の下端を水平にとる意識が強く働いている。「巻き石」ではないのである。古 式の「定法」の採用がうかがえよう。
- ⑨-西櫓台南側の「入角」に接する石垣部分である。ここには二様の築み方(大石・小石)が認められるが、いずれも旧状ではなく、積み直しであろう。
- ⑩-西櫓台南面石垣のうち、角石は四段が残る。角石推定五番石の高さまでの築石群(石垣)は、いずれもバランスよく大石を配した穴太積みである。但し、向って右上部はいずれも築き方が異なり、修築の可能性が高い。なお、現状でみえる基底の角石(実は二番石)は前掲④と同様縦石を使用する。西櫓台南西隅角部は、三番角石の石面下端に「ハサミ石」が使われている。また残存する角石4本は、いずれもその控え、厚さともに大・小と変化する野面石である。稜線部は角(かど)部をもつ角石でノリ(傾斜角)はほぼ通る。この部分は文禄・慶長期の成立幅のなかでとらえることができよう。なお、櫓台内部全体をおおうとみられる裏グリ石層は人頭大ていどの小割り石で構成されている。
- ①・②・③-西櫓台南東隅角部は現状では7本の角石が残存する。それぞれ大小・長短、しかも角部を有する野面石でノリを構成する。縦石も2石存在する。もっとも③で観察できるように、上部3石分についてはすでにノリは通らない。何らかの理由により角脇部と石垣を構成する築石群とが崩壊し、

かろうじて裏グリ石の支えで(天端付近の角石は失われたものの)角石は保っている。注意すべきは 裏グリ石の大きさに、人頭大以下の小割り石を採用することである。また、⑫についてはすでに崩壊 して稜線部のノリの通らぬ⑬に比し、隅角稜線部のノリは通る。それは築石部全体が孕みをもつ波打 ち状石垣とはなるものの、欠落した石材がないことによる。なお石垣は形状のうえで、石材の下端を 水平にとることを心がけた穴太積み技法がうかがえる。以上、角石の縦積み、角部のとり方、控えの 長短等を勘案するなかで、当箇所の成立を、文禄年間を前後する時期を考えたい。

- ⑭ーこの築石部については、主石を中心にした「巻き石」状は認められないが、複数の石材で横目地が通るものが少ない。あるいは江戸期の修築の一部を示すのであろうか。
- ⑤- 舛形虎口の一部を構成する残存石積みであるが、主石にそって配石された小割石は「巻き石」とはならず、定法を備えている。大小石材のバランスもととのっている。穴太積みの可能性もなくはない。
- ⑯- 舛形虎口の内側にあたる。中央正面石垣は⑭でもふれたように、石材の下端は水平とはならず、 江戸期の積み直しの可能性が強い。また、向って右側の櫓台隅角部については⑰で次述する。
- ①-隅角部を構成する角石(一番~四番)はいずれも控えがきわめて短かい。しかし、これは②とは 異なり、角石と角脇部との接合部との間には縦目地状を呈している。つまり、角石の石尻を支える角 脇部の石材はいずれも詰め石か、不安定な築石を用いるからである。おそらく、⑪の隅角部付近は江 戸期の修築ではなかろうか。
- ®・⑩-築地状崩壊石垣(入角部)について検討する。石積みは②~⑯で観察できる野面石、荒割石と異なり、おおむね節理にそって割れる板石状の築石と、裏ごめ石にも板石状の小割りしたものを使用する。向って左側石積みもまた、その大半が板石である。もっともその配石は、縦目地の存在にもうかがえるように、定法にのっとる積み方とはいいがたい。おそらく、次述する⑩・⑫の石垣との関係で検討すべきものだろう。
- ②・②一まず、全体図②の残存石垣である。一見して積み方は前述した西櫓台の北面石垣⑥に近く、一部隅角部周辺をのぞき、大部分は基底部近くからの積み直しであろう。それはまず各築石の下端を水平を意識する箇所がないことである。また大石を「巻き石状」にとることも、定法として完成した⑤・⑦とくらべて大きな違いであろう。②での隅角部の角石は、二番角までは旧石を使用し、三番角石以高は控えのある長石を用いている。おそらく、②での実線、あるいは破線以高は江戸期の積み直しであろう。

### 〈副郭〉

②一②で述べたように、隅角部の角石は残存4石のうち、一番角石は根石にふさわしく、二番角石は 控えが短かい。しかし、三番・四番角石は規格性を意識しており、なかでも四番角石の左引き石尻を 受ける角脇部は二石を以て最初の角脇石を構成する。おそらく、三番角石以高はハサミ石も使用され るところから、穴太積み技法を採用しない他の技法を用いて、江戸初期に修築されたものではなかろ

- うか。18・19もそれにともなうか。
- ②一隅角部に残る4本の角石はまだ完成した算木積みとはなりえていない。とくに角石の右引き石尻と角脇部との接点は縦目地が通る。しかし、角脇部から主石となる大石にかけての配石は水平を保ち、大石もまた巻き石状ではない。四番角石(左引き)の石尻を受ける角脇部は未だ数石の築石と詰石との代用によって、のちに発達する角脇石を構成する。これらは技法上では、天正年間以前と推定できそうである。
- 図ー図とで左右の平入虎口(石段あり)を構成するが、岩盤上に石尻部を残す一番角石をのぞき、上段の一部は積直しであろうか。一番角石もまた天正年間以前であろうか。平入虎口の成立期とあわせ検討を要する。
- ② 基底部より中段部は野面石を主とした大石によるきわめて安定した積み方である。しかし、上段 部の小石積みされた遺構は積直しであろう。
- 図ー前方の北方から手前の南方向にかけて一条の築地状のグリ石層が続く。おそらく、それに沿って ほぼ直線状の通路があり、それは図・図で構成する平入状虎口を経て、現在では西櫓台にあたる舛形 虎口にいたる。
- ②一中央部残存石積みについては、主郭で観察できた④・⑤・⑦といった文禄・慶長期をうかがわせる石垣(積み)と異なり、節理にそって割れた大ぶりの横長石を水平になるよう配慮し、その合間に控えの短かい野面石と詰石とを適宣配石する。したがって、横目地の通りを意識するものではない。背後の裏グリ石は、主郭とくらべ、板石状でかつ大ぶりのものが目だつ。
- ②一断面から観察できる特徴のひとつは、中段部から上段部にかけて、周辺部の崩壊によって、ノリ (勾配)が内傾するものの、中段以下は直立 (90度)に近い。そのことは石材の厚さが石面、石尻と もに変化しないことによって確認できるのである。また背後のグリ石については、主郭での⑩・⑬の 小割石に対し、副郭では②を含め概して板石状の大ぶりを使用する傾向が強い。
- ②一この石積みもまた、技法上、②・③・③・③と異なるものではない。節理にそって割った控えの長い石材と、控えの短かい石材との組合せではあるが、それぞれ石材のバランス、強度には関心が払われていないようである。なかでも、中央部あたりは、文禄・慶長期では石積みの稜線を鈍角とする、構造上「シノギ角」(算木積みを用いる)とする箇所であるが、未だ明瞭な算木積みを採用していない。これが技術的にみて未発達とみるか、単に未採用であるか、さらに今後の検討が必要であろう。
- ③一前掲②と同様の石積みは副郭の東面の平入虎口部分③に観察できる。まず向かって左側の隅角部 角石はいずれも控えがなく、算木積みが未発達である。また天正・文禄期には次第に発達する角脇部 には築石の長石をもって水平に配石する。同様に向って右側についても算木積みはみられない。なか でも二番角石の支えに横長の小石を二段積みにするところは、天正・文禄期の「定法」には存在しない 構造であろう。今後、さらに検討を要するが、これは江戸期のある時期か、それとも逆に天正年間以 前の技法である可能性もなくはない。
- ③ 一本遺構も② ・③の事例と共通する技法だといえる。石積みの基礎には長石を水平にとり、その上

部に控えのない野面石(角状)を揃え(現状は若干変動している)、さらに上には大ぶりの横長石を水平にねかせて配石する。これは意識された横目地とはいいがたい。法則性がないのである。なお、積み方において、石材の下端を斜めに倒す「(谷)落し」を加えない点は、②・③と共通する。

②-主郭と副郭を接する東面に1本の縦堀が区画するかのように存在する。しかも、主郭・副郭の上下石積みに対し平行して、堀底を防ぐように石積みがほどこされている。もっとも、この積み方は、単に埋められた感が強く、転石を利用したもので、主郭・副郭の石積み例とはまったく性格を異にするものといえよう。

### 〈山腹列石区画遺構〉

梶谷城の山腹部谷あいぞいにほぼ南北に一本の通路状石積み遺構がはしる。その石積みは畑作によって、近年の手が入ってはいるが、大石積みの箇所は旧状を保っていると思われる箇所がいくつかあり、それは山頂部の主郭の石積み手法と共通する。なかでも、観察しえた③は、全体遺構のなかでも大石が点在し、それは主郭構築時にともなう石積みである可能性が強い。同様に倒もその区画築地であるう。

しかし、③については、江戸期あるいはさらに下る期の遺構であろうか。また、⑥については特異な区画石垣ではあるが、江戸後半期以降、流行する「落し積み」が採用されることから、城郭にともなう遺構ではあるまい。さらに⑦は主郭構築時の区画列石と思われる。注目すべきは⑧の区画である。おそらく、南北を区画する通路が推定できそうである。

こうみると、これら石積みのなかには、城郭時代とはみなしがたい近年のものも混在しているもの の、主郭の構築にともなう屋敷割り区画が、中央通路の左右に存在したと推定できる。

#### 〈まとめ〉

まず主郭の石積みの特徴を要約する。出角隅角部では角石の縦石積みのほか、控えの短かい角石も使用する。その石材は多くが野面石、もしくは荒割石ではあるが、控えの長い角石を用いた出角の算木積みも存在する。シノギ角の採用とともに天正年間から、文禄・慶長年間にかけて多用されるようになる。また、築石部にみられる穴太積み(大小の野面石、荒割石でその石面、石裏に凹凸ある石材の下端ラインを横に通すよう積む技法)もこのころ流行する。

なお、主郭石積みには各所に孕み、崩壊が認められるが、これは文禄・慶長期のあと、江戸期以降 の在地技法による修築部分であろう。

副郭の石積みの検討はまず、梶谷城の現存プランからはじめる必要があろう。文禄・慶長期には完成していたと思われる大手舛形虎口への導入路は、②・②の石段付きの平入虎口以外にない(副郭には他に③の小さい平入虎口あり)。本来ならこの平入虎口は折曲した舛形構造が妥当である。それはすでに検討した理由から、石段は平入虎口が天正年間以前の成立とすることで理解できる。

副郭の石積みの特徴は図・⑪に代表されるように、その石材は節理にそって剥離する板石状をとる。

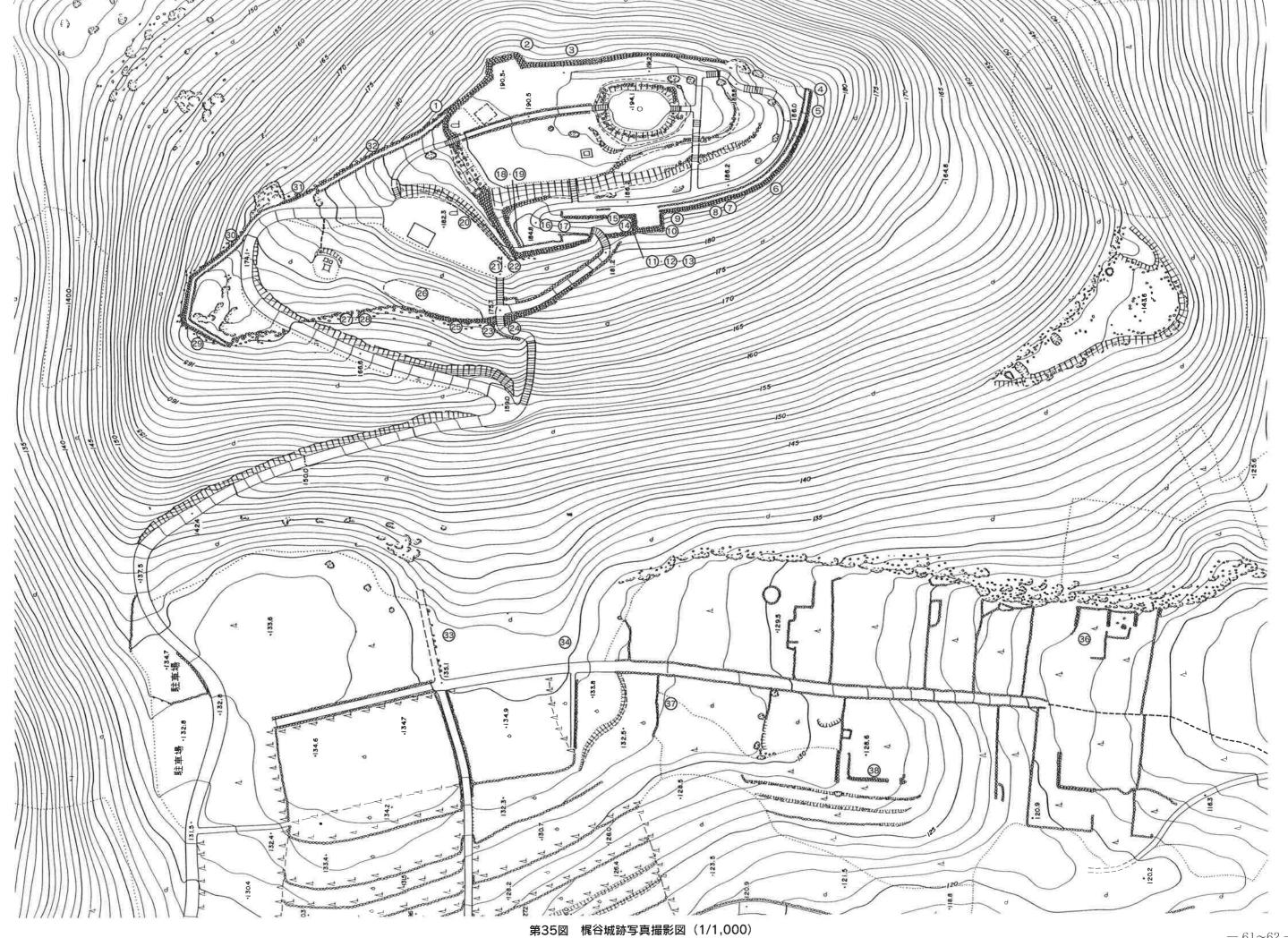
#### 松浦市内遺跡確認調査(4)

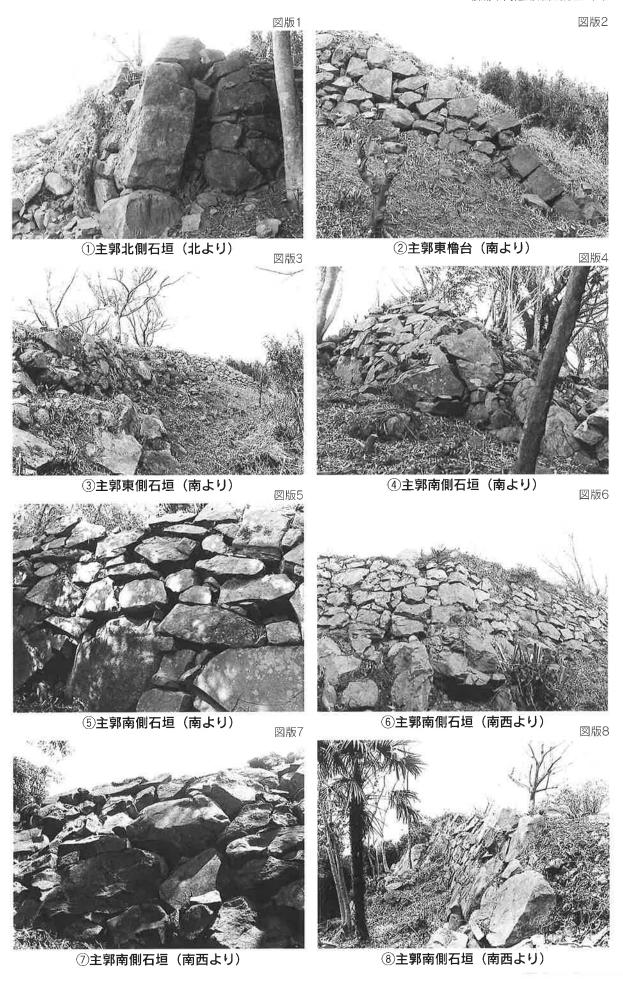
したがって、石面(本口)、末口ともにその厚さは変らない。但し、石材の長・短二様を用いる。その結果、完成したノリ(勾配)は直角に近い。これは主郭の勾配にくらべて強い。背後のグリ石もまた板石状の小割(主郭はより小さく不整形多し。)を多用する。積み方もある石材から自由に配石したらしく穴太積みのようにバランスを考慮したものではない。主郭でのシノギ角⑥は、⑳のように、鈍角には至っていない。こうした状況からみて、副郭の石積み遺構は、穴太積みが成立する永禄年間ごろを前後する時期の成立ではあるまいか。今後、郭内遺構、遺物等の調査を通じて検討をはかるべきであろう。

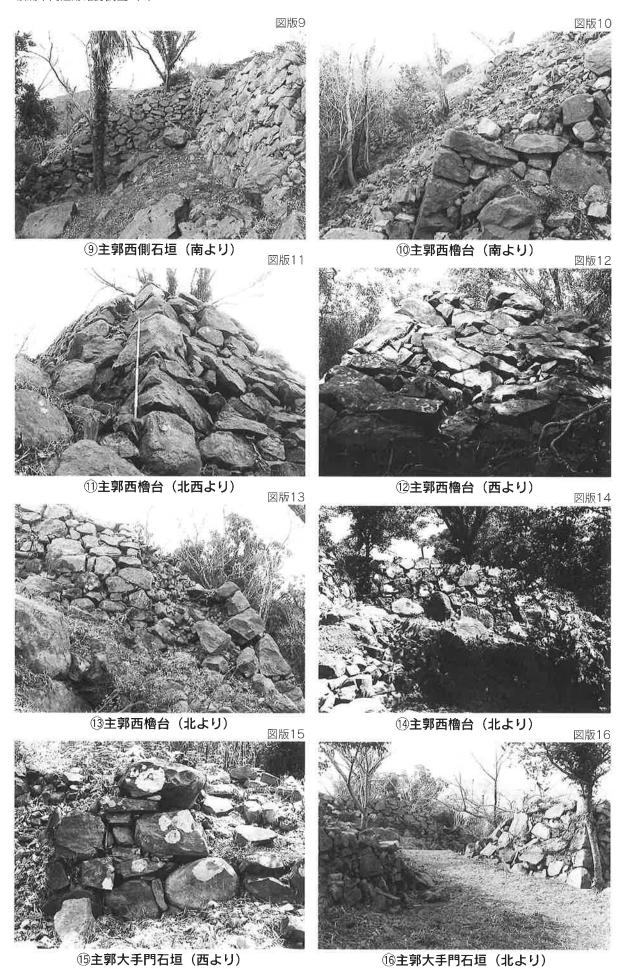
では、なぜ副郭をのぞく、大手舛形虎口をふくむ主郭、ならびに山腹部の屋敷群が文禄・慶長期ごる大改修されたのであろうか。ここで注目すべきは、天正・文禄・慶長期の技術的特徴をもつ肥前名護屋城の石積みと梶谷城主郭でのそれが、技法上で酷似することである。しかし、梶谷城では主郭頂上部に天守台遺構は残存するものの、曲輪内部の区画はきわめて不明瞭である。これは本来必要な搦手虎口の存在が未確認であるように、急拠改修されたことをうかがわせる。だとすれば、梶谷城の主郭は名護屋城築城と関係する遺構の可能性も十分考えられるところである。

ところで近世期に成立した『松浦家世伝』によれば、松浦党党祖は、延久元年(1069)今福(現 松浦市)に拠点をかまえたとされる。今福泊としての殷賑ぶりをうかがわせる。おそらく松浦氏宗家 の城館は、方形プランにのっとった形状で、のちに志佐町の志佐川を津にとり込む陣ノ内城(現松浦 市志佐町・戦国期)が想定できそうである。

いっぽう、今福の東方に位置する梶谷城であるが、伝承によれば平安期の山城だという。この期の 山岳利用の例は古代寺院であろう。またその伝統を継承して中世の山岳寺院が建立され、南北朝期に はそれを城郭に転用をはかる例も存在する。梶谷城については成立時期が比較的近いという星鹿町の 刈萱城とのプラン・立地・性格などをふくめた多目的な検討が望まれよう。

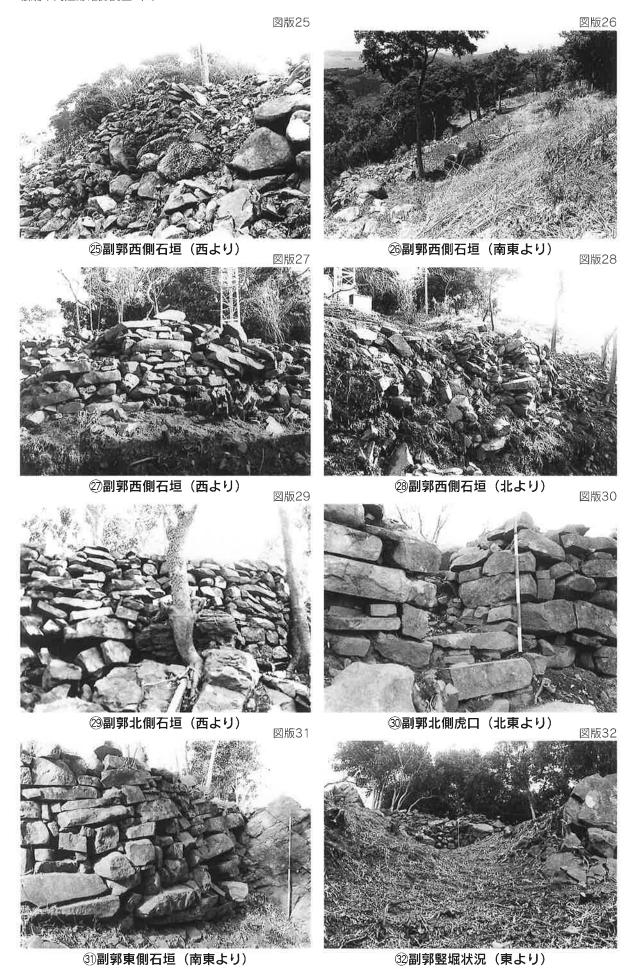


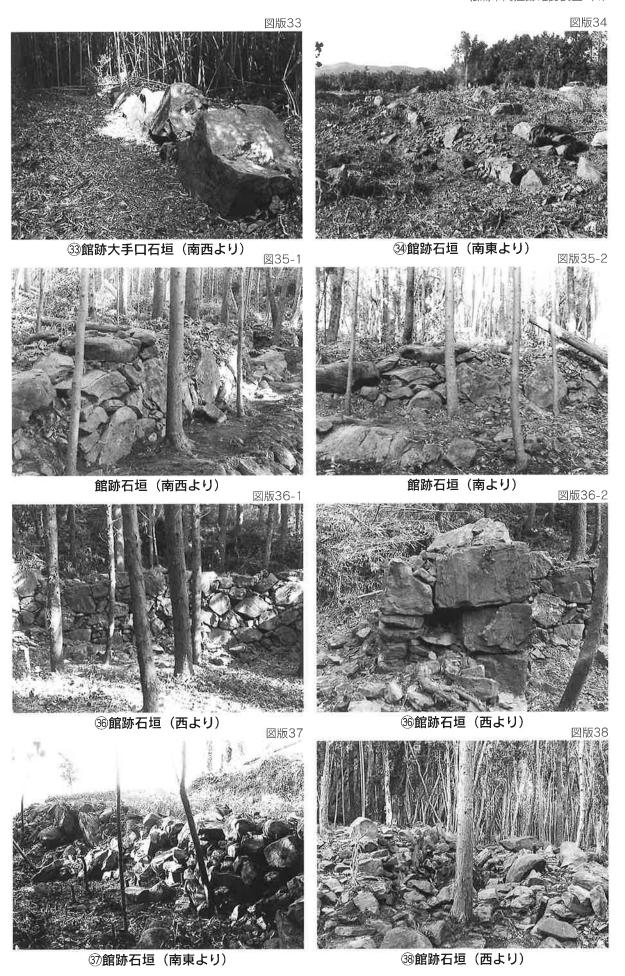






— 65 —





# 第IV章 中世山城の分布について

長崎県内における城郭調査は、原城などの史跡指定による保存を目的にしたものから出発している。 その後、昭和55年に外山幹夫氏を中心として県内の城郭を網羅した最初の文献で今日の城郭研究の基礎をなしている『日本城郭大系』が刊行されている。これに伴い城郭の構造規模及び調査解明を主流とする研究分野へと発展することになった。近年は古文書調査は勿論のこと石造物(中世墓碑)の分布と山城との関係から位置付けを行う研究も行われてきている。

梶谷城跡が所在する伊万里湾一帯及び長崎県北一帯は中世の山城及び居館が多く所在している地域である。そのほとんどが山頂部または台地上に位置しているためこれまで開発が行われることが少なかった。そのため依存度は良好なものが多く点在している。山城は立地環境によることが多いため調査もなかなか行われていない現状である。山城は各市町村の分布調査の状況にもよるが佐世保市の35ヵ所を筆頭に平戸市12ヵ所、松浦市10ヵ所が確認されている。このような中で、近年は山城の発掘調査及び確認調査例も多くなっている。その中で中世の武士集団である松浦党に関係している山城の調査が佐世保市、平戸市、北松浦郡吉井町、佐賀県側では伊万里市及び東松浦郡北波多村などがある。また、豊臣秀吉による「文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)」に際して名護屋城跡を中心に半径3㎞の圏内に陣跡(約130ヵ所)があり、名護屋城跡の発掘調査及び整備、堀秀治陣跡・豊臣秀保陣跡・木下延俊陣跡等も整備され一般に公開されている。

松浦党に関連する山城の調査では、昭和63年から平成2年度にかけて行われた松浦市域の南側と接 する北松浦郡吉井町の直谷城跡の調査に代表される。この直谷城跡は佐々川の支流である福井川の浸 食作用によって西側を除く三方を削られた河岸段丘の標高 160m程の内裏山の山頂に築かれた山城 で、志佐氏の居城である。志佐氏は松浦党の一族で、御厨清の子志佐貞をその開祖としている。城は 自然地形を最大限に活用し、内裏山の山頂を占める主郭部は外周が自然崖によって楕円形に囲まれ、 主郭直下の谷には4本の土塁と土塁間に3本の空堀、竪堀を配置して防御を厳重にしている。また、 山麓に向かって放射状に延びた尾根や谷筋には出丸等を配置して内裏山全体を城塞としている。主郭 の東側に櫓台跡、西側に天守台跡がある。主郭の調査では多数の柱穴と建物に付随すると思われる溝 等も確認されている。主郭からの出土遺物では輸入陶磁器の占める割合が高く、15世紀後半~16世 紀前半と16世紀後半あたりにピークがあるようである。この直谷城をめぐる戦国期の攻防はめまぐる しいものがある。松浦史料博物館蔵の『壺陽録』等によればこの直谷城は明応年間(1492~1501) に志佐純勝(純昌)の時、大村・龍造寺連合軍の攻撃を受け純勝は五島に逃れている。このため直谷 城は一時無主の城となったが、田平の領主峰昌が直谷城に入り志佐氏を相続して志佐純本(純元)と 名乗る。次の志佐純次の時代の永正10年(1513)に江迎の領有をめぐって平戸松浦興信と争いにな り直谷城は落城し純次は家督を志佐純昌(純政)に譲っている。その後、純昌は家督を純量に譲って おり、この志佐純量の時も平戸松浦隆信と志佐陣ノ内城をめぐって対立している。永禄6年(1563) にも平戸松浦隆信の直谷城攻略にあい落城している。その後の直谷城については平戸松浦氏の支配を

受けるようになり、最終的に文禄2年(1593)に平戸松浦鎮信の保有となってしまうようである。

佐世保市教育委員会では吉福清和氏・故山鹿敏紀氏の協力を得て市内の山城の発掘調査や分布調査 が行われ、昭和57年に『中世山城分布調査報告書』として35ヵ所の山城が報告されている。同書で は大智庵城跡の主郭と井手平城跡の主郭の外周をめぐる空堀と土塁の構造構築方法を探り、あわせて 築城の時期を探ることを目的に調査が行われている。大智庵城の築城を示す確かな史料はないが15世 紀末の延徳2年(1490)宗家松浦定によって築かれたと一般的に伝えられている城である。一方で 大智庵城の終焉については明確である。宗家松浦政の明応7年(1498)に平戸松浦弘定に攻められ 落城している。佐世保市内におけるその後の調査では平成7・8年度に重要遺跡の調査として竹辺町 の武辺城跡の発掘調査が行われている。城跡は相浦川の沖積地が広がる標高77mの山頂部に位置して おり、丘陵頂部を主曲輪とし、一部削り残して天守台を設け、東西南北に分かれる枝状の尾根に出郭 を配している。この主郭部の調査ではほぼ南北に軸線を揃えた7棟の掘立柱建物跡が検出されている。 各建物間や雨落ち線には排水溝も掘られている。出土した遺物は陶磁器・土器・金属器・石器の多岐 にわたっている。出土した輸入陶磁器は14世紀後半から16世紀前半の時期で主体を占めるのは龍泉 窯系で15世紀後半から16世紀前半に位置している。宗家松浦氏は今福から松浦盛の時期に相神浦へ 移転しており、盛は嘉吉3年(1443)に近くの新豊寺に巨鐘を寄進し、応仁元年(1467)46歳で 没しているところから、輸入陶磁器の時期と相浦への移転の時期が一致しており、武辺城跡は宗家松 浦氏の居城と推定されている。平成11年度には高圧送電線鉄塔の建て替えに伴う新替町の井手平城跡 の発掘調査がある。調査地点は隠居岳から南に延びる丘陵の先端部にあたり、丘陵の東側には小森川 が流れている地点の東出郭である。建物遺構は検出されていないため礎石による建物が検討されてい る。調査では空堀・溝状遺構が検出されている。輸入陶磁器は16世紀後半を主体としており、16世 紀後半に造営され、天正14年(1586)の落城が一連の出土遺物の絶対下限年の短期間であったこと が推定されている。

平戸市では、平戸市史編纂事業の一環として島内の山城の分布調査が実施されているが城跡に関する発掘調査は現在まで行われていない。『松浦家世伝』・『壺陽録』等の文書史料に出てくる城跡としては平戸松浦氏の関連がある館山城と白狐山城(勝尾嶽城)枝城としての蓑坪城等がある。その他では島内の領主関連として志自岐氏の居城である志々伎城等が所在している。蓑坪城は平戸島北部の西岸の主師町城山の標高 287.9mの山頂に築かれており、平戸松浦氏の居城である白狐山城から南西約10kmの地点に位置している。蓑坪城は『家世伝』・『壺陽録』によれば平戸松浦弘定の時に活動している。延徳3年(1491)に兄の峰昌を擁した有馬貴純・大村純忠らの連合軍に居城の白狐山城を攻められ蓑坪城に拠っている。この蓑坪城での籠城は百日に及んだといわれている。城域は東側の主曲輪、中心部の大手曲輪と水手曲輪、西側の西出曲輪と曲輪が連続しており典型的な連郭式山城の特徴を呈している。主曲輪は山頂を南北70m、東西40mの楕円形状に削平して平場を造り平場の中央には天守台を設けている。主曲輪の周囲は石垣で固めている。蓑坪城の築城年代は明確ではないが延徳3年よりもさかのぼると考えられている。平戸市における中世山城の状況についてはまだ不明な

点が多いようで今後の調査に期待したい。

松浦市でも市の北西部星鹿町岳崎免城山の刈萱城跡、中心部の志佐町の陣ノ内城跡が発掘調査されている。刈萱城跡は星鹿半島の先端部東側のトロイデ式火山の標高 125mの城山山頂部にある。この刈萱城に関しては確実な史料は乏しく『肥前記』等によれば建久元年(1191)に源頼朝から下向を命ぜられた加藤左衛門重氏なる人物が築城したと伝わる山城であるが信憑性に乏しく不明な点が多い城である。刈萱城跡は平成元年・3・6・11年度に民間のテレビ塔建設、無線中継所、展望所建設に伴う確認調査を実施しているがいずれの調査でも山城に関する遺構・遺物等の検出はできなかった。これは第二次世界大戦に関連する海軍の施設(防空壕・探照塔・砲台)等の建設やその後のたび重なる公園化に伴う造成に起因するものではなかろうか。

陣ノ内城跡は平成10年度に範囲確認調査を実施している。城跡は志佐川下流域の段丘上の先端に位 置する標高10mの平城で志佐氏の居城である。山城は比較的高地に立地しているのに対してこの陣ノ 内城は志佐川河口の入江をひかえて海洋と結びつく海城の性格を持っている城である。『松浦家世伝』 によると志佐氏は御厨氏を興した直の子、清の二男貞をもって開祖とし、その所領の一つである志佐 を本拠として代々志佐氏を名乗っている。現在、城の主郭地区には志佐氏の菩提寺である寿昌寺が立 地しており、城に関する遺構の大部分は失われているが段丘壁を利用した城壁は南北に長く半円形状 に主郭を取り巻いている。城壁の高さは5~6mありかつては志佐川河口の入江がこの城壁まで達し ていたとみられ城壁の南西端に船寄場の石垣が残っている。城壁の上端には断続的に土塁が残ってお り、南側には幅10m、長さ80mの空堀があり舌状の段丘を途中から分断している。この空堀はかつて は東側へも延びていたものと思われるが現在は埋められて県道となっている。これらのことと地形よ り城というよりもむしろ館との感が強い陣ノ内城である。この陣ノ内城跡が立地している周辺一帯は 近年の市街化に伴い個人の住宅が多く、現在の水田・畑地部分も近い将来必ず宅地化する可能性が高 いため陣ノ内城に関する基礎資料を収集するために確認調査を行っている。調査地点は4ヵ所設けた がその内の寿昌寺本堂の東側にある若宮神社に隣接している畑地の調査区からのみ柱穴の検出と輸入 陶磁器が出土している。遺物には11世紀後半から13世紀前半の年代が与えられる資料が多い。志佐貞 に関しては『山代文書』の寛元2年(1244)の関東裁許状に肥前国御家人として志佐六郎貞の名が見 え『松浦家世伝』に記す志佐貞が実在の人物であることが裏付けられる。外山幹夫氏の研究によると 志佐氏の活躍ぶりは『李朝実録』・『海東諸国紀』等の朝鮮側の史料にある。これよると志佐義の時 代に松浦党の中でも対鮮貿易に重点をおいており、この海外貿易の基地として陣ノ内城が考えられる。

ではなぜ志佐氏はこの陣ノ内城から南に約6kmの内陸部にあたる福井に直谷城に拠点を構えなければならなかったのか。これは近隣諸氏(龍造寺・大村・有馬・平戸松浦)との所領争いが激しくなるにつれ、志佐氏もこれらに対する備えが必要になったため海岸部の志佐陣ノ内城から福井の直谷城に移ったものと思われる。今後さらに新たな検討が必要である。

志佐氏の所領に壱岐島がある。覩城跡は壱岐島の南東部に広がる深江田原平野の北西側の外縁の舌 状台地の末端部を利用して構築された平城である。現在、城の周囲は水田となっているがかつては沼 地で堀の役割を担っていたものと思われる。主郭の標高は15~19mで、その周囲は一段低くなって東の今坂川、西の山田川に挟まれている。平成4年の試掘調査で敷石遺構・ピット・焼土層等が確認されている。平成8年度の調査では溝状遺構・掘立柱建物跡・土壙・ピット等が検出されている。遺物では貿易陶磁の2%を東南アジア産が占めており広く海外との交易の中継基地として機能していたようである。貿易陶磁の時期は14世紀後半から15世紀前半を与えている。文明3年(1471)に編まれた『海東諸国紀』には壱岐が松浦党の五氏(志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留)により文治されそれぞれ代官を置いていたことが記されている。この中に「唯多只郷 志佐代官源武之を主る。戌子年、図書を受け、歳遺一、二船を約す。書に、一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とある。この史料により文明年間(1469~1487)に志佐氏が朝鮮との交易のため図書を受け壱岐の唯多只郷に代官真弓氏を置いて交易を行ってたことが分かる。

以上、松浦市の近郊に所在する松浦党に関連する山城の発掘調査について述べてみた。梶谷城跡については木島孝之氏の論文があるのでここで紹介する。木村氏は『中世城郭研究第6号』の「九州における織豊期城郭」の中で梶谷城は新しい部分を取り去った元の形は直谷城と同じであるとしている。「地形にあわせて素直に削平されており、曲輪の形は丸っぽい。方形には整形されていない。周囲に帯曲輪が発達するが、基本的には単郭であり、上位・下位曲輪といった曲輪の明確な機能分化は発達していない。虎口は平入りか或いは明確でもないものが多く、高度な虎口は発達しない。」等が挙げられる。木島氏はこのようなプランの城を「松浦型」と称している。特に「曲輪の明確な機能分化は発達していない」という点は、戦国末期になっても維持されており、その例として井手平城、広田城、直谷城を挙げている。

これらの山城のうち直谷城跡は自然地形を最大限に活用した山城のあり方は県下では他に類例がないこと、松浦党の研究及び中世城郭を研究する上で価値が高いとして平成13年2月26日に長崎県文化財に指定されている。また、梶谷城跡も松浦氏の居城跡で築城年代は一定していないが松浦党の重要な居城で古代末以来の山城として継続的に利用されており歴史的に価値が高いとして昭和46年9月14日に長崎県文化財として指定されている。 (中田敦之)

#### 【引用・参考文献】

外山幹夫編 1980 『日本城郭大系 第17巻 長崎・佐賀』 新人物往来社

久村貞男編 1982 『中世山城分布調査報告書』 佐世保市教育委員会

外山幹夫著 1990 『松浦党のすがた-松浦市域を中心に-』 松浦市

村川逸朗編 1991 『直谷城跡』 吉井町文化財調査報告書第1集 長崎県吉井町教育委員会

平戸市史編さん委員会 1995 『平戸市史 自然・考古編』 平戸市史編さん委員会

久村貞男編 1997 『武辺城跡発掘調査報告書』 佐世保市教育委員会

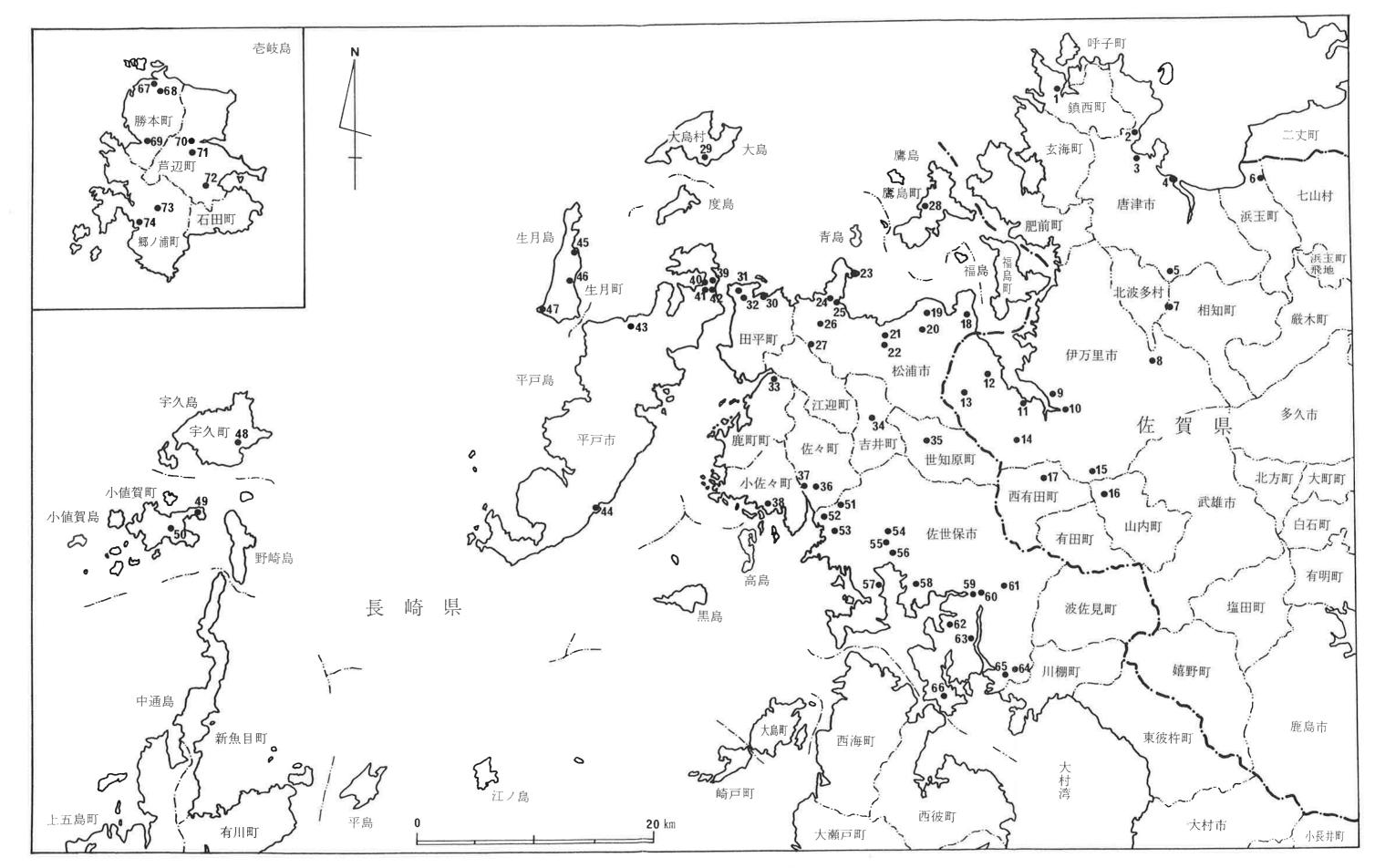
川口洋平編 1997 『覩城跡』 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第3集 長崎県教育委員会

久村貞男編 2000 『井手平城跡発掘調査報告書』 佐世保市教育委員会

西海考古同人会編 2001 『西海考古第3号-長崎県の城郭・城館特集-』 西海考古同人会

## 表7 梶谷城跡周辺の城郭一覧表

	. ,,,,,	4 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2									
番号	城名	所 在 地	創築年代	創建者	遺構	番号	城 名	所 在 地	創築年代	創建者	遺構
1	名護屋城	東松浦郡鎮西町名護屋	1592年頃	豊臣秀吉	本丸など	38	沖 田 城	北松浦郡小佐々町田原免	室町初期	小佐々太郎	本丸、館跡
2	日 高 城	唐津市浦	戦国末期	日高大和守資	土塁	39	御館	平戸市鏡川町	江戸初期か	松浦隆信か	館跡、石垣
3	浜 田 城	唐津市八幡町	947年	佐志将監か	土塁	40	中之館	平戸市鏡川町	慶長10年代	松浦隆信	
4	唐 津 城	唐津市東城内	1608年	寺沢志摩守広高	復興天守閣	41	勝尾嶽城	平戸市鏡川町西の久保	南北朝	松浦勝	空堀
5	青 山 城	唐津市山本	戦国末期	青山采女正	石垣、馬屋跡	42	日之嶽城	マ戸市岩ノ上町	1599か1603年	松浦鎮信か松浦隆信	本丸、石垣
6	鬼ヶ城	東松浦郡浜玉町谷口	1186年	草野氏	石垣、空堀	43	箕 坪 城	平戸市主師叮城山	南北朝か		石垣
7	岸 岳 城	東松浦郡相知叮佐里	平安末期	波多氏	本丸など	44	前津吉城	マ戸市前津吉町イタチ川			
8	日 在 城	伊万里市大川内町川西	1154~1156年間	大川野遊	本丸、空堀	45	一部氏館	北松浦郡生月町一部免		一部氏	
9	木 須 城	伊万里市木須叮里	鎌倉時代	木須氏	空堀	46	里 館	北松浦郡生月町里免		加藤氏	
10	伊万里城	伊万里市伊万里叮陣内	1218年頃	<b>峯上</b>	郭	47	望州館	北松浦郡生月町南免		山田氏か	
11	里 館	伊万里市東山代町里	1145~1151年間	源四郎太夫直	水堀跡	48	宇久城	北松浦郡宇久町山本			
12	飯 盛 城	伊万里市東山代町久原	1145~ 15]年間	源四郎太夫直	本丸、砦跡	49	本城ヶ岳城	北松浦郡小值賀町中村郷		源近、源理	空堀、石塁
13	山ン寺城	伊万里市東山代町		源四郎太夫直	石塁、館跡	50	膳 所 城	北松浦郡小値賀町		松浦定	
14	和田城	伊万里市東山代町脇野		源四郎太夫直	空堀、石塁	51	蜂久保砦	佐世保市八ノ久保町	1563年	東五郎秀勝	
15	大川内岳城	伊万里市大川内町大川内山		大川内氏	空堀	52	飯 盛 坂	佐世保市相浦町	1535年	松沭親	郭、大手門
16	住 吉 城	杵島郡山内町宮野	戦国時代	後藤氏	郭、空堀	53	武辺坂	佐世保市竹辺町	1202年	松浦遶	本丸、空堀
17	唐 船 城	西松浦郡西有田町山谷	1218年	源栄	郭、空堀	54	大智庵城	佐世保市瀬戸越町	1490年	松浦定	本丸、空堀
18	梶 谷 城	松浦市今福町東免		松浦氏	郭、天守台	55	瀬戸越坂	佐世保市瀬戸越町	1489~1492年間	松浦定	本丸、石塁
19	松園屋敷	松浦市調川町上免	室町時代か	松園氏	土塁、空堀	56	佐世保城	佐世保市城山町	1381~1384年間	佐世保氏	本丸、空堀
20	調川城	松浦市調川町白井兔		松園氏?		57	赤崎坂	佐世保市赤崎町	1558~1592年間	赤崎伊予	本丸、館
21	陣ノ内城	松浦市志佐町里免	1489~1492年間	志佐純次	本丸、空堀	58	日 宇 坂	佐世保市日字町	中世	日宇氏	空堀
22	堂 山 城	松浦市志佐町栢木免		志佐氏	門跡?	59	早 岐 坂	佐世保市早岐町		早岐氏	
23	刈 萱 城	松浦市星鹿町岳崎兔	1191年か	加藤重氏か	本丸	60	広 田 坂	佐世保市広田町	1573~1592年間	佐々清右衛門	本丸、石塁
24	坂 本 館	松浦市御厨町里兔		御厨氏		61	井手平坂	佐世保市新替町	1573~1592年間	松浦鎮信	本丸、空堀
25	御厨城	松浦市御厨町里免	鎌倉時代か	御厨氏		62	牛ノ岳坂	佐世保市江上町	1564年	針尾伊賀	本丸、石垣
26	城ノ越城	松浦市御厨町小船免	鎌倉時代か	御厨氏		63	佐志方坂	佐世保市指方町	1564年	佐志方杢兵衛	本丸、石塁
27	大岳古墨	松浦市御厨町板橋免	平安末期か	安倍宗任か	石塁	64	宮 村 飾	官 佐世保市萩坂町	1429~1441年間	宇都宮通景	郭、堀切
28	医玉城	北松浦郡鷹島町里免		大曲氏	空堀	65	小峰坂	佐世保市長畑町	1475年	宮村通定	本丸、石塁
29	大 島 城	北松浦郡大島村神浦免		大島氏		66	針尾坂	佐世保市針尾中町		針尾氏	本丸、土塁
30	里 城	北松浦郡田平町里免	1192年	峰披	本丸、空堀	67	勝本坂	老岐郡勝本町坂本触	1591年	松浦鎮信	本丸、礎石
31	陣 笠 城	北松浦郡田平町日の浦免	1489~1492年間	峰昌	砦跡、出丸	68	高津加	<b>老岐郡勝本町西戸触</b>	1394~1428年間	佐志源次郎源義	空堀
32	籠手田城	北松浦郡田平町山内免	1469~1487年間	籠手田栄	本丸、空堀	69	生 池 坂	壱岐郡勝本町百合畑触		本城氏か	空堀、門
33	深江氏館	北松浦郡鹿町町深江免	1492~1501年間	志佐純本	居跡、空塀	70	鶴翔坂	<b>克</b> 克岐郡芦辺町国分当田触	1394~  1428年間	塩津留氏	石垣
34	直谷城	北松浦郡吉井町直谷免	1243~1247年間	志佐貞	本丸、物見台	71	郡 坊	尼岐郡芦辺町国分東触	1394~1428年間	塩津留氏	内堀
35	世知原氏館	北松浦郡世知原叮中通免	室町初期	世知原市正	館跡、石塁	72	覩  坂	克岐郡芦辺叮湯岳本村触	1159~1160年間	長田忠政	本丸
36	東光寺山城	北松浦郡佐々町羽須和免	1469~1487年間	佐々稠	本丸、出丸	73	鉢 形 坂	は 壱岐郡郷ノ浦町田中触	1069~1074年間	佐伯良孝か	
37	鳥 屋 城	北松浦郡佐々町古川兔	1469~1487年間	志加田源蔵	本丸、竪垌	74	亀尾坂	成 壱岐郡郷ノ浦町本村触	1293年	波多宗無	本丸、石垣



第36図 梶谷城跡周辺の城郭分布図

# 第V章 梶谷城跡の保存整備について

松浦党梶谷城跡の保存整備については、松浦市教育委員会の諮問機関として設置した「史跡松浦党 梶谷城跡保存整備委員会」の意見をもとに平成2年度に「史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定 報告書」を作成している。その中には「保存整備の目標と方法」「保存整備のための条件調査」「保存 整備計画の方針」「保存整備構想」を掲載している。また、平成4年度の「史跡松浦党梶谷城跡保存 整備基本計画策定報告書(第2集)」には平成2年度からの継続として「保存整備計画」「事業化につ いての検討」を追加して完結している。

この章ではその中でも平成2年度報告書の「保存整備の目標と方法」の中から「保存整備の目的・ 指標」、「保存整備計画の方針」の中から「保存整備の方針」、「保存整備構想」の中から「まちづくり と保存整備構想」を加除訂正して記載している。

#### 1. 保存整備の目的・指標

#### (1) 保存整備の目的

梶谷城跡は、文禄の役松浦家供養塔と共に松浦市にあって県の指定を受けている貴重な史跡であり、本市を代表する文化財である。そこで現存する遺構及び発掘調査で確認できると推定される建物跡などを復元し、城郭の姿を明確にするとともに導入路や駐車場等を含む施設を整え、多くの人々が集える史跡公園として保存整備する。

梶谷城跡は、本市にとって重要な史跡であるのみならず、松浦党が拠った比較的保存度の高いスケールの大きな中世山城として全国的視野からも注目されるもので史跡公園として保存整備が必要である。このような積極的な活用を図ることは、単に城跡を理解することだけにとどまらず本市の文化財に対する愛情精神の高揚や郷土に対する関心を深めることを助長することに役立つと考えられる。

#### (2) 保存整備の指標

梶谷城の史跡公園としての整備は、今後多くの過程を経て決定することになるが、現時点における 城跡の保存整備の指標として次の3点があげられる。

- ① 中世城郭としての性格を明らかにした上で、部分的な補修・復元など城郭を永久保存するため の文化的観点からの整備。
- ② 来訪者が城郭を自発的に観察し、郷土の歩みを全国的視野から理解できるような教育的観点からの整備。
- ③ 以上の①②を踏えて地域の特色ある歴史を活用して地域の活性化を図る町づくりの観点からの整備。

すなわち梶谷城跡の整備は、松浦市さらには全国民の貴重な史跡として文化財的視点からの保存及 び教育的視点からの学習を根底に置きながらも、地域の活性化・個性ある地域づくりの地域のシンボ ルとして配慮し、魅力ある保存整備を図る必要がある。

#### 2. 保存整備の方針

#### (1) 保存整備の考え方

①城跡・史跡としての保存整備

梶谷城跡の史跡としての最大の特性は松浦党とのかかわりがきわめて強く、とくに初期の松浦党の居城であったと推測される点であるが、これを明証する史料を欠いているため十分な保存整備の根拠とはなり得ていない面がある。しかし他方、中世の城跡については史料が十分見い出せていない場合は少なくなく、梶谷城跡のように遺構の残存状況・歴史的背景からみて、その可能性が高い城跡についてはこのことが史跡としての価値を低くする理由となるものではない。明証する方法としては他に発掘等もあり、梶谷城跡においては遺構と思われる地区が多いので発掘調査等により漸次資料を備えて歴史的裏付け、背景を明らかにする。歴史的環境である城跡の保存整備の形態を城郭の有無、史跡か否かによりパターン的に分類すると大きく次の四つに区分される。

- A 城郭史跡~城郭が残存し、史跡に指定して保存している(例 熊本城等)
- B 城趾史跡~石垣等の普請のみが残存し、史跡に指定して保存している(例 原城、田中城等)
- C 城郭公園~城郭は残存しているが史跡としてではなく公園として利用している (例 島原城、 平戸城等)
- D 城趾公園~石垣等の普請のみが残存しているが史跡としてではなく公園として利用している (例 鹿島城、秋月城)

梶谷城跡は石垣等の普請が残存し、史跡として保存されており基本的には「城趾史跡」に分類されるが、周辺を含めた城跡ゾーンでは良好な景観・自然環境を活用した展望等の自然レクリエーション空間としての利用もとり入れた保存整備が可能であり、やや広い範囲では「城趾公園」としての性格も備えた史跡である。

#### ②空間としての性格づけ

梶谷城跡とその周辺がもつ主な空間的特性としては「保存と利用」、「歴史と自然」という二つの点の軸が指摘できる。梶谷城跡は県指定史跡地、梶谷城跡を含む周辺地域は県立公園普通地域であり「歴史と保存」及び「自然と利用」の二つの空間的性格をもつ地域として位置づけられる。すなわち「歴史公園」については一般的には島原城・舞鶴城(歴史公園に指定される予定)等のように市街地に位置し、城郭等が残存しているような場合が多く、梶谷城跡のように山林・農地に位置し、石垣等の残存が中心である場合には適しているとはいえない。また、「自然公園・特別地域」については貴重な植物群落及び特殊な風致・景観のように完全な保存が必要な場合が多く、梶谷城跡が指定されている北松県立公園普通地域はむしろ景観等を観光等に活用する地域である。

梶谷城跡のような史跡の保存には単に史跡区域だけでなく史跡にふさわしい周辺環境が必要である。梶谷城跡との周辺は、自然公園普通地域であり、形態的には史跡を自然公園区域がとり囲む形態となっており、これを活用する。すなわち周辺の自然公園区域は緑地等の保全を図る区域であり開発等にあたっては届出が必要であり、史跡の周辺環境として適しており、一体の空間として機能できる。

#### (2) 保存整備の方向

城郭ゾーンの具体的な保存整備は、保存と利用及び歴史と自然の目的に対応した段階的な土地利用 計画にもとづき行う。土地利用としては、城跡地域を外に中央に史跡地区中間に城跡保全地区の三つ の地域・地区で構成する。(この三つの地域・地区は重複する)

#### ①史跡地区

郭跡・館跡等の遺構と思われる地区を対象とし、基本的に保存する地区である。区域内はさらに次の地区で構成する。

- A 遺構地区~郭跡地区·館跡地区、南部遺構残存地区
- B その他の地区~史跡緑地、便益施設地区

史跡として保存する地区であり、史跡に指定し(一部既に指定)公有化を図る

#### ②城跡保全地区

史跡地区と一体となって城跡としての風致を保全する地区である。外部からは城山として一体的な景観を構成するため、南部の一部を除くとほぼ標高120mより上の地区とする。区域内はさらに史跡周辺緑地、便益施設地区、城跡の風致を保全する地区であり、緑地保全地区等に指定する地区で構成する。史跡周辺緑地は、史跡の見学等の散策用の園路等以外の整備は規制し、緑地を保全する。

#### ③城跡地域

史跡地区、城跡保全地区の環境を保全するとともに自然公園として緑地の利用も図る地域である。 城跡保全地区及び周辺の緑地であり、県立自然公園の一部・一般山林・農地を含む地域で構成する。

#### 3. まちづくりと保存整備構想

- (1) 今福地区の保存整備
- ①歴史探訪ゾーンとしての保存整備
- A 歴史ネットワークの形成

梶谷城は松浦党の初期の城跡と考えられ、その歴史的背景、松浦家ゆかりの地が今福地区に見られるので、梶谷城跡の保存整備とともに今福地区の松浦家ゆかりの地とのネットワークを図る。

今福地区の松浦家ゆかりの地は「旧道~丹後橋~松浦親・定の供養塔(県文化財)~若宮神社~梶谷城跡」を結ぶルート「歴史の道」(幹線)と位置づけ保存整備を図る。

#### B 歴史広場の形成

「歴史の道」と国道 204号の交叉部は梶谷城跡への入口であり、「歴史広場」と位置づけ、梶谷城跡は今福地区の歴史の「情報センター」とする。「歴史広場」は梶谷城跡への入口部にふさわしい景観とし、情報センター、物産店等も昔風の建物とし外部には石垣等も活用する。

#### C サイクリングコース・センターの整備

松浦家ゆかりの地は今福地区の全域に分布しているのでこれを探訪するのに自転車を利用し、自転車で行けるところまで自転車で行き、あとは歩くようにする。「歴史の道」の幹線はサイクリングコ

ースとして整備し、「歴史広場」にサイクリングセンターを設ける。

②自然レクリエーションゾーンとしての保存整備

自然レクリエーションゾーンとしては、展望・散策・学習地区、野外活動地区及びマリンレジャー 地区の三つの地区より構成する。

#### A 展望·学習·農園地区

梶谷城跡を中心とする城跡ゾーンである。梶谷城跡の主郭部及び天守台からは、伊万里湾及び国見 岳山麓全域が眺望できるので、主郭部は展望広場として整備する。

この展望区域の中で、南部の石倉山は大規模な「地すべり」が発生しており、その原因は原因は現在調査・研究中である。今福地区には「地すべり」及び「地すべり危険地区」が多く「地すべり」等地学の学習の場でもある。城跡保全地区の入口部に位置する西側(下方)区域の境界からフモト溜池にかけては果樹園であり、農園ゾーンとして利用する。城跡保全地区の全域は展望広場・農園を中心とした散策ゾーンでもある。

#### B 野外活動地区

城跡保全地区の北部太田溜池周辺(約50ha)は今福地区の眺望がよく地形も緩やかであり、自然公園エリアの中心地区・野外活動地区と位置づけたい。主な機能としては、不老山総合公園が花木観賞・軽運動等を中心としていること、運動公園は別途整備されているので牧場・農園、アスレチック・グラスキー、ボート乗り等のような機能が考えられる。

#### C マリンレジャー地区

ぎぎが浜海水浴場は、周辺の海岸と一体化して人工海浜としての整備が計画されており、自然公園におけるマリンレジャー地区と位置づけたい。ぎぎが浜は梶谷城城主源久が来着した場所ともいわれており、整備にあたっては景観的配慮が必要である。

#### (2) 歴史を活用した地域づくり

#### ①歴史的な文化地域(都市)づくり

松浦市及び周辺地域には、梶谷城跡をはじめ松浦党関連の城跡が40以上もあるといわれており、この背景には多くの歴史が埋れていることは間違いない。他方、本市及び周辺地域は昭和30年頃最盛期であった炭鉱の閉山により地域の基幹産業の一つを失い、人口減少にみられるように地域が衰退し、その後は地域振興が最大の課題であったため文化の醸成とくに文化財の保存・活用等による地域づくりが十分とはいえない面もあった。しかし、最近は経済的には企業立地等にもみられるように活性化の方向にあり、広域的には情報化・ソフト化が進んでおり、今後は歴史的な文化を生かした地域づくりが必要であり、その主な方向は歴史情報センターとネットワークづくり及び保存と開発が調和した地域づくりの2点であると考える。

#### A 歴史情報センターとネットワークづくり

現在は情報化時代といわれ、都市づくり等でもインテリジェント地区、さらにインテリジェントビルまでがつくられている。梶谷城跡を含むいわゆる「県北一帯」では、梶谷城跡・直谷城跡をはじめ

松浦党関連の史跡等でさまざまな調査 (一部では発掘調査) 等が実施され、また各市町には歴史資料館もつくられているが、これらを総合し、情報センターとしての役割をもつ「松浦党資料館」(仮称)というべきものはまだ整備されていない。今後、本市及び周辺地域が文化面においても「情報発信基地」として発展していくには、各史跡・歴史資料館等とのネットワークをもつ歴史情報センターづくりが必要である。近年、諸外国では、ショーケースでの展示を主としている博物館についてその限界が指摘され、歴史的風土・環境を生かした「エコミュージアム」(生態博物館、生活・環境博物館)がつくられている。これは、まずセンターで情報を収集し、その情報にもとづき現地で見学・調査する方式である。前述した「歴史情報センター」と「各史跡」等も同様なネットワークを形成する方式としたい。

#### B 保存と開発が調和した地域づくり

歴史的環境を地域づくりに生かしていく場合、現実的には開発との関係が重要となる。例えば、「ぎぎが浜」は、その名称は砂浜から発生する音からつけられ、また源久が土着した地ともいわれ、顕彰碑が立てられているが、将来計画では人工海浜化が予定されている。人工海浜では一般的には護岸が建設される場合が多いが、護岸がつくられた景観からは源久が土着したといわれる鎌倉時代の風景を思い浮かべるのは困難な面がある。したがって、人工海浜とする場合でも、護岸を建設しない又は歴史的舞台としての景観をそこなわないような整備が求められる。

史跡等の文化財と観光計画等のまちづくり計画との調和ある関係、すなわち、地域の文化財の保全の方向と産業振興としての観光の方向とは、必ず一致するものではないが、これに地域特性、景観・修景の方向を含めて総合的な観点から「まちづくりと文化財保全の方針」を設定し、この方針にもとづく具体的な文化財保存整備(計画)、景観形成(計画)及び観光振興(計画)を進め、調和ある地域づくりが必要である。梶谷城跡等の城跡保存整備計画は、この文化財保存整備(計画)の一つと位置づけられる。

#### ②特色ある地域づくり

地域の活性化を図っていくには、まず地域のことを多くの人が知りまたイベント等を実施した場合は多くの人が来訪することが必要であるが、本市及び北松地域はその点としては必ずしもよく知られている地域とはいえない。むしろ、周辺都市の平戸市(長崎県)が観光地としてまた伊万里市(佐賀県)が焼物産地として知られている。したがって、松浦市及び周辺地域を特色づける要素が必要であるが、松浦党及び梶谷城跡については歴史的にもユニークであり、しかもその内容には謎が多く、主に地域のアイデンティティーづくり、観光地としての特色づくりの2点で、本市及び周辺地域を特色づける要素をもっていると考える。

#### A 地域のアイデンティティーづくり

松浦党は、次の点で本市及び周辺地域の独自性を表現する要素をもっている。

- イ 松浦党、特に党という表現がユニークである。
- ロ 松浦党は鎌倉・室町時代に中国・朝鮮と交易(掠奪を含む)をした倭寇として知られている。

ハ 松浦党そのものについてわからないこと (謎といってもよい) が多い。

イ・ロともに北松地域自体で使われた表現ではなく、イについては中心となる人物がいない勢力を 社会的に多少卑下した表現という説もあり、ロも被害者である中国側の表現であり、アイデンティティーづくりの要素としては、必ずしも適した表現とはいえない面もあるが、松浦党そのものについてはハのわからないこと(謎めいていること)と、また現在では歴史的意味等にとらわれないかたちで表現として、ユニークなものとなっており、その使い方によっては、アイデンティティーづくりとして活用できる要素をもっている。したがって、以上のような特性を生かして、例えば次の分野での利用が考えられる。

- ・ 松浦党シンポジウム (倭寇としての活動を含めて)
- ・ 松浦党による祭り等のイベント
- ・ 松浦党の表現を生かした物産品

ただ、アイデンティティーづくりは、表現・デザインともに高度に洗練されたものであることが必要である。一般的であればかえってイメージダウンになる恐れもあるので十分な検討をもとに実施することが必要である。

#### B 観光地としての特色づくり

歴史的環境を生かした「歴史探訪」としての活用が考えられるが、その要素は松浦党関連の城跡が40以上もあるのを活用した城跡めぐりと松浦党は、倭寇とよばれるように中国まで出ていき松浦水軍とよばれる。前者については、城跡めぐりだけでも数が多く、観光コースとなりうるが、松浦党関連の城の特色(縄張)等が見い出され、または、松浦党渡海大峰火をのろし祭等を行う(長崎県県北地域・観光レクリエーション開発整備計画による提案)ことができれば、さらに魅力ある観光となると考えられる。

松浦水軍さらに海の活用は、北松地域は海で囲まれ、島も多く、北松地域のイメージとして適している。海上交通は、車の普及により冬の運行問題等短所だけが目立っているが、近年は、高速艇の就航等により、大きく改善され、今後普及・発達が期待されている。したがって、海上交通、海の観光レクリエーションの振興により「新しい松浦水軍」を創造していく方向も考えられる。

平成4年度に作成した「史跡松浦党梶谷城跡保存整備基本計画策定報告書(第2集)」には「保存整備計画」基本方針として平成3年度から平成14年度までを第1期から第3期までに区分して整備プログラムを設定している。しかし、現在までのところ第1期の館跡・郭跡地区の発掘調査(第1次調査)が終了したのみで、第2期・第3期までは進んでいない現状である。ただし、今福地区においては平成12年度から梶谷城を拠点に活躍した先人を敬うとともに、地元住民に元気と勇気を与えることを目的に「梶谷城跡まつり」が開催されている。平成14年度の第3回梶谷城まつりでは、史跡めぐりウォーク、武者行列、イルミネーション、郷土芸能などが取り組まれている。今後も地域に浸透したまつりとして期待されているところである。 (中田敦之)

# 第Ⅵ章まとめ

梶谷城跡は、城郭研究者の間では大規模な山城として知られていたが、今日までその実態は明らかにされていなかった。中世山城としての遺構の残存状況も良好で、城郭史研究上重要な山城とされ、いわゆる「松浦党」といわれる武士集団に関する歴史的研究の中でも避けて通れない城である。これまで概要の紹介や資料的報告はあったものの、発掘調査及び地形測量等は行われていなかった。今回、基礎資料の提示という意味を込めて報告書を作成することとした。本文に記すとおり、地形測量等の基本調査・分布調査を行い、その結果を受けて平成2~5年度にかけて、梶谷城跡に関する確認調査という手法を用いた。調査は一部の関連遺構の調査(南部遺構残存地区)を除き初めての試みであった。今後は文献調査を含めて石造物や金石文等の残された資料を最大限に活用してこそより有効な検討が行えると思われるため継続して調査を行いたいと考えている。なお、紙面の都合上松浦党に関する研究は瀬野精一郎氏・故古賀稔康氏・外山幹夫氏等を初めとする多くの研究者によって論述されているためここではあえて考察をしていない。梶谷城及び松浦氏の出自に関しては本文に記すとおり、ここでは郭跡地区の石垣の状況について検討していくこととする。

郭跡地区は約8,000㎡を占め主郭の石垣、副郭の石垣の築石にいくつかの違いがみられることであ る。そのひとつは、主郭を取り囲む石垣に野面石または粗割石を用いた技法を認識し得るのに対して、 副郭の方はやや偏平な石材の小口部分を使った石積みで概ね積み上げられているにすぎない点であ る。前者の技法としては、縦石積みあるいは算木積みを採る隅角部やシノギ角の造り方などに特徴付 けられるものをもっている。これらの箇所には後世に修復されたのではないかと思われる石積みがあ ると北垣聰一郎氏は指摘している。このことも問題となろうが、残存しているものからは、整然とし た総石垣の曲輪及び虎口の構築に係る「技法」を確認することができる。その一例として、本丸東側 の櫓台部分の構築状況がある。ここでは隅角部にひとつの特徴があり、粗割りした石材の控えが短く その稜線はほぼ直線的に通っているものの左右の引き違えがほとんど認められない算木積みの様相を ほとんど窺えないという積み方を呈している。この石積みの技術は肥前名護屋城跡天守台石垣及び三 ノ丸北櫓台の隅角部や熊本城跡大天守台南西隅角部等でも確認されてはいるものの類例としては少な くかなり特徴的な技法として捉えられている。このことは時代性を示すものとして考えるべきもので あろう。つまりこの梶谷城の石垣には文禄・慶長期以降の様相を各所で窺えるのであり、これらの点 を捉えてみると、梶谷城が単なる一地域の城として存立していたのかという城史にも関わってくる。 この点について、村田修三氏は「梶谷城は松浦氏の居城といわれるが、その石垣はやはり慶長初年の 特徴を示している。城跡の立地からしても慶長の役の陣跡群の一つとみて間違いない。」と考えてい る。つまり梶谷城跡の総石垣内桝形虎口及び高石垣などは豊臣政権の築城技術の影響を強く受けたも のと思われる。時代的には名護屋城を初見とする文禄期以降の特徴的な技法と思われ、従来の石垣編 年の基本軸である「算木積み」様式の発達過程上には発生し得ない、別の技法である可能性もあり、 今後、重点的に分析すべき石垣の一様態である。

そこで問題となるのが副郭地区の築石である。石積みは節理にそって剥離した控えの長い石材と控 えの短い石材との組合わせで横長石を水平になるように配石しているが横目地の通りを意識するもの ではない。石材のバランス及び強度には関心が払われておらず完成したノリは直角に近い。北側の東 面の平入虎口部分は算木積みが未発達で中でも向かって右側の二番角石の支えに横長の小石を二段積 みは天正・文禄期の定法にはない構造であり、永禄年間頃を前後する時期の技法である可能性が高い。 九州地方に所在するいわゆる近世城郭のなかで、新たな「技法」の採用によって石垣を築く城郭の 在り方をみていくと、この梶谷城のように既存の地域の城を大改造していく例と在来の城を破却して 新たな地域に築城する例におよそ分けられる。前者には名護屋城跡・岸岳城跡・佐嘉城跡、長崎県原 城跡、熊本城跡・人吉城跡、延岡城跡など、後者には福岡城跡、唐津城跡、長崎県玖島城跡・島原城 跡、熊本県佐敷城跡などが考えられる。そして、それら各城郭の成立した状況を捉えてみると、その 構築「技法」の導入のきっかけとしては、当初は天正15年の豊臣秀吉による平定であり、その際の九 州各地への大名配置であるが、さらに文禄・慶長の役、豊臣秀吉の死による関ヶ原の戦い後の大名再 配置にも係わってきていることは、十分に推定できよう。ところでこれら石垣普請を進めるための命 令者は各大名であろうが実際の普請を行っている石工がどのような人物なのかという重要な問題が残 っている。現在、九州の城郭に携わった石工として筑前の黒田氏に召し抱えられた小河長右衛門・戸 波六兵衛・戸波次郎左衛門等が諸氏の研究によって確認されており、石工の出身あるいは祖先は「江 州」「穴太」いわゆる「穴太衆」に系譜を持つとされる例が多い。このことは、当該の石工集団の存 在が確認されていない地域においても有効となるのではなかろうか。梶谷城跡でも穴太積みと確認で きる箇所がある。この肥前地域の中で、その前代の城郭と比較してみると、三城から玖島城、日野江 城から原城への移り変わりは、縄張り・築城技術・規模などのいずれを取ってみてもその地域におい ての大変革として認識できるものであり、特に高石垣の構築に際しては、前代までにまったく存在し ない新たな「技法」の導入を必要としたことは、該当する城郭の石垣の現状からも明らかである。そ れほど、前代までの技術との差は大きいものがあり、そこに地域からの自然発生的な技術の向上を窺 うことは、困難といわざるを得ない。今後はこの高石垣に関して他の各地域に於ける事例を探るなか で、改めてその実態に迫ってみることとしたい。「石垣」はその城の創築時から現在に至るまでの変 遷を現状そのままで物語る希少な資料ともいえるのである。

最後に、現時点での梶谷城の年代は、 I 期が山頂を削平して天守台を残した時期であるが不明な点が多い時期である、 II 期が副郭の築石の永禄年間頃を前後する時期、 II 期が総石垣内桝形虎口及び高石垣等の豊臣政権下での築城技術の影響を強く受けた既存の城郭を利用した部分的修築の時期、 IV 期が江戸期の修復の時期の年代があるのではないだろうかと考えている。中心となる出土遺物も16世紀末から17世紀初頭に属する陶磁器類で、高石垣の構築年代と一致している状況である。

この梶谷城跡の発掘調査及び報告書作成にあたっては多くの関係者にご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。また、この報告書が学術研究及び郷土学習の資料として、地域の振興のため少しでも役立つことを祈念するものであります。 (中田敦之)

#### 【引用・参考文献】

高瀬哲郎 1997 「九州における近世城郭の石垣について (その三)」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要第3集』佐賀県立名護屋城博物館

# 図 版



## 図版39



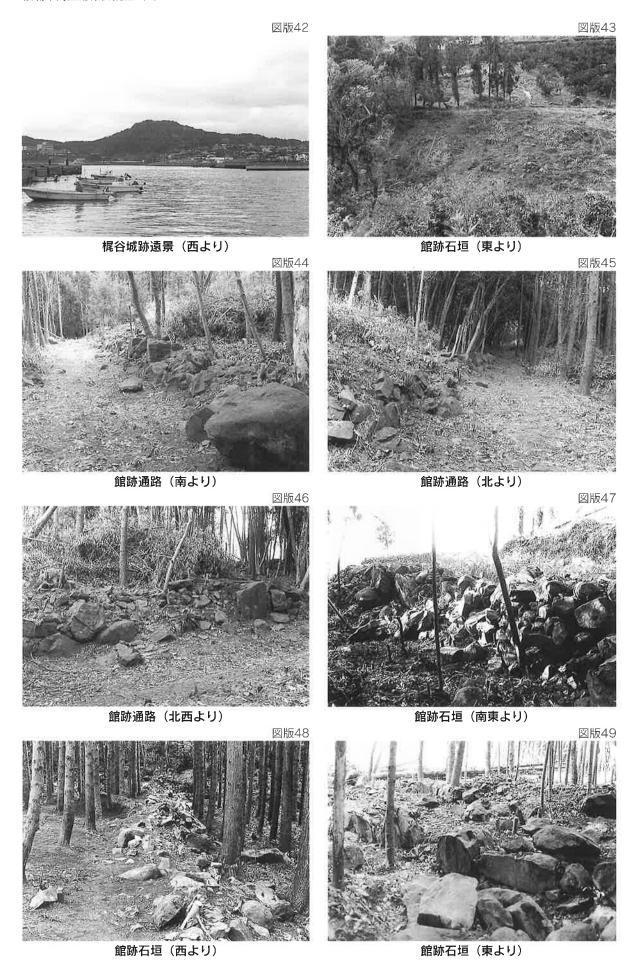
梶谷城跡遠景(南東より)

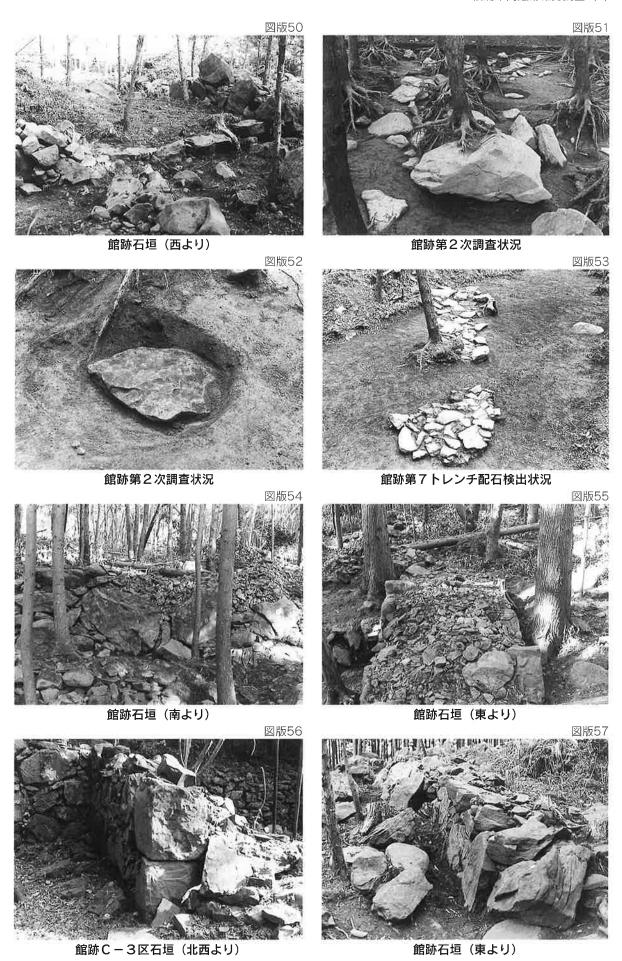


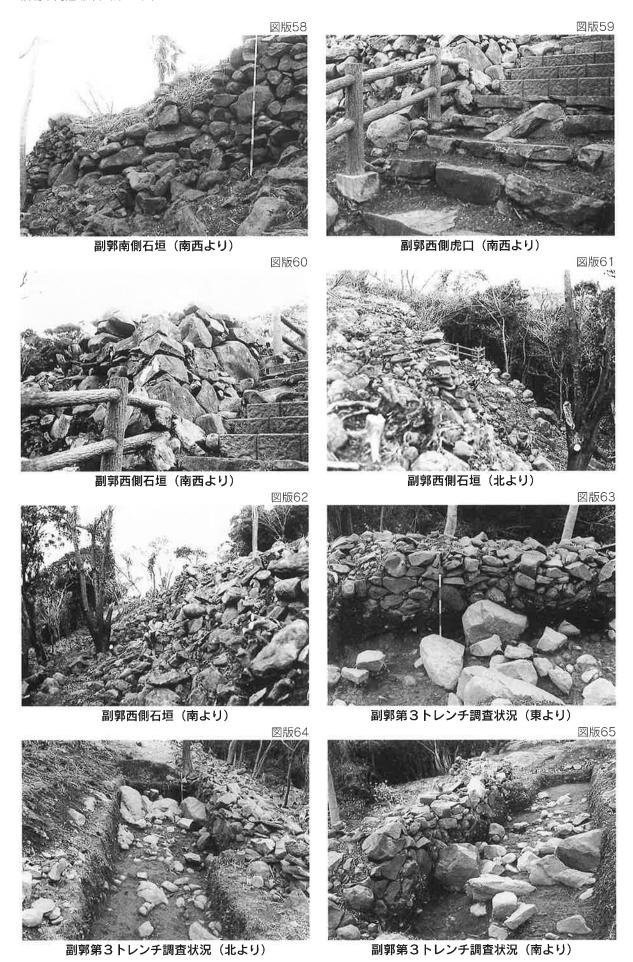
梶谷城跡遠景(上空より)

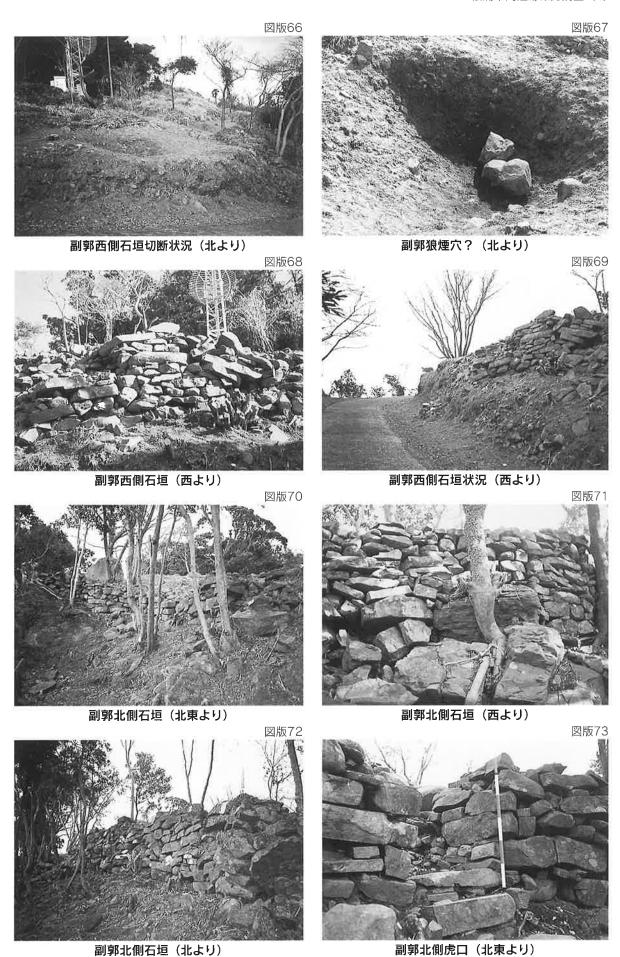


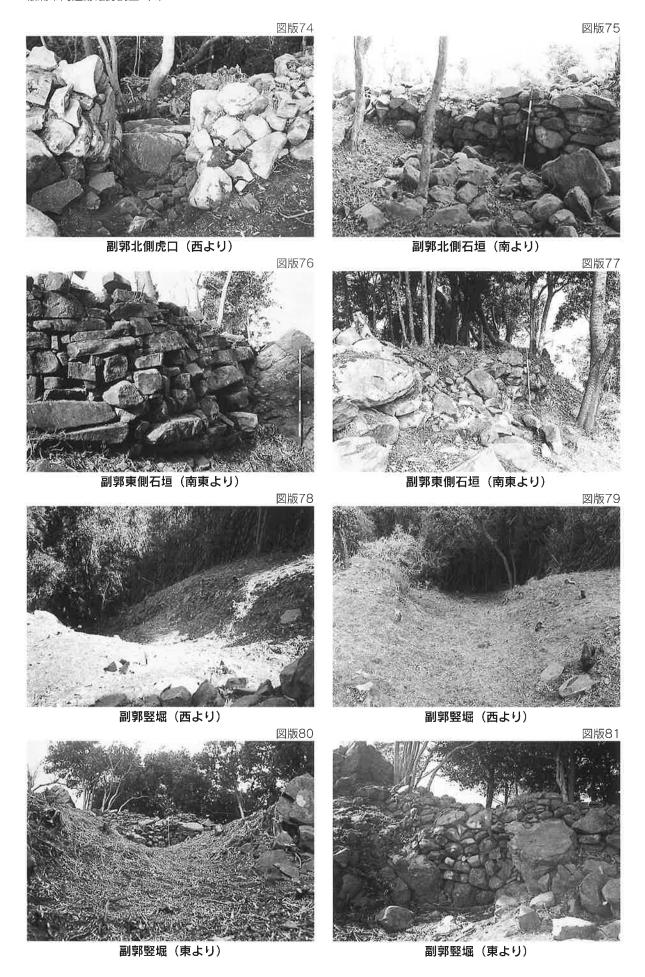
梶谷城跡遠景(西より)





















主郭第2トレンチ検出状況(南より)



主郭第3トレンチ検出状況(東より)





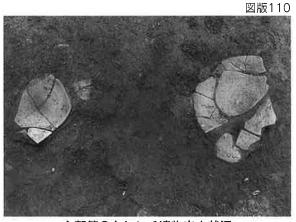
主郭第4トレンチ検出状況(西より)

Zinix TUO

主郭第6トレンチ検出状況(南より)



主郭第8トレンチ検出状況(北より)



主郭第3トレンチ遺物出土状況



主郭第4トレンチ柱穴内遺物出土状況

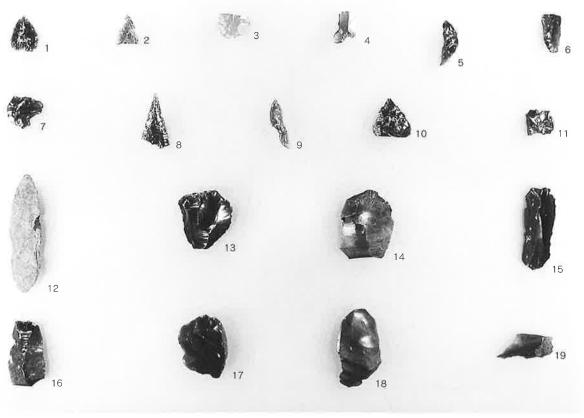


主郭大手門柱穴内遺物出土状況

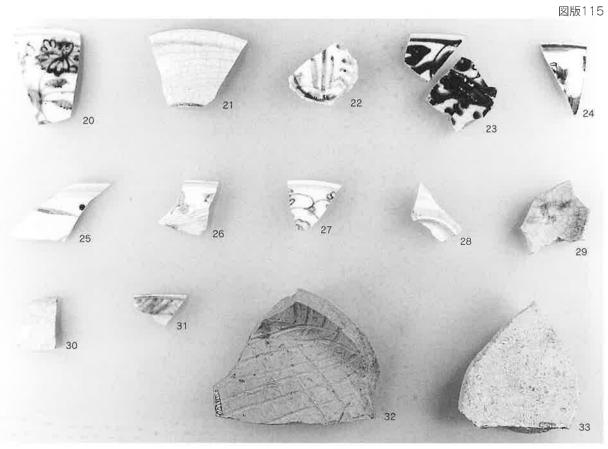


調査風景

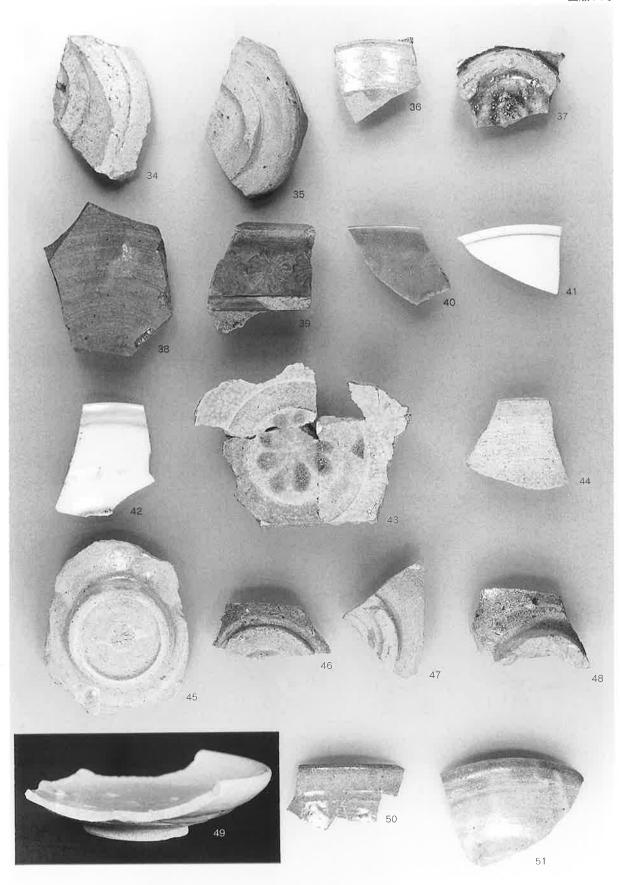
図版114



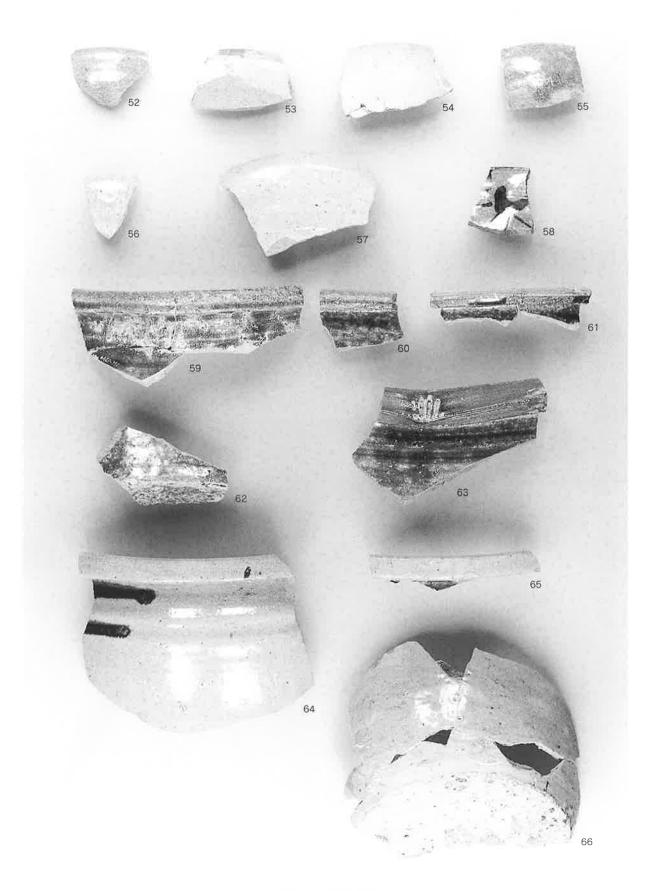
館跡出土遺物①



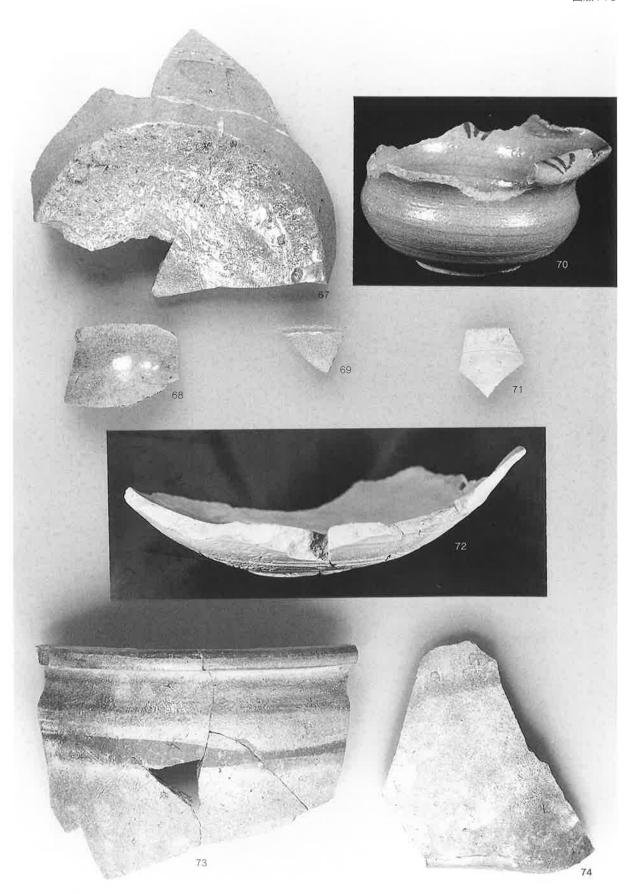
館跡出土遺物②



館跡出土遺物③



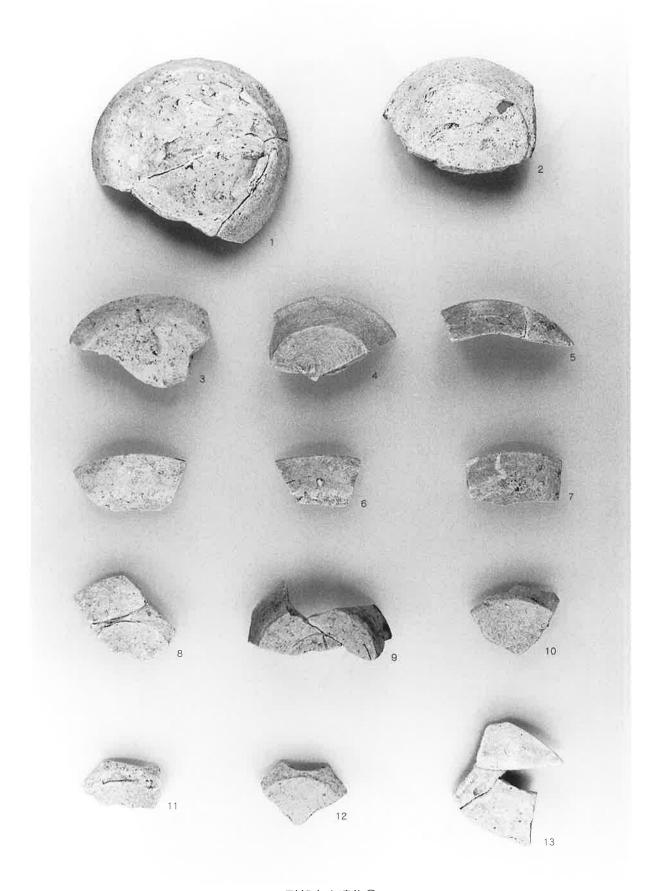
館跡出土遺物④



館跡出土遺物⑤



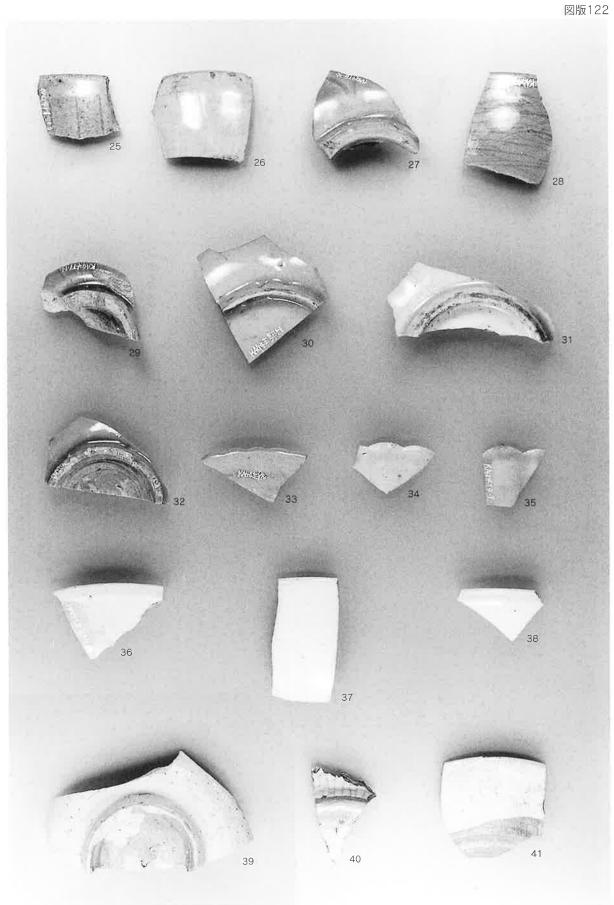
館跡出土遺物⑥



副郭出土遺物①



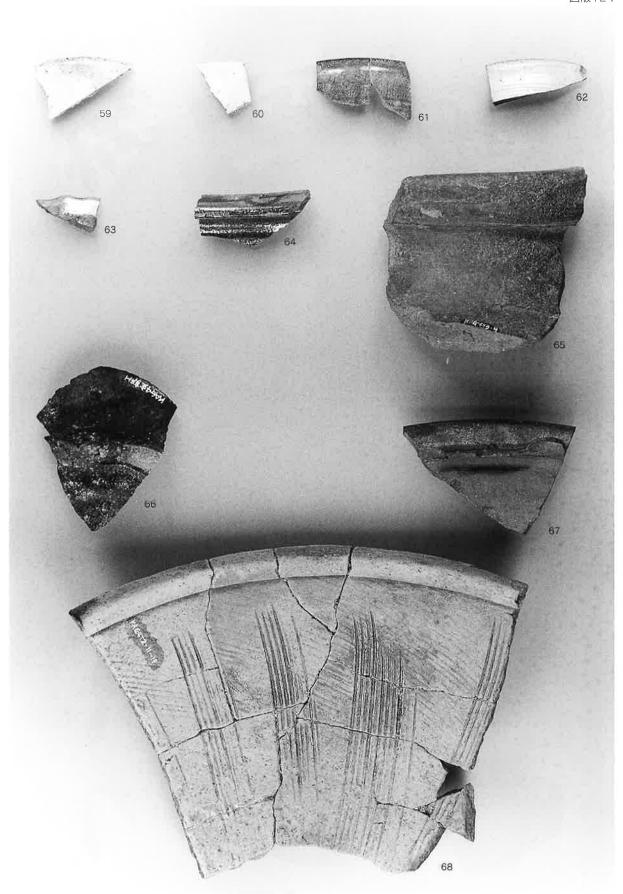
副郭出土遺物②



主郭出土遺物①



主郭出土遺物②



主郭出土遺物③



主郭出土遺物④

# 報告書抄録

ふりがな	たまつ	うらした	1.11.14	ナキかく	にるた	トろろ					
		まつうらしないいせきかくにんちょうさ 松浦古中海琉璃羽書本 (4)									
		松浦市内遺跡確認調査(4)									
		史跡松浦党梶谷城跡確認調査報告書									
	欠										
シリーズ名	名   松浦市	松浦市文化財調査報告書									
シリーズ番号 第19集											
編著者名	名中日	田 敦	之	・ 明	石 拡	子 ————					
編集機関	関 松浦	<b></b>	員会								
所 在 均	也 〒85	9-459	8 長	:崎県松浦	市志佐	三町里免365番	地 TEL	0956-7	2-1111		
発行年月日	日 西暦	2003	年3月	31日					=		
	ふりがな 所 在 地		ード 遺跡番号		緯, "	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因		
	が き		8 1	33°20 ~21	)' 45" .' 00"	129° 47′ 20′ ~47′ 30′	19911227	145 m²	学術調査		
0	李福 町						19921208 ~ 19930131 19931129	200 m²	学術調査		
							~ 19940204 19940516 ~	70 m² 150 m²	学術調査学術調査		
							19940714				
所収遺跡名	3 種	別	主な	な時代	Ξ	Eな遺構	主な遺物	特	記事項		
梶谷城跡	館		中 桃山				輸入陶磁器、古唐津陶器備前陶器、土師器、銅銀黑曜石製石銀石槍	銭	<b></b> 早指定史跡		

松浦市文化財調査報告書 第19集

# 松浦市内遺跡確認調查(4)

史跡松浦党梶谷城跡確認調査報告書

平成15年3月31日印刷平成15年3月31日発行

発行 松浦市教育委員会

長崎県松浦市志佐町里免365番地

印刷 株式会社 三 光

佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1